鏡の類が詰め込まれた。其間には燃料の炭薪が入れられて、それに火が移される。莊嚴な式が行はれて、そして火を吹く大きな鞴が働き始める。其光景は壯觀であつた。女子は其場に許されなかつた。個强な男子ばかり大勢揃ふて兩方に分れて立つて居る。そして交る〳〵鞴にかゝる、一時に兩方二十人ばかり、鞴の大板に乘つてシーソウのような調子で掛け聲かけて大騒ぎで風を送る。

金が焙け、熔液の色が程好くなるのを待つて爐を切り貫く。中から濃い血の樣に熔けた金が流れ出す。そして鑄型に道を辿つて進むで行く。

出來上つた鐘は村中の老若男女打揃ふて大綱小綱に取附いて、和尚を先導に寺へ引かれた。其日は全村お祭同樣な賑で踊や何かゞ所々に催ふされた。中にも佛事に因む盆踊は男女假裝で面白く夜中續いた。

其翌日の晩から此鐘が撞かれ始めた。其初音は非常な興味と好奇と恐怖と憂慮を以て待たれた。常識あるものは興味を持ち、子供等の如き無邪氣なものは好奇に驅られ、鏡を納めて迷信に囚はれた婦人等は恐怖を抱き。和尚を初め此工事の當事者は憂慮を懷いた。丁度母親其他が產れる子供の聲を聞くが心配なように聞くものは鐘の聲に心を込めて耳を澄

ませた。活鐘か死鐘か判斷の界であつた。撞かれた鐘は美しい音で響いた。衆生の心は初めて安堵した。顏の笑は皆な一樣であつた。

鐘の響は思はず鏡を偲ばせた。そしてそれが多くの婦人の心には自分等の若き時代の笑顏をも連想させたに相違ない。花嫁の寶は鏡と笑顏であつた。其の鏡の面は常に曇なきよう、錆びぬよう、注意と努力と保存とが必要であつた。古風の金の鏡の面は心配な、厄介なそして危險な性質であつた。曇り易く、曇れば顏の美が削がれる心地がする。錆び易く、錆びぬためには其面が磨がかれ通しに磨がれねばならぬ。そして又た破れ易い、破るれば婦人の凶として忌んだ。堅い丈夫な金の鏡に古の婦人は何れ丈け苦心したのか知れぬ。現實的の敎の反動であつた。

近代の硝子鏡は其心配を去つた。鏡に添ふ道德習慣の束縛も解けた。事實鐘に鑄潰した鏡のために婦人は社會特種の壓迫から救はれたと同一である。梵鐘の音が朝夕空に響く毎に自由な空氣に打たれるような特種な感を婦人の心に惹起すであらう。現實的に對する幽玄的な敎の結果である。

金の鏡と硝子鏡を比較すれば說明を待たずして其相違が直ちに分る。其相違の中最も著

しい特徴は指を鏡の面に接すれば、金の方は、本當の指と影の指とに界がない。之れに反して硝子の方は界がある。其界の距離は硝子の厚さである。之れが兩種の鏡の最も著しい特徴である。此所に曇る心配の有無や、錆びの厄介や、何かが潜んで居る。

金の鏡の美點は實體と影體とを少しの變化も間違もなく言はゞ實物のまゝ映し得る點である。此鏡面は幾何學の面と等しく厚さがない。絶對表面若し現在と云ふ時の觀念が得たければ此鏡の面を思へば明かに了解出來る。併し金の鏡でも實物が見えると思ふは誤である。唯だ自分の影と自分の實體との距離が極めて近いと云ふに過ぎぬ。硝子鏡は此美點がない。無いのではないが、得難い。得るには非常の努力苦心がかゝる隨て價が高い。それでも絶對に金の鏡のような美は得られぬ。普通の硝子鏡は言ふまでもなく長い顔が平たく見え、ばつちりした目が細く見えて、見る人の眼を欺く。そして心が迷はされる。

硝子鏡の目的は鏡面の光を他の影響から遠ざけるが主眼である。鏡面は曇らぬ、曇れば單に硝子の面が曇る、硝子の性は透明にして空氣に觸れても酸化せず、他の物にも犯され難い。曇れど空の霞のように拭へば後は清氣の透る無限の青空同樣である。鏡の面に實體を接しても影とは觸れぬ。兩者の間に距離がある。此距離は鏡面の保存のために必要てあ

る。無くなすことは無論出來ぬ。少なくしたいが理想である。さうすれば硝子が弱くなる、隨て鏡が毀れ易い。實際の鏡の面は硝子の表でなくて裏である。

金の鏡と硝子鏡との特徴は稍以上の說明で分つたと假定しても尙ほ一つ見遺されぬ特徴がある。

金の鏡の實體は不透明である、そして其內容は脆弱な暗黑な組織でめる。唯だ其表面のみが光つて居る。之れに反して硝子鏡は透明な實體を持ち、其實質は技工の如何と厚さに由つて堅牢に製される。其光は硝子の裏に附着せる水銀面と硝子の實體で保たれる。金の鏡と硝子鏡の性質は現實的な敎と幽玄的なそれとで支配される兩種の社會と同一な眞理がある。

儒敎の理想は現在主義である。儒敎に支配される社會は靑銅の鏡同樣である。儒敎を實際的と信ずるは誤つて居る。實際に近い丈けで實際ではない。近いからとて鏡の影が捕へられぬと同一に儒敎も亦た捕えられぬ。他の幽玄な敎と其點は毫も異なる所はない。唯だ實際と理論と相近さと、其理論が實際其儘であるがために適切に人の感を引くのである。理論は何所までも理論である。社會の敎として人を導くに効ある所以は實際に近く適切に

して人心の美を保存するからである。社會的人心の向上に効あるは此點である。保守的國家が儒教を人心の收攬に適用するは之れがためである。

形式主義現實主義の儒教に囚はるゝ弊害は歴史が本である。歴史とは必しも社會の實情ではない。殊に東洋の歴史はさうである。社會の實情の眞を棄て、其形を文飾したのが歴史である。其歴史は社會道德の標準となり、人間をそれに由りて導くと云ふ。之れが儒教の理想である。

此理想に囚はれる社會の人心は表面に囚はれ、形式に流れ易きは必然である。其社會の内容は暗黑にして、脆弱のまゝ表面の光に匿れて居る。儒教主義の社會は現實、物質の社會である。青銅の鏡と其性質は同一である。僞善に馳せ、文飾に苦み、人心に自由を與ふることが出來ぬ。與ふれば腐蝕し弊を生ずるかちである。日本も支那も社會人心の積弊に堪へぬのは此不徹底な教の弊である。

佛教は社會の歴史を認めぬ。認めては佛教が死ぬ。佛教の眞體は硝子である。透明無色無限の厚さを持つ硝子鏡が佛教である。自己を無限の距離に見出すのが此教の主眼である。自己の心を鍛ひ、その努力に由りて透明なる心を得れば此目的が達せられる、之れが

此教の働である。自己を見出し得るものは本來の性を捕へたのである。自然進化の現實は之れに由りて達せらるゝ。趣味も努力も一致して湧出るからである。性の力は學問智識と關係はない。學問智識は性の力でなくて性の外形である。言ひ換ふれば學問智識の力は性を周圍の境遇に適せしむるが目的である。再言すれば個性を社會化するのである。社會化したる人間の光はそれ故に二樣に分れる。本來の性の光と外面の學問智識の光である。

本來の性の光は透明なる硝子の底に輝く水銀面に映る姿である。學問智識のそれは青銅の表面の姿である。兩者の光の性質と特徴とは硝子鏡と青銅鏡が說明する。眞理は同じだからである。

社會を厭ひ、世を遁れて孤獨超然として生を送る人間が主として佛教信者に多き所以は此教が本來の性を自覺させ得るからである。此の力に活きて人生の光を認め得るからである。併し社會から見れば不幸である。此不幸を救濟するは人生を救濟すべき理想の佛教を救濟するのである。

佛教は佛道でもなければ、佛法でもなく又た佛學でもない。佛教の眞體は透明なる自己である。此自己なしには明鏡と雖何の役にも立たぬ。佛教は教えるものでも教えられるも

のでもないのは事實である。僧侶が社會に立ちて佛法を說くは佛教とは全然沒交渉である。社會の佛法に歸依し、僧侶を信ずるは女性の愛に憧憬し、娼婦の操を信ずると同一である。共に迷に導かれ、捕へんと欲する眞如の珠は事實自己の幻影である。

社會を厭ひ佛道に依り、超然本來の性を捕へて淸雅な强い意義の生活を送る自信の人と雖尙ほ自己の幻影に耽つて居るのである。月に詠じ花に樂む其心が即ちそれである。月も花も自己の美なる影に過ぎぬ。彼等は未だ自己の本體を捕へ得ぬのである。自己の存在に達し、自己の位置を發見し得ぬのである。

自己の存在は安定不動である。自己の位置は一面から見れば絕對無限の距離にあつて、地面から見れば絕對に距離はないのである。地上に立つて一方に眼を放てば、自分を最も遠ざかるものは自分の背である。徹底せる佛教の眞意は自己其物の捕攫に過ぎぬ。此力は努力と趣味の一致である。活動の世に立ちて靜かなる心の存在に其位置が見出される。

幼時佛道を辿つて、其非を悟り、少年より儒道を辿つて尙ほ其道を踏んで居た大作は長島の一ヶ月餘の生活で學問の光と本性の光に疑を起した。其動機は彼が宿れる家の女主である。

眼に一丁字なく、廣く世間の見聞なく、生れ出でゝ、生れた位置に居りながら彼女は學問、智識の及ばざる人間の力と光を備えて居る。此力と光とは何であるか、彼はそれを究めたかつた。

彼女も寺や宮へ詣る信仰の人ではなつた。詣るのは信仰のためではなくて他のためであつた。伊勢參宮も彼の娘に對する愛のためであつた。自分のためでなくて、他のためであつた。彼女は自分を救ふものは他を救へと言つて居た。大作はそれを聞いて眞理があると考へた。

形式主義や、現實主義は自分を措いて他を救ふ餘裕はない。自分と自分の理想と相接して其間には餘裕がない。斯る社會の表面に立つて所謂生存競爭に囚はるゝものは、常に社會を靑銅鏡化して其美なる表面に立ち自分の影と離れぬつもりで努力する。自分が大きくなれば影も大く、奇麗になれば奇麗に見える。併しそれ丈けである。特に其鏡面を努力して磨かねば其影も保てぬように、現實主義者の理想は社會の狀態如何に由りて變化せねばならぬ。

女主が夫の生前家產の不動不變を信じ何の顧慮もなかつたのは鏡面の影に囚へられて居

たのである。然るに一朝夫の悲慘な死に打たれ、鏡面に拭ふべからざる曇のかゝつたとき、彼女は其影の如き家産の存在を見失つた。殘つた證書を燒棄てるまで反省したのは彼女の自己の發見の結果である。其自己は唯だの自己ではない。自己の實體を無限の厚さの透明な鏡に由つて見出した自己である。其鏡の透明なる實體は彼女の心であり、本性であつた。それが彼女の他を救はんとする慈悲の力と化したのである。

十六　愛と女性

愛は女性特有の天性である。自然進化は此愛の働なしには行はれぬ。愛に乏しき女性は進化に効を與へぬのである。女性の愛は特種の男性に接して發し、生兒に由りて收められる。女性は愛の塊である。愛を自覺せる女性は自己の發見が出來たのである。心の存在は之れに由りて確められる。悲境も意とせず、死も顧みず、纖弱な女性の身を以て如何なる周圍の境遇をも恐れざる決心は此自覺せる愛の力に由るのである。大作の宿の主婦が虎列拉に罹つて病める夫に口づから藥を與へた行爲は此一證である。逆境に投じて屈せず兒女の前途に一身を捧げて勇進したのは此愛の働の實證である。愛は趣味と努力の一致を兼ね

るのみならず、自信も、神秘も其内に潜んで居る。愛は自然そのものであるからである。之れなしには自然は消滅するからである。女性の德の重んずべき理由は此愛を尊重する所以である。女精の調伏は愛の復活に由りて祓はれねばならぬ。

長島に腰を据えた大作は學校の準備にかゝつた。彼は學期中ボートに專念ならんため夏休を利用し、途中でも何所でも英語と數學を豫習して居た。彼は三角術とゴールドスミスのヴイカー・オフ・エーキフイールドとを携へて居た。それが極まつた。次學年の主な教科書であつた。

英語の方は讀んだ丈けを毎晩のように靜かになつてから主婦に話した。彼女は悅んで聞いた。巧者な聽手であつた。聞くばかりでなく、批評した。鋭い批評者であつた。言ふまでもなく彼女自身の境遇が此話の内容に適切に觸れる場合が多かつたからである。

言ふまでもなく本書の内容は眞の人格と眞の愛との感應和合を說くのが主眼である。自由の意思に伴ふ社會の塵に染まぬ高潔な自然の性の働を說いたのである。言ひ換ふれば基督教の神髓である。

内容の主人公たる牧師は絕對の一夫一婦論者である。人口論など說くよりは健全で愛に

富む妻を迎へて丈夫な子供を擧げ、それを完全に育て上げて世に立たせるが遙かに勝ると信じて實行するのを理想とした男である。彼自身は言ふまで、もなく其理想の犧牲であつた。半生は逆境に沈み、理想の過半は殆んど徒勞に等しき結果であつた。併し後には立派な花を世に貢献し得た。其花は妹娘のソフィアである。

此内容を大作は毎夜一章位づつ主婦に話した。牧師が慈善の性に富んで居たこと。財産保管の銀行が破産して、平和で有福と信じて居た家庭が急に反對な境遇に逆轉したこと。住み慣れし土地を去つて他郷へ移轉すること。親の意見の衝突と境遇の變化のために長男と隣家の娘の相愛の情を割かねばならなかつたこと。一家族涙で親しき土地を去り數日の旅行の途次の旅宿で、宿の拂に困つて居たバーチェルと云ふ放浪者見たような風の男を救つたこと。其男が牧師には救はれた恩のあるのに關らず、自分を曲げて世辭を言はず、又た議論すれば自分の主張は主張として徹す勇氣を、牧師が甚く感心したこと。激流を渡る時、ソフィアの馬が物に驚いて暴れ出し、振り落されて危い所をバーチェルに救はれたこと。こんな話が最初から主婦の興味を引き起した。

ソフィアにはオリヴィアと云ふ姉があつた。二人の性格容貌は好い對照であつた。姉は

外貌の美に富んで、其美を衒ふ風があつた。妹は内的美で其美を守る質であつた。姉は他人の快活に遊んで居る場所には飛んで行き、妹は他人が不幸に沈んで居る場所には飛んで行くような相違があつた。

ソフィアはバーチェルの放浪的な外貌の中に犯すべからざる男性的性格を感じ得た。オリヴィアはそれを感ずる力がなかつた。オリヴィアには彼女の心を奪ふべき男子が他にあつた。其男は貴族の出で彼等の新たに住むべき土地の太守の甥であつた。彼は常に太守に代つて其土地に住まひ、太守は主に都に留まつて居た。甥は若くて、美男で、好色で、浮薄であつた。殆んど總ての若き美しき土地の娘は此男の爪牙にかゝつた。如何なる女も彼の心を捕へ得たものはなかつた。併し反對に如何なる女も彼のために誘惑されぬものはなかつた。

オリヴィアは自分ならば屹度其男を生捕り得ると自信した。彼女の母も娘ならば大丈夫屹度成功して夫人となれると自慢した。ソヒイアは其男を齒牙に掛けなかつた。

バーチェルはそれを知つて居た。或時土地の貴婦人に宛て匿名の書を認めて事實を擧げて警戒する考であつた。偶それを牧師の家に落して家人に拾はれ、非常な誤解を招いた。

主人を初め彼を言行一致せぬ惡人と認めた。ソフィア一人は如何にしても其行爲を以て彼が性格を直ちに評價しなかつた。それほど堅く其人格に信を置いた。

或日突然バーチエルが訪ねて來た。主人等は來たなら强く辱めて其面皮を剝ぐ準備をして居た。主人は彼に穩に、惡人でも善行あるかと訊ねた。眞の惡人でなければ眞の善行はなし得ぬと答へた。惡を行ひ得べき力も善を成し得る力も力は同一である。弱志薄行の徒には惡も善も大事は成遂げ得られぬと附加へた。

此手紙はとそれを彼の顏に投げつけて、主人は憤恚と輕蔑を以て彼を瞋んだ。バーチエルは平氣で其手紙を取つて見て。之れは自分が書いた手紙に相違ないと言つた。さうてあらう、耻知らず、何んと辨解のしようがあるかと主人は怒鳴つた。

バーチエルは微笑を漏らした。其態度の中に嚴然たる自信の力が認められた。主人はそれを諺に言ふ盜人猛々しと取つた。バーチエルは主人に對つて容を改め、親書の開封は紳士の資格を破棄するばかりでなく、若し恣に自己の意思に隨へば主人等悉く繩にして牢へ送るは易々たること、傲然として讓る色はなかつた。主人は終に忍び切れず、此大惡人と痛罵して、再び此閾を跨ぐなと突き出した。

バーチエルは如何なる人物かは暫く措き、彼が言は取るべき所がある、又た彼の行爲は公明で男らしい。

親書の開封は貞操の破壞よりも男子の行爲として卑性である。親書には意思がない、それを開封するは絕對の壓制同樣である。女子の貞操を壓制的に腕力で破ると何の異なる所はない。貞操の破壞は意思の自由が認められる。又た愛の妨害と雖一樣である。愛の妨害は自由意志の束縛である、意思を絕對に否定する譯ではない。バーチエルと言ふ人格は其意思の自由のために自己を見出して居た。牧師は神の使徒でありながらそれを沒却してしまつたのである。併し彼は己に老ひ、其境遇は不幸に不幸を重ね、姉は其時はや虛榮と野心の犧牲となつて家出し、貧は一家を襲ふて家財を剝奪し、妻も子供も以前に變る境遇に人生の矛盾を託ち、神の存在を疑ひ始めた。神の使命を任ずる主人は斯る社會の矛盾人生の悲痛を惡人の所業と信じた。彼は善行を神の意思と心得、善行のために一生を犧牲として奮鬪する覺悟であつた。其心を解し、其情を酌み、常に强き自信を以て慰めたのはソフィアであつた。ソフィアが心を離れず、又たソフィアを理想の女性と信じて、自分を表面に現さず、陰然此不幸な一家に注意を拂つた。浮浪の皮のバーチエルは眞の太守ソーンヒ

ル公であつた。彼は未だ未婚であつた。そして彼の爵位を目的に結婚に應ずる一切の女性を度外視して居たのである。

ソフイアが初めてバーチエルと信じて居た自分の愛の目的物が想ひも寄らぬ貴人であつたのを知つた時、彼女は忽ち悲痛に打たれた。そして寧ろ活くるを望まなかつた。

主婦はソフイアに非常の同情を寄せた。自身彼女はソフイアであつたからである。社會の位置や財産は眞の愛とは沒交渉であることを知つて居たからである。普通の女性はソフイアではない。バーチエルが貴人であつたを却つて喜び誇る心を起すのが普通である。此等の普通の女性の愛は社會に囚はれ、愛の自然を傷ふて居るからである。彼等の愛は虛榮の皮を被つて居る。

愛の自然は同情の力である。此力あつて、眞の進化が保てるのである。眞の女性は同情に活きる。不幸の兒女を最も愛するは女性の自然である。愛の眞の目的物は自己の同情の光に由りて輝くのである。逆境に沈む男子ほど眞の目的物に適ふのである。惡病に苦むような男子ほど同情の光に浴する價値があるのである。ソフイアも主婦も社會に囚はれぬ女性であつた。

斯る女性は强き意思に支配される。愛も同情も等しく其意思である。主婦は大作にかう言つた。互に好き合ふた男女は自由に結婚するが好い、親の意見や世の中の義理に囚へられては却つて親も世の中も破壞される。好き合つた同士が一番堅く生活して行ける。

主婦の娘は母に附いて側から話を聞くことが多かつた。彼女は美人と云ふ資格ではなかつた。兄弟が男子であつたゝめか、或は他の理由に由つたのか、性質が男のように淡白であつた。擧動も多少そんな氣味があつた。彼女は大作に就いて本を習つた。時々習ひながら居眠るのを大作は氣の毒に思つた。仕事に勞れて、讀み慣れぬ本に向はせられては大抵な者は同じである。殊にそれが夏の最中であつた。併し彼女の心は習ふ本に趣味はなくて習ふ人に趣味があつたのは事實であつた。

彼女は本を讀むよりは話を好んで聞いた。大作は或日フラックスマンの話をした。彼は英國の人間で、燒物工場に雇はれて居た。性來畫に趣味を持ち、其技が友人間でも評判であつた。常に好んで安い日用品の皿や茶碗ばかりを描いて、決して高價な貴重品には手を下さなかつた。或時彼は其譯を問はれた。何んでもない安物は一般社會の人間に行き渡り、貴重品は單に高貴の家に秘藏されるからだと答へた。だから何故貴重品に關係せぬか

と訊かれた。自分は安物に趣味と努力を拂つて立派に書き、それで一般人心に趣味を挑發し、向上の觀念が與へたいのが理想である。貴重品では其理想に適はぬと答へた。

フラックスマンは自分の腕で早く獨立生活が出來た。獨立は英國氣質の特徴である。彼は小柄な男であつた。青年時代相思の乙女と結婚した。友人等はそれを批難した。彼はそれで多少心を動されて反省し始めた。批難の要點は何んでもない、唯だ、前途有望な彼の技術が早婚のために阻碍される恐があると云ふ杞憂であつた。彼はそれを妻に告げた。すると妻は容を正して。そんな心配なら大丈夫、私が妻で居る間は無用ですと雄々しく言つた。それを聞いて、低い丈が急に延び上つて、お前を妻に持つたフラックスマンは大丈夫元氣は拔けぬと彼は威張つた。

大作は此話をした。娘は外國の女は偉いと評した。大作は英國の男が偉いと言つた。兩人共まだ何所が偉いか眞の偉い所は知らなかつた。娘には雄々しく夫を勵ました勇氣が偉かつた、大作には青年の身分で居て思切つて結婚する勇氣が偉かつた。感じた點は兩人共に等しく自己の要求であつた。

日本には青年の結婚は珍らしくない。夫を勵ます女も少なくない。自分は食はずとも夫

に丈けは元氣の出るような食物を食はせる世話女房さへ日本には珍らしくない。娘の偉いとした點も、大作のさう思つた點も日本を標準とすれば格別なことはない。少しも偉くは思はれぬ。併し事實偉い所は他に在るのである。それはまだ彼等二人には分らなかつた。

相思の間の青年男女に自由な交際を認めるのは必要條件を自覺させ、滿足させるためである。自由の半面は責任である。結婚の必要條件は和合である。相思丈けでは和合の條件の總てでない。戀情は相思の情を挑發する本である。併し同情は必ずしも相思とは伴はぬ。戀情が危險な性質であるからである。恨にも變じ、裏切りもする。ために相思が惡く導かれて呪の原動力となる。同情は戀情とは別物である。戀情は本能の慾である。同情は愛から起る自然の性の働である。進化の本は愛であつても、戀情ではない。戀情は進化を破壞する場合があるからである。唯だそれは進化を促がす一つの作用に過ぎぬ。言はゞ或る動機で或る時期に發する熱と同一である。愛は不動の性であり、戀は不定の作用である。

進歩せる社會と進歩せざる社會の主なる別は男女間の關係を愛に本づかせるか否やに由つて定められる。英國の男女間の自由な交際組織は愛の自覺が理想である。それで男女の

問題は一切解決されるからである。自覺せる愛に對つては責任論などは釋迦に說法よりも無用である。基督敎が社會敎として現存せる他の敎に優る點は此所である。基督が愛の本體と信じられ、同情の塊と慕はれ、其理想を悲慘な十字架に標識するからである。悲慘なる死の理想は神秘的進化の原動力である。

或晩、村の神社の廣場で盆踊があつた。踊手は種々思々の趣向を凝らして出た。田舍には珍らしい思附もあつた。大作は好奇に驅られて、家の若者を連れて見に出掛けた。其時娘も誘ふた。彼女は笑つて應じなかつた。村の彼女位な娘等は競ふて集まつた。踊は酣であつた。廣場は森に圍まれて、木魂の宿ると想はる神木が此所彼所に蟠り、星の光も覗けぬように、廣場の上を蔽ふて居た。其内に所々に篝火焚いて、多くの男女が入り亂れて居る。青春の氣に燃ゆる者が十中八九、餘は其過去の夢路を辿る類であつた。踊手は輪になつて、囃方と唄手が其中に居て調子を取る。唄も手振も面白かつた。

大作は高い石段に腰据えて眺めて居た。其附近を私語きながら右往左往する娘等が多かつた。自然に都卑の差別はない。薄暗き森の間に十六七の娘等のそゞろ歩きは暗夜の雪か花かのような風情がある。青年の氣は其色や香に觸れて、一種の魔力を感じ易い。大作は

知らず〳〵其方に氣を引かれた。其間に色は暗に光り、花を欺く艶なる姿が不圖彼の眼に映つた。何心なく彼は其娘を案内の若者に訊ねた。

彼女は大作の宿の娘と同年で、親戚同樣な間柄であつた。其時の若者の評が面白かつた。内の娘さんは容姿も何も構ひません、男がうつかり戯談でも言へば拳骨位喰はせるような氣象ですが、此方は丸で反對で、髪でも着物でも華美に造つて、男に戯談の一つでも餘計に言つて貰ひたい方です。親がてんで違ひます。内の娘さんは立派なものです。かう言つた。

家に歸つてから、早速二人は娘に捕へられて、踊場の模樣を訊ねられた。大作は最初に唄を擧めた中でも忠臣藏の九段目が面白かつたと言つた。力彌と小浪の相思の情が聞く青年男女の心をそゝるのは自然である。誰が考へても異樣な一種の戀である。祝言の杯が生死の別の印であつた。

人生の最も愉快な幸福な時期は相思の間で愛を慕ふ間である。結婚の祝を擧ぐるは其愉快と幸福とに幕を落すと同一である。それ故自分は成るべく子供の結婚を延ばさせた。ゴールドスミスはかう牧師に言はせて居る。

日本の習慣であつた許嫁は此人生の最大幸福期に適當する筈である。併しそれが完全でなかつたのは、日本は丁度神代のように人間の意思を認めず、絶對服從の下に支配されて居たからである。他人の親書を獨斷で開封するように女の貞操も壓制で破つた時代であつた。基督敎書の初めにあるイーデンの世界を日本は夢みて居た。當時の日本でも基督敎國の人間同樣毒蛇の欺言に乘せられて禁果を食つた罪はあつた。生死、愛着、眞心の如き個性の働を備へて居た。言ひ換ふれば絶對に意思の自由を沒却された時代の日本でも個性の意思は盛んであつたのである。

まだ十四五の蕾の小娘は親の眼にはイーヴであつた。其小娘が力彌さんのお屋敷はもう此所かと門に立つて紅を頰に湛えた。對手が力彌であつて幸福であつた。實際小娘の言ふ通り外の殿御は厭なほど彼は彼女の愛の目的に適つて居た。力彌は十五、綠の角髮姿である。二人は蕾の內から相思の間に愛を求めて、言はゞ十五で自己の發見が出來たのである。許嫁の方法も親書開封の亂暴なく、自由な意思を基礎として復活さるれば荒み行く人生に無上な良劑となるであらう。

大作は幼時鄕里の子供に交つて舞臺に立ち力彌を演じた實驗があつた。對手の小娘は少

女であつた。それが偶然思ひ起されて笑止くてならなかつた。彼は娘等に其話をした。其時側に居た若者が娘の友達のことを口走つた。そして彼女の姿が大作の眼に止まつたと冷かすように言つた。娘の顏が急に一種の氣色を帶びた、併し直ぐ笑に變つて、誰の眼にも彼の人の姿は入るよ、熊野一番の美人だものと言つた。

大作が長島に別を告げた四五日前主婦は彼と娘を勸めて隣村に住む兄を訪はせた。娘は包を背負ふて二人夕方家を立た。途中寂しき山路で一群の男等に出合つた。行過ぎて後から駈落ぢやらうと言ふ聲が聞えた。二人は思はず顏を見合せた。娘の顏は夕日の光か眞赤であつた。

村は小さな灣に沿ふた百姓村であつた。岸には松の並樹があつて、小樂園の趣があつた。桃の名所で春は奇麗と言つた。兄は此所に叔父の代理として醫局の出張所を管理して居た。彼と大作とは海に入つて泳ぐのが樂であつた。三日滯在の中の日に大作は泳ぎ過ぎて昏倒した。幸ひ醫局の手當で便宜はあつた。兄も心配し、妹は尙ほ更心配した。彼女は心を盡して介抱した。

其夜更るまで名殘を惜んで語り續けた。大作と娘とは戸外に出て凉んだ。月はなくとも

晴れ〳〵とした空に一天星は輝いて居た。戀情に囚はるゝ地上の人間が無限の距離の星を想ふは自然だと世人は言ふ。其所に戀情の自由が得られ、地上の羈絆が解かるゝと彼等は想ふのである。言ふまでもなく空想に相違ない。其空想たる所以を今此所に一言する。星の自由は鏡に映る心の自由の影同樣である。戀情は地上の羈絆其者である。イソップ物語でも、現代の日本の小學讀本でも其譯を敎えて居る。肉を啣へて橋から水を覗く犬がそれである。戀情の自由は犬の口内に存して居る。水に映るは其自由の影である。

儒道に囚はるゝ青年男女は殊に此羈絆を感じ易い。最初から意思の自由が束縛されるからである。日本の男子が自己を欺く術に長ずるは此結果である。不自然な儒道の束縛の反動と言はねばならぬ。喜怒を色に現はさず。と云ふような型に嵌め込む修養は自己を僞る工夫である。相思の情も打明けて口外し得ぬ不淡白な心の鍛練である。外國人が日本人を目して油斷のならぬ國民と恐るゝは笑の裏に匿るゝ黑い影を言ふのである。其影は人生自然の愛を蔽ふ陰惡な性を持つ、愛の光を標的とする敎に導かれた外人は自然に其影に注意を引かれ易い、そしてそれを恐れ易い、恐るべき誤解である。此誤解は日本人同士でも有りがちである。相思の情の繫がる男女の間にさへ起る誤解である。特に初心な戀の衝動を

一種の罪惡として心に抑へ殺さんとする青年は最も多く此誤解の的となり易い。可憐な誤解で罪が深い。

蟲の音繁き道に立ち、星を眺めてのみ思にくれて居た乙女は大作に向つて突然前途を訊ねた。前途には二種あつたのは無論である。一つは其時の紀州大和の旅行である、他は一生の目的である。話は旅行の前途に限られた。一ヶ月の徒步旅行。山水自然の壯美を探り、風俗人情の變化に接する種々の機會を豫想に描けば愉快である、自由である、幸福である。乙女の心は其豫想に引きつけられた。彼女は突然聲を放つて、自分を一緒に連れて行つてと求めた。大作は不意を喰つた。そして稍躊躇した。彼は其實行の罪惡に等しさを信じた。お母さんはと一言彼女に對つて言つた。彼女は默して首垂れた。

斯る場合乙女の心に起る反動は樣々の色彩がある。

自由な敎の社會では女乙の心は青年から飛び離れる。輕侮の情を以て跳ね返るのである。野球の强い投球がバットにはつしと止められたと同一理である。斯る社會の男女は自由に相思の情を發表するに憚らぬ。一方が熱すれば必ず他方も熱する。共に自由な本能の慾求に煽られて周圍を顧みず突進する。フラックスマンの例はさうである。善にも惡にも一致

して突進し得る力は男女の本能の一致である。大作には其力が出なかつた。彼は後年幾度か此時を思ひ返して歎息する。

不自然な道の敎に支配される社會では、斯る場合、乙女の心は尊敬の念を以て男子を迎へる。共に他のために自身の慾望を犧牲にすると信ずるからである。過は少ない、同時に他に迷惑をかけぬ。社會の秩序から言へば此方が安全である。併し自己を欺き、自然の愛の發動を阻止し、進化の力を犧牲とする嫌がある。

愛の活殺は直接女性の活殺である。それは直接男子には關係が少ない。男子は性が異なるからである。進化の任務が異なるからである、女性の愛を支配するに止まつて、愛の所有者でないからである。自然進化の完全なる道を得るは男子の自然の性によりて女性の愛を活躍させる外はない。斯る男子に非らざれば眞の進化の途には就けぬ。大作はそれを誤まつた。

彼は初心の神聖なる愛の發動を擁護する丈けの勇氣がなかつた。誤れる道に囚はれ、周圍に顧み、其愛の芽を摘み取つてしまつたのである。彼は愛を傷ふと共に其所有者を傷ひ自己の自然の性を傷けた。男子の性の神聖は神聖なる愛の擁護に由りてのみ保存され得る

からである。

十七　山水自然の氣

那智の瀑布は日本壯觀の一熊野は日本形勝の地、靈場の王である。

長島を出た大作は數日熊野の海岸を暑さと道とに苦められ疲れて那智の旅宿に着き、旅裝を解いて心氣一轉した心地であつた。

夏の盛りに火鉢を抱くさへ變つて居る。室を襲ふ冷氣は那智の靈氣に通じ、覺えず氣の爽快を感じて來る。谷は深く、氣は沈み、岩を蔽へる草木の四季絶えざる霧に浴し、塵に穢れぬ綠の色は眼を洗ふに適す。風は絶え間なく騷がしく、煽られ通しの木の葉の風情見る人の心に何んと映るであらうか。若しそれを青年に映すならば、靜動二樣の佳致、動搖限りなき社會に立ちて氣力を維持し、安定に活き、一生を奮鬪中に送らんとする彼等が勇ましき心の影と一致せぬであらうか。

瀑布は山に遮ぎられて見えず、唯だ連續せる一條の音響が天より來るか、地より起るか、耳を風箏らせ、身を振はせ、寢ても終夜微睡む隙を與へなかつた。其音の刺戟に由る

か夢も見ず、疲勞に伴ふ鬼責も知らず、翌朝早く起きても心氣は爽快な一生面に復活した感じがあつた。

彼は早く輕裝して瀑へ行つた。削立せる千仞の崖と云ふか、眼は飛瀑の勢に眩むか、事實自然に尨大に映る。勢に由らずとも氣の性が斯る現象を起すのである。此現象は事實其場合の自然である。此現象を空漠無根の如く見做すは大なる誤である。自然の物理、氣の存在、光線の作用、眼球の組織實體の意義を解すれば其誤は自から悟られ、此現象の根底ある事實が確められる。

世間には色盲がある。普通の人に白と見ゆる物體が或は赤く或は黑く異つた色に見ゆるのを言ふ。斯る異樣の現象は物に由つて起るのでなく、人に由つて起るのである。色は物には由らずして人の知覺に由るのである。色盲が一種の變物か奇形の如く取扱はれ、危險視されて社會から除外されるは社會が一種の色盲たる證據である。所謂色盲は其知覺が一般の知覺と一致せぬからである。色の眞僞は問題でない。何れが眞か何れが僞か、世には そんな區別は絶對には存在せぬ。色も唯だ一般に通用する符號と同一である。世間には誇大狂がある。一種の病で事物に觸れて起る感想を常に常人よりは尨大に言ふ。事實さう感

じ、さう信じて言ふのである。丁度常人が薄き透明な水蒸氣を透して事物を見る時、普通の形より幾倍にも大きく見え、或は大きく見える眼鏡を透して見るのと同一の知覺を感ずるのである。大小の形の知覺も色のそれと同一である。事物にはなくて人の知覺に存するのである。形の大小は誇大狂を判斷する標準でない。判斷の標的は一般の知覺である。それに一致せぬものは誇大狂とならねば恐縮狂となる。日本人には後者が多い。誇大狂は臆病の反動である、恐縮狂は自慢のそれである。

色盲の認めて白と稱する物體は其人には白が自然である。世間の人間が多數認めて白と其物體を判ずるならば世間の人間は色盲化される。誇大狂も同一である。人間の丈が普通五尺のものを一丈と言ふ狂が出て、世人がさうだと同意すれば世間は誇大狂となる。恐縮狂も同一である。唯だ反對に三尺位と見て縮まつて居る相違である。何れでも物に變化はない。自然の世界は不動であつて、動搖するのは知覺の世界である。

世界の文化とは人間の知覺の變化を言ふのである。非凡の天才とは色盲か誇大狂か、恐縮狂の如き普通の知覺と異なつた機能を備へ、常人の知覺し得ざる自然の事物を周圍に充つる特種の氣を透して見出す働に過ぎぬ。天才が文化の動機となつて進化の途に乘るまで

には世間からは色盲の如く、誇大狂の如く取扱はれるが一般である。唯だ異なる所は廢者たる色盲は趣味も努力もない代りに天才は兩者を兼ね、誇大狂や恐縮狂や自信も安定もない代りに天才は兩者を備える、此點のみが區別の界である。

天才は性の働である。色盲、誇大狂等は知覺作用の働に過ぎぬ。

誇大狂を臆病の反動と目するは一見異樣の感を與へるようである。併し實際さうである。知覺の自由を抑制された人間が強い意思を持たぬ場合に此狂が起る。此人間の內心の慾望は常に周圍の事物を尨大に映して居る。彼が知覺の精神的機能は凸鏡である。映る事物が悉く尨大にされねばならぬ、否らざれば精神に壓迫を受くるのである。斯る種類の人間は明晰な意識を持つ。自己の前途を擴大無限な界に導く、自由な境遇に置きさへすれば進化に與ふる功績を擧げ得る力がある。若し此種の人間が比較的弱き意思を備へ、或は又た强き意思をも挫く境遇に在り、周圍のために自己の意識を縮小さるゝ場合には精神に異狀を起すのである。そして周圍を顧みざるに至つて、知覺のみが働いて尨大な現象を捕へるのである。誇大狂は之れである。

之れに反した恐縮狂が自負自慢の反動と言ふのも同一理である。此人間の精神的知覺の

機能は凹鏡の如く、外部の事物を自己の意識に縮小して感知する。其結果世界には自分が一番偉く大きく自覺される。若し斯る人間が周圍の境遇の作用に由りて自己の意識を擴大され、精神に壓迫が加はれば、次第に異狀を呈して來る。そして狂となつて何事にもびくゝし出す。恐縮狂は之れである。

兩者の實例を大小二三此所に示す。東洋其他の蠻界の征服を試ひる英米人の行動は誇大狂である。彼等には近視眼的よりは遠視眼的が多い。又た自强自大を以て任じ、最初には黃禍を說いて黃色人種を文明の惡魔と呪ひ、後には自己の境遇の不安に駈られ、歐洲に動亂の火を附けて獨乙皇帝の行動は恐縮狂である。外國の文明の壓迫に堪へず、一二ヶ年の留學で想鄕病に冒され、萎縮して神經的患者となる日本人は恐縮狂である。而已ならず、世界の大勢に觸れ、びくゝして懷の勘定と借金にのみ頭痛を病ひ日本の現狀がさうである。學校では秀才と呼ばれ、頭腦明晰、思想遠大の靑年が自己の意力の本を忘れ、單に知覺の美に迷ひ、男性の本能を富豪の女性に賣り附ける行爲は誇大狂の類である。若し此人間に其意思の自由を與へず、知覺に壓迫を加ふれば發狂して誇大狂と化するは必然である。日本人には此種も多い。多い譯は性を忘れて知覺にのみ囚はるゝからである。天才は

知覺でない。知覺は趣味や努力の根源ではないのである。

大作は瀑壺の邊に立つて崖を見上げた。事實響は耳を裂くに近い。其響を揚げ、地を震はす瀑布の樣は、地を呪ふ天魔の白刃か、其下に迸るは地の精の靈血か、潮の如く流れ、煙の如く飛ぶ水は凄愴の氣を激して止まぬ。深遠と言ふか、壯大と呼ぶか、飛瀑の底は限りなき激動の渦流を堪へ、平然として靜かに下へ吐き出す。那智の心は之れである。

彼は直立せる崖の側面に沿ひ、樹の根を便りに瀧の頂上へ攀ぢ始めた。途は左さで危險はない。頂上から流に沿ふて二の瀧、三の瀧、支流の風色を探ぐるが彼の目的であつた。

千尺の斷崖を、飛び來る瀑の霧に濡れ、地を震はす響に打たれ、體を樹の根に支へて登る間に、心は自然の氣に洗はれて透明な自覺が起る。其間に發するは自己と一致する連想である。連想は過去の事實の心に映る影である。

此の瀑に自然の氣を吸ひ、精神の集中に努め、本來の性に達した文覺は强烈なる本能の奴隷であつた。其鐵鎖が女性の愛の反動で打ち斷られたとき、彼は自己の强烈なる本能の力で翻然として救世濟民の强健なる力を得た。力を得たと云ふのは誤である。持つた力で自己を發見し、進化の途に復り着いたのである。彼は本能的天才であつた。

一般斯る强固なる意思の力は自己の自然の本能の力でなければ、其反動の力である。本能の自然の働が例へば赤の方向へ導かるれば其反動の働は白の方へ向はねばならぬ。赤白方向の善惡に差別はあつても力其者には差別はない。之れが力の自然原則である。

世に古今東西の別なく、大惡と大善とが一個の人間に存在し得ると言ふ。矛盾せる如くにして矛盾でない。俗に言ふ、惡に强い者は善にも强いと云ふ。此諺は今述べた力の原則を人性に適用した言葉である。唯だ此所で大なる誤解を來たすのは惡い事をする人間でも善い心を持つて居ると考へることである。決してさうではない。惡い事をする人間の心は惡い。力の原則は心の原則ではない。心の働を起す力のことである。人間の心が惡になつて惡事を働く力と又た善になつて善をなす力とを言ふのである。善と惡とを言ふのではない。善と惡とは人類社會の習慣に本づいて一定した色別である。善惡は絶對に自然には存在せぬ。力は自然その者である。力なければ自然はない。人の性は力である。女性の愛もさうである。愛を挑發する男子の本能もさうである。

文覺の場合は惡の色から善の色へ移つたのである。彼の努力は移すために必要であつた。惡人が善人になるには此努力がなければならぬ。善惡の界は線一本、其線は死に等し

き性質を持つ。言ひ換ふれば無色の人性である。社會を離れ、人生を見棄て、善惡の色から全く脱した自然の境が其善惡二道の境界線である。之れを越さねば人性は善惡の一方から他方へ移ることは絶對に不可能である。文覺が那智の瀑下で自然の氣に心を曝らし社會の惡より善に戻る決心は死を恐れては出來なかつた。

袈裟を本能の目的物として狙つた。彼は犧牲の餌に向つて突進する餓虎の性を受けたと同一であつた。自然は人間が餓虎に等しき性を受くるを許して居る。其本能の力なしには強烈なる自然の進化は出來ぬからである。其性を以て彼は一個の女性を逐ふた。己に死線を越えて社會的危險範圍に飛び込んだのである。死を冒して本能の敵と信じて打つた首が自己の逐へる女性の死と知つたとき、初めて彼が本能の鐵鎖は斷れた。其力は女性の無色な自然の性から發したのである。死を決して自然の性に歸つた袈裟は夫に對する純潔なる愛の權化を言ふのである。白熱せる愛の焔に燃えた女性である。無色透明、社會の塵も善惡の色も消えてしまつた女性の力を言ふのである。愛の力は斯くて神秘の働をなす。

大作は死線を越えて女性を逐ふほど本能に騙られた經驗はなかつた。彼は熊野の乙女を心に思ひ、乙女の愛の衝動を感じつゝ自から本能の發動を抑制して居た。彼は那智に來て

文覺を連想し其行爲を冷笑したのであつた。彼が心には本能の働は人生の汚行であり、社會の罪惡であつた。彼は社會の儒道を尙ほ辿つて居たのである。未だ人生の意力と本能の働とが如何なる微妙の關係を持ち、社會進化の動力として如何なる效力あるかは悟り得なかつた。

岩を碎く瀑布の水力は轉じて人生要用の動力に用ひられる。現在では直接電力發動の經濟的要素である。力は凡て轉換の性を持つ。自然に固定なく、自然に變動なく、自然は自然のまゝ存在し得る所以は力の轉換性に由るのである。力に形なく、色なきは此性に本づくのである。力は量と方向とを其性の特徴に備へて居る。此外には何も持たぬ。之れが力の權威である。絶對の自然である。最も自由なるは力である。人間の本性が絶對の自由なる所以は自然の力が即ち本性であるからである。女性の愛も自由である。男子の本能も自由である。愛も本能も量と方向とあるばかりである。其量は無限にして、其方向は自由である。量と方向とは撰擇の自由に由りて定められる。女性の愛が專心一人の男子に向ふとき、其愛を他に割くは不可能である。割けば心を割かねばならぬ。女の自然は斯くて滅却されるのである。女性の意思に由らずして結婚を行ふは力なき女を男に結び附けるのであ

る。男は不幸である、女も不幸である。男は女性の愛を挑發するために無益の努力を費し、女は愛の撰擇の方向が其男に一致せぬからである。無理に合せても直ぐに離れるからである。美味の美味たる所以も、美服の美服たる所以も撰擇の自由あるからである。此の自由なしには太牢の食も石に等しく、輕羅の服も莚に劣るは自然である。又た男子に對して愛の發動を解せぬ女性は石佛と同一である。女性の美は熱せる血の外にはない。愛の發動なき女性は冷却せる石佛である。斯る女は男子の眼に切つても血は出ぬと映るが自然である。

其故に力の最も恐るべき患は不自然的抑壓に由る其量の減殺である。本能も之れがために衰へ、愛も之れがために失はれる。佛法と儒道は其弊を人生に與へたのである。日本の社會は確かに此弊害を受けたのである。日本に多くの文覺を出し得なかつたのは儒道のためである。又た多くの袈裟を出し得なかつたは佛法のためである。前者は男女を形式の道に囚へ、後者は肉を節して性慾の力を減じ、同時に女性を卑めたからである。儒道も佛法も共に不自然である。

人性は自然に活きる。文覺が袈裟を慕ふたのは自然である。彼が社會の人道を無視して

本能の自由な方向に馳せたのは、赤旗の危險信號を顧みず、突進する汽罐車の勢である。衝突、脫線、人命死傷の危險は其勢の必然の結果である。

若し此汽罐車が赤旗の線路を取らず、白旗の無害軌道を進めば其力は何の恐も危險もなく、却つて人生の幸福を增し、社會の進化を助くるは炳である。

二つの場合、蒸汽の力に何の相違はない。唯だ其差は力の方向である。撰擇の自由を與へず、其自由を妨げた軌道のためである。

本能の力で脫線した文覺は其軌道の轉換に此自然の壯大なる那智の瀑布を使つたのである。單に器械的に水力の用法あるのみならず、精神的に自然の氣が人性を移すに適するからである。

大作は登つて瀑布の巖頭に立つた。雄大なる氣は忽ち彼を囚へた。此雄大なる自然の氣中に彼も亦た自然の氣の一結晶たる自覺が起つた。人に生死あるとも、氣に生死はない。彼に生死はないのである。

奥山深き谷々を流れ、千仞の崖を直下する瀑布の水は天空より懸るが如く感ぜられた。其底の響も今は遠き地下に微かにに聞ゆる。四邊一帶の山の緑は霞に浴し、其狹き谷を越

えて一望萬里太洋を蔽ふ天空が地平線下に湮沒する。其光景は人生の意義を示めす有力な
る活書である。

十八　努力の自由

熊野は道路の險難で鳴る。就中大雲小雲の山道は其中の隨一である。此所は古、京都、奈良の舊都より那智の靈場へ通ふ本街道であつた。

險難は普通人の忌む性質である。併し不思議に人の性はそれを好む。其實證は子供に由りて炳に示めされる。平地を行くにも故意に溝の緣を擇んで歩く。男兒ばかりでなく女兒でもさうである。自然の性は險難に近づく特性があるからである。

人性は好んで危險を冒す、冒さねば自然の性でない。子供の好んで危險を冒すは自然の性に近く、之れに反して老ゆるに隨てそれを厭ふは其性に遠ざかるからである。子供は比較的力に富み、老人は力が衰へるからである。自然の性は力である。力の自然は其活動である。活動なき力は自然を消滅し、自己の存在を無視するのである。子供は自己の發揮に努め、老人は自己の撲滅に傾くは勢の必然である。人性は自然に險難を擇まねばならぬの

である。

古の道路の特徴は險難である。時に靈場の道路が著しく此特徴を持つ。近代それが非常に衰へた。併し稍回復されかゝつて來る徴候がある。古の人は此特徴を保存した。此所に神秘が潜み、努力が現はれ、信仰の價値と存在の安全が見出されると信じたからである。言ひ換ふれば彼等は此險難の中に自己を發揮し得たからである。

大作は大雲小雲の險難を越えて湯の峯へ向ふ豫定であつた。那智の宿を出て、山路に入り那智山の峠に登つた。彼が辿れる道路は左へ向ひ、他に一筋の古道が右へ向つて居た。彼は此所で迷つた。二十萬分の一の陸軍の地圖は持つて居ても用をなさなかつた。併し那智と湯の峯の位置より推せば、彼の取るべき方角は右でなければならぬように思はれた。併し道の有樣はそれを行つて名に聞く大雲の山路が歩けさうにはないような細い惡い見掛けであつた。それと反對に左の道は那智の街道らしく、一本道で、可なり廣くて割合見掛けも綺麗であつた。大作の迷は唯だ方角のみであつた。併し又た考へ直せば、道路には迂回すべき場合もある、一時の方角の相違で全局は定められぬ。

かう思つて左へ進んだ。彼は又た直ぐ本へ返つて、杖を岐路の界に立てた。そして目を

閉ぢて占つた。杖は心の引かるゝ左へ倒れた。彼は笑つて、決心して反對の右の小道を取つた。道は草に蔽はれ、時として失はれ復た現はれて漸く山腹に達した。道は稍明かになつた。其所に幸ひ彼は乞食のような家族の小舍を見出した。入つて見れば見苦い床に臥て居る者があつた。彼は其儘小舍を出て後ろへ廻つた。女が一人畑に草を取つて居た。彼は其の女に大雲越の道を訊ねた。女は丁寧に誤ないと答へた。彼はほつと一息ついた。

此所からは熊野の海が自由に見え、那智の谷も見下ろせる、乞食の棲居としては勿體ないほど佳い場所であつた。世の富豪貴族の贅を盡せる別莊でも中々之れ丈けの自然の風致は恣にされぬと思はれた。同時に彼は乞食の上に不圖思ひ及んだ、併し急がねばならぬ山道とて、彼は唯だ女に湯の峯までの里數を訊ねて去つた。

距離は六里、時計はまだ十一時。山道でも樂なものだと、道の間違なかつたのを自慢なように急に氣が落ち着いて來た。

世の中の形式と迷信とは丁度那智山の峠の道と同樣だと彼は思ひ出した。形式は一般人の支配さるべき習慣である。其習慣が弱くなれば形式は隨て消滅しなければならぬ。新らしき習慣は新らしき形式を產んで行く、古の本道は今は潰れて草に埋もれ、有つたか無か

つたか分らぬ道が今却つて綺麗に出來て人を引く、引かるゝ者は果して自己の本來の方向に進むか否かは疑問である。若しあの峠で心の引かるゝまゝ左へ行つたら何うなつたらう。あれでも目的地へ行けるだらうかと彼は獨語した。

迷信は心の不安を除くのではない、不安を其儘納めるのである。それ故に迷信者には常に不安の種子は絶えぬ。併し除き得ぬ者のためには迷信は必要である。それなしには安心が出來ぬからである。迷信は自身取らねばならぬ方向の決定ではない、唯だ目前取る方向の判斷である。それ故に迷信者は正しき方向に進んで居ると否とに關らず不安の萠を心に抱く、併し又た彼等は誤れる方向に居ながら安心が出來る。迷信は事物を判斷すべき能力と自信の力乏しき者には必要である。之れなしには斯る輩は一歩も安心して進み得ぬからである。佛者の題目や名號が無識の衆生に安心を與へ、稻荷のお告が匹夫匹婦に渡世の道を敎ゆるは之れがためである。

大作は大雲の難路にかゝつた。幾んど人跡絶えたるような道の有樣、荒れるまゝに自然に放任され、八月半ばの草の誇り、自由に繁りて身を埋むる萱の高さ。其中を人か獸か分らぬように體の重みで押し分けて行く。邪魔な物は菅笠と被蓙、蓙は卷いて背に着け、笠

は取つて前に持つた。時には顔を手拭に卷き體を横に泳ぐ姿勢で登ることもあつた。

阪は敷石、幅一間餘、古を思へば其時代の豪奢が偲ばれる。京都や奈良の貴人等が輿に乘つて此峻阪を通つた樣は、現代支那の貴人等が依然として舊を守つて失はぬ。日本には遠の昔、輿も廢たれ、難道も滅した。形式習慣の變化に伴ひ人心も同一である。善惡利害得失は問題ではない。形式習慣は絶對な意義は持たぬ。唯だ其場合の都合、時代の便宜に過ぎぬ。社會的迷信が即ち之れである。發達せる智識と强固なる自信を持つ社會には形式習慣の片々たる變化はない。又た斯る社會は誤れる形式習慣に膠着する愚も演ぜぬ。迷信で取捨せず、智識で取捨し。迷信で安心せず、自信で安心するのである。

支那と日本は同種同文、異性異心の國柄のようである。併し其實支那は古木の幹にして日本は其葉や花である。古來日本は支那から凡てを取つて文化を作つた。將來も亦た凡てを取らねば活きられはせぬ。現在兩國の境遇は木枯の時期である。支那も日本も其關係と境遇とを忘れ、歐米の文化に醉ふて、其花の移植にのみ腐心する。自信なき國民の根性と迷信に囚はるゝ其淺ましき心情が憫である。

之れを思へば峯に巢を組む鳥のような乞食の生活が想像される。彼等の境遇を察すれば

夫の身に潜む惡疾に祟られて、不安に驅らるゝ夫婦の心を迷信に依りて慰め夏は涼しき高根を選み、冬は溫き海邊に移るのである。彼等の心は古來の傳說に囚はれて惡疾の平癒に神靈の利益と靈泉の効驗を信ずるのである。彼等の行爲は決して笑はれはせぬ、それかとて譽められもせぬ。彼等にしてそれで可いと言ふまでゝある。彼等を眞似る國民の行爲としては笑ふばかりでなく、打たねばならぬ。神秘も利益も効驗も自己の努力と自己とを離れてはないからである。假りに日本の傳說を取るもさうである。彼は湯の峯を思ふた。

萱に埋る阪を拔け峯に出づれば道は熊野、四方山嶺重疊とは此形容か、見渡す限り山ばかり。大雲小雲はまだ前方に黑々と雲の間に聳えて居る。遲い脚、時計は二時と大作は更に心を勵まして進む。谷に下り、山に攀ぢ、はや大雲かと思ふ山は小粒のような水球が繁れる森の木葉を傳ひ木葉を傳ふて流れて落つる。其響が寂しい暗い山中の一人旅には異樣に聞える。

海拔數千尺の山道。空は見えず、日も透らず、朽ちかゝつた樹木や苔に包まるゝ岩石が四季一日も日光を知らず、生えては朽ち、朽ちては生え、輕き溫き氣に觸れずして、重き冷き氣のみに幾千年を經たかと思へば、大雲に棲む生物は高木の梢の外に直接自然の氣を

受けて活潑な進化の途に在るものはないような氣が起る。

陰欝壓制、積弊の社會の内に人生自然の自己の光を認めず、生れ出でゝ努力の自由も、進化の効績も、愉快の意義も解せざる間に朽ち果てゝ死する外なき人間は畫尙ほ暗く、冷氣に滿ち、人跡もなき深山を半ば凍えて彷徨ふ者と同一である。迷信の外に彼等を導く力なく、傳說の外に彼等を繫ぐ力はない。古木も靈に見え、巨岩も神に現はれる。唯だそれに依つてのみ彼等が存在の安定は得らるゝのである。進化なき生物の心は固定の外に望はないからである。斯る社會は炳に日本の過去の武士以外の階級と、現代支那の社會に見出される。努力の自由を失ふ社會は不自然な社會である、呪はれたる社會である。之れを救ふは自然の愛の働である。女精の德の復活である。

大雲を越え、小雲を越えて疲れに疲れて、漸く村ある平地に下りた時、日は方に入りかけて居た。不審に打たれて彼は村人に再び那智からの里數を訊ねた。聞いて驚いたのは彼が初めに女に聞いた里數は六十町一里の古のそれであつた。併し却つて嬉しい心地がした。湯の峯までは後三十六町一里半。道は平で、あの山一つ越す丈で直ぐ溫泉の湯氣が見える、日が暮れても心配はないと敎えた。

聞いて幾らか氣が緩めば足の痛が起つて來る。草鞋や足袋や往來の小石までが氣に障る。から云ふ時はコップで一杯田舍酒でも傾ける。さすればそれが靈泉の効がある。痛も障も忽ち失せる。そして二里や三里は駈けてゞもまた歩ける。大作は其時までも其實驗はなかつた。偶然村の茶店で冷酒二杯傾けた。意外にも氣も體も輕くなつた心地がした。夏の黃昏一入の興味、熱する顏に涼風あてゝ軍歌を唄ふて突進した。

道は古來名所の湯の峯、僻地には似ぬ良い設備であつた。夜陰に周圍の景色は包まれて彼の眼には映らなかつた。唯だ流の音を聞いては川を想像し、光を見ては家を描くばかりであつた。宿に就いて直ぐ溫泉に入つた。彼は特に傳說のある湯壺を選んだ。

入口に小栗湯と書いた標札があつた。案内の女中が鍵で戸を開いた。公開された湯壺でなかつたのである。併し之れは俗に言ふ特等湯とは種類が違ふ。傳說の尊重である。現代の特等湯は湯に對する尊重の意味はない、客に對する區別あるばかりである。傳說の尊重は有形的の美や湯錢の高では維持されぬ。無形の精神を呼び起す一種の形式に由らねばならぬ。一は經濟的と社會的で、他は精神的と神秘的である。特等湯は肉を想はせ、傳說湯は靈を想はせる。肉を想ふと靈を想ふは共に自然の幻想である。併し肉と靈とは幻想でな

く自然其者である。

肉を想ふて特等湯に入るは全然虚榮である。肉の必要あつてそれに入るのは必ずしも虚榮ではない。自己の働の要求である。

傳說を信じて傳說の湯に入るは迷信である。靈化の必要を感じて靈泉に浴するは必ずしも迷信ではない。自己の靈の要求である。

大作は其實何も感ぜずして小栗湯に入つた。彼は好奇に駈られたのでもない。人は自然に靈泉あれば靈泉に入る。それが人の性である。知覺も意思もそれを解せぬ、唯だ氣の作用である。氣とは性其者の働である。知覺や意想は性の道具である、心の働である。彼が小栗湯に入つた動機もそれであつた。

小栗判官とは如何なる男であつたか、又た判官に愛を傾注した姫御前は如何なる女性であつたか、共に傳說的に止まる人物であつたのか、其の考證は別として、傳說のみに由つて考ふれば、自然の性に隨ふて、本能と愛の自由を一致させ、社會の道を踏んだ人物である。

湯の峯の邊に車塚がある。判官を乘せて姫が曳いた車の塚だと言ひ傳へる。想像したば

かりでも男子の血が動くようである。判官の疾は社會を憚り、社會に憚らるゝ天刑病と傳說は言ふ。それを知つて姫が判官に同情を寄せたのは自由な愛の自然である。彼女の愛の唯一の目的物であつたからである。靈泉の効なくとも、神靈の力なくとも、其愛の力に由りて、靈泉の効も神靈の働も發したに相違ない。此等は皆な自然の自由なる努力に歸一するからである。

靈の救がないのではない、神の働がないのではない、又た愛の神秘的働がないのではない。唯だ其愛の働を起し得る神の如き純潔な女性がないからである。言ひ換ふれば女性の愛に純潔なる發動を起させる男子の力がないからである。神靈ありとも自己なしには神靈とは感應せぬ。感應は自由なる自然の働である。其働は努力の自由の結果である。

大きな湯壺の小栗湯に唯一人疲れた體を引き延ばして、立ち揚がる湯氣を吸ひつゝ眼を閉ぢて入つて居た大作は、俄かに眼を開いて、湯壺の緣の古い石段を凝視めながら、戀愛には世間は無いと叫んだ。實際世間に囚はれては姫の覺悟や力の出よう筈はない。彼女は自己の性を自然に歸して居たのである。丁度眞の勇者が生を見棄てゝ生を見出すように、男女の眞の戀愛は世間を見棄てゝ世間を見出すのである。言ひ換ふれば自己を自然に歸し

て自然から再び送り返さるゝのである。自己が自然に歸るのは喩へば體内の血液が肺に歸ると同一である。其目的は純潔なる働の要素を得るためである。社會の中で穢れた自己を純化するためである。

大作は湯から宿へ歸つた。通に向いた小座敷に案内された。食事も濟んで徒然に其日の事を思ひ返して居た。谷に面する隣の廣間に長髯の老紳士が一人居た。其人も孤燈に寂寞を訴ふるようであつた。やがて大作の室に歩を運むで話しかけた。大作は慇懃に挨拶を返した。彼は紳士の問に淡白に答へた。其紳士は彼が郷里をよく知つて居た。知己の名も一々擧げた。大作は皆其名を知つて居た。

紳士は三日前那智を立つて其日漸く着いたと言つた。彼は大作が案内なしに大雲越えて來たのに驚いた風であつた。よく那智山の上で迷はなかつたなと訊ねた。大作は笑つて事實を告げた。紳士は思はず膝を拍つて、うまいことをやつた、私は彼所で間違つてこんな目に合つたと言つた。大作は確かに一つの教訓を得た。彼が途中の疑問は釋然として解けた。

那智山上の二道は人生の自信と誘導との岐目であつた。社會の形式と習慣とは人心を誘

導するが目的である。此働の外形式と習慣には特徴はない。形式と習慣の權威は社會的制裁である。自然の自由に對する壓迫である。社會の形式と習慣が自然の自由と一致する場合は見出されぬ。若し見出さるればそれは眞の矛盾である。形式習慣は統一的に一定の型に凡てを入れるのである。自然の自由は壓迫なしには一定の型には嵌らぬ。自然は力である。量も方向も其撰擇は自由である。

形式習慣の最大なる弊は努力の自由の束縛である。形式習慣に本づく人性の努力は縱し其範圍に於て自由を認むるとも性の自由は抑制される。形式習慣は性の働の分量も方向も制限するからである。人生の自然の進化の効果は其ために阻碍されるは必然である。

日本社會の形式習慣は特に自由の範圍を女性の愛に狹めた嫌がある。それには他にも原因があつたであらう。併し主なる原因は儒道と佛道の二つである。元來日本は愛の自由の國體である。其國體が神代に於て己に愛の自由な働を阻碍させた傳說を持つ。之れが國體自から呪ふ一證である。日本の男性は現代までも生馬の皮を投げる素盞男命の血を傳へて居る。斯る傳說と儒佛二道の教義とは互に感應する所があつた。其部分は國體を呪ふ部分丈けである。呪はずして眞に國體と合する點は排斥してしまつたのである。其部分は形式

習慣と反する自然の性に適ふ儒佛二教の眞理である。儒教に在りては個性の發揮である。佛教に在りては自己本來の自覺である。

形式と習慣は社會に積もれる塵同樣に人性を汚毒する弊害がある。眞の進化に適切な人性の働は勢ひ減ぜざるを得ぬ。努力の自由は其ために失はれねばならぬ。

自信は形式習慣に囚へられぬ。自信の權威は自由なる道の撰擇である。道は千差萬別である。自然の道は自由である。各好む所適する所に從ふ、之れが自信の働である。自信なき者は他の足跡を踏まねばならぬ。

自信ある者は常に方針の決定と自己の發揮とを失はぬ。方針の決定は自己の目的に達する道の撰定である。自己の發揮は努力の自由である。斯くて何事にも不安の念なく進むことが出來る。勇往邁進など云ふは自信の行爲を言ふのである。

自然の力は量に於ても無限である。同時に又た其の方向の撰擇も自由である。人性自然の力は隨て此同じ自由が與へられる。何事に向つても自然の道に制限はない。道は最も進化せる現代の人類社會に於て最も大なる制限を持つのである。道が個人の特權に歸するからである。他は其の道に依らねばならぬからである。自然はそれと反對である。

自然の山に登る道は東西南北何れより向ふも自由である。併し人爲の道に依るときは其の方向は制限される。人爲の道に依る場合も徒歩の道よりは器械を使ふ軌道は尙ほさらさうである。

自然は最も不經濟な進化の途を取ると云ふ論者がある。其論者は自然が力の自由なる所有者たることを考へぬ。無限の力に對する有限の力の消耗は考ふるに足らぬのである。特に力は無限にして且つ不變である。力に消滅はない、消耗するものは單に力の轉換に過ぎぬ。自信を以て事に當る人間は自然と其觀念を一にせねばならぬ。多少の力の消耗は顧みるに足らぬのみならず、自己の努力は目前有効の結果なくとも他の結果に必要な準備たることを悟らねばならぬ。

自然の經濟的理想は時間と勞力の最小限である。此理想の實現は自然陶汰の長き實驗の結果に由る。智識的能力の發揮は之れである。之れに由りて自然の進化は經濟的に行はれる。之れを社會に行ふは自信ある人間に待たねならぬ。社會に於ける學問の道は此種の人間に由りて開かれる。學問の目的は一つの定まれる目的に向ふ經濟的な自然の道の發見である。

それ故に學問の道は無限である。例へば二を得るにも一に一を加へても、三から一を引いても二分の一を四度加へても同じである。其他二を得る道は無數である。之れと等しく凡ての場合一つの目的に達する道は一筋では決してない。言ひ換ふれば人間社會の進化の道は無限である。此道を辿るために自然の人生は努力の自由と自信とを備ふるのである。人生の幸福も社會のそれも自然に對する人生の努力を以て得らるべき大なる進化の結果と悟るならば、社會も又た隨て其國家も共に人生に努力の自由を認むべきは當然である。

不治の病を癒さんとして一個の女性が自己を自然に歸した傳說は自然進化の大眞理である。社會に囚はれず、自己に囚はれず、自然の大に同化して自己を自然に見出したのは自己を透して自然の力を發揮する道の發見である。女性に特に此力の發し得る理由は、其性が愛の塊であり。同時にそれが自然進化の基礎を造る原動力であるからである。されど女性の愛の力も努力の自由を認めざれば勢ひ社會を呪ふ破壞の力と化する外はない。日本に女精の調伏あるは之れがためである。

十九　人生の活氣

熊野權現は往時日本社會の人心に偉大な權威を持つて居た。其權現の祉は嘗つて名高い十津川の洪水で流されて、今其趾は廢墟となつて過去の名殘を悃に留めて居る。

十津川は日本で名高い。今言つた洪水でばかりでなく、歷史上勤王の武士と愛國の至誠で名高い。若し又たそれを音無川と異稱すれば、日本の人心に殊更響く、文學的に其名が高く鳴るからである。

大作は此名を慕ふて湯の峯から下りた。道は近い稍平な廣い谷に其川が流れて其岸に此川筋の中心たる本宮町がある。本宮町と云へば熊野第一の都會であつたのであらう、其繁華の影も全滅された市街の跡にまだ復活して居なかつた。

熊野の地勢は山ばかりである。其山も此所を見た目で他を見れば、山家の女を見て、急に都の女を見るような風情に見える。それほど熊野の山は頑固な雄々しい風がある。其谷も亦同一である。十津川谷は終日歩いても平地はない、深い急な傾斜の山に夾まれて、底には激しい急流が走る。音無川とは實の反對である。明治四十三年の大洪水後川は濁流と化して其儘色を變へずに續いて居る。

此谷が本宮町の所で一ケ所急に脹れたように出來、川幅も廣く傾斜も少ない。音無川の

實は此所で現はれる。權現の社は此流の中央にある低い平な島にあつた。今尙ほ古木が其跡を吊ふように依然として立ち繁り、其下に洪水の力も動かし得なかつた大きな敷石や石段が舊態を守つて居る。

洪水前は音無川の淸流が此神域の周圍を洗ふて俗塵を遠け神威の神聖を保つて居た。今は其川が混濁せる流に變じ神威を汚したまゝ持續して居る。當時尙ほ土地の人民は神威を呪ふ自然の行爲として權現の權威と神聖に疑を抱き始めて居た。社の趾は荒れ行くまゝに放任され、名もなき雜木の林同樣に化し、今は唯だ狐狸の棲む外人跡はない。

此權現の社の跡！　大作は此所に來て此光景を目擊し、周圍の氣に觸れ、忽ち一つの疑問を抱いた。古の社會に必要であつた斯る靈地が今は廢れたまゝ復舊の勞が費されぬ。此人心の變遷は何に本づいて起つたのであらうか。之れが彼には不可解のまゝ疑問として抱かれて居た。

或人は神は有ると云ふ。他の人は無いと云ふ。又た或る他の人は有るか無いか分らぬと云ふ。神とはさう云ふ者の名である。

自分も神と同一である。自分なんてそんなものは無いと云ふ人間もあれば、さう言ふ人

間を馬鹿と罵つて其議論を排斥する人間もある。又た此等の兩者を共に議論に囚はれた人間として冷評し去る者もある。自分とはそんなものゝ名である。

併し斯る人々でも自然に就いては異論はない。自然を認めねば神の有無の議論も、自己存在の確認も否認も、又た此等の議論と沒交渉な實驗科學も悉く其基礎が成立たぬからである。

自然は力の本體と認められる。熱も光も此本體から發するのである。力は或物體を透して現はれ。其物體を氣と名づける。氣は力との關係に由りて有形となり無形となる、又た所謂瓦斯體となり、液體となり、固體となりて現はれる。地上に空氣、水、土の存在するは自然の力と氣との最も簡單なる關係を示めす實例である。其他太陽の光線空中の電光それに伴ふ雷鳴、地より湧き出る熱湯蒸氣等亦た著しき實例である。兎に角宇宙の萬象は自然の力と氣との關係から發する現象として確認するのである。

自然の力は此氣なしには有つてもそれを現はすことが出來ぬ、又た氣は宇宙に充滿しても力なしには森羅萬象を造り出すことが出來ぬ。人間は此萬象中に最も微妙な力と氣の關係を現はす物である。

一個の小なる人間に宇宙の萬象が其儘宿る。自然と人間とは斯る關係を持つて居る。宇宙萬象の支配は自然の與へた人間の特權である。古來人間は此自覺を持ち、此使命に向つて進み、此目的のために優勝劣敗、自然淘汰が行はれるのを承認する。行はれねば此使命を全うするに足る働が得られぬと考へる。人間の精の優勝劣敗は著しい作用である。幾んど無數の精虫が一個の體を得るために犧牲にされる。之れと同一に考へられるのである。併し之れは誤つた考と斷言して置く。又た胎兒の發育作用が著しい現象を示めす。十ケ月の胎内生活に自然界の生物を悉く實驗する。其働は胎兒の生理的進化の現象が實證して居るのである。

人間が生物中の王たる資格は產れるまでに出來上つて居る。精虫期の優勝劣敗は自己保存の努力である。胎兒中の發育變化は自己の進化のそれである。又た人間が生物外の萬象の王たる資格は精虫期に達する前、力と氣の無限の働を實驗する効果である。力は女性の愛と男性の氣に潜む。

人間の愛と情とは力と氣の關係である。之れを稱して自然の本能と云ふ。女性の愛も男性の氣も共に自然の力を受けた氣に過ぎぬ。氣と力との關係から言へば同一である。それ

故に單に自然の本能とも言ひ得られる。男女の情とは之れである。男女兩性の別を離れた名稱である。それが區別を明にするために男性の本能を氣と名づけ、女性のそれを愛と名づける、單に便宜の符號である。

人生の活動に要する氣力は如何に人間に賦與されるか、又た其氣力の得らるべき途の良否如何は自から明かである。人間の氣力は精虫期前の自然の情の發動から起る。此時代が人間個體の神代である。神代の歷史は此情の發動期間に實驗される。神代を描いた日本歷史もよく穿つて居る。聖書もよく現はして居る。

日本歷史の神代も、聖書のイーデン時代も共に此發動期である。之れが兩親の幸福時代である。愛と氣との和合期は之れを言ふのである。日本では其期に發動の自由を認めぬのが習慣である。聖書の進化は人生に其自由を認める主張である。言はゞ人生を自然に歸へすのである。人生の活動に必要なる氣力を最も神聖に最も强烈に作り出す動機が之れでなくては得られぬからである。

人間は明かに生死を知つて活きて居る。生れて死ぬ迄の經過も知つて居る。生れた體が成長してそして老ひて活き絕え、朽ち果て行くのを知つて居る。併しそれ丈けでは滿足せ

ぬ安心が出來ぬ。人生を形に於て知り得ても、其存在の意義と其存在の權威と、生命の實體とを明知することが出來ぬからである。

人間が靈の存在を認むるのは此の結果である。詩人は人生を闇から來て光明ある場所に出で、再び闇に歸り行く飛鳥に喩へ、靈の存在と其不滅とを意識して人生に光明を與へんと考へる。

靈は不滅である。靈は形の中に存在する。形は滅しても靈は滅せぬ。此意識は空想でもなければ誤つても居らぬ。唯だ併し不確實な說明である。

靈は氣に伴ふ自然の力の作用である。其作用は有形にも無形にも存在する。森羅萬象自然の作用に本づく現象は此靈の働に由るのである。靈は不滅である。形の如何に關係せぬ。人間を萬物の靈長と稱する理由は決して人間の自負的名稱ではない、自然の使命に伴ふ職責の尊稱である。

人生は氣と愛との接觸に發して、熱情に液化し、冷却して塊となり自然の他の靈を受けて發育の要素となし、人間となつて產れ出る。之れが陰陽說の人生觀である。誤はない。

斯くて人間は萬物の靈長として自然の使命を全うせねばならぬ。人間は宇宙の森羅萬象

を捕へ其靈の働と目的とを識別し、各其靈に對して存在の意識と權威と實體とを自覺せしめねばならぬ。之れが人間自然の使命を全うする所以である。神國の存在の意義も、理想も、目的も之れである。神敎の骨子も之れである。聖書の神意も之れに外ならぬ。何れも眞である。誤はない。

神の意義は斯くて明かに解ける。神とは自然の靈氣の偉大な作用に與へられた名稱である。神は人間の理想の標的である。人間は斯る偉大な標的を理想として進まねばならぬ。然らざれば自己の自然の使命を全うすべき努力に堪へぬからである。

人間普遍の要求は活動の要素たるべき自然の氣に外ならぬ。新鮮な空氣の要求も、滋味な食物のそれも、清淨な衣服も、高燥な住居も歸する所此唯一の目的に支配される。人間が神を思ふは此の結果である。神を感得するは此自然の靈氣の感得である。神の存在を認むるは此意義に於て誤はない。

神の存在はそれ故に偉大な靈化の作用の存在を言ふのである。形の存在を言ふのではない。無神論者が神の存在を否定するは形ある神靈の存在の否定であらう。然らざれば彼等は自然の力も宇宙の氣も消滅させてしまはねばならぬ。彼等は斯る矛盾はせぬ。自然進化

の要素として力と氣の關係は認めて居る。彼等は無形の靈化の作用を承認する。此意義に於て無神論の意義は明かに了解出來る。無神論と有神論とは空間の氣を目して無色と言ふか、有色と言ふかの議論である。氣の存在の有無を論ずるとは全然間違つて居る。間違はぬと言ふは氣違ひである。

人間は自然の使命を全うして初めて人生の存在に對し意義も權威も、本體も自覺する、此自覺の外に、人間が個人としての存在の安心も、社會的生活の位置の確保も、努力に對する進化の効績も、之れに伴ふ幸福も、又た進んでは自信も神秘的行爲も、或は又た社會の進歩も、國家の幸福も望み得ることは出來ぬ。有神論や無神論を度外視して、唯だ物質に活きる人間でも或は又た實驗科學で神靈說を顧みぬ人間でも、意識の有無に關らず、自然の進化に伴ふことは忘れはせぬ。忘れては不安に陷り、社會から驅逐され、生活の途も、存在の基礎も失はねばならぬからである。物質的社會に於ける生存競爭は特に此恐怖を挑發する効果がある。物質論者や現實主義者や、自我主義者は自然の進化の原動力は此恐怖に本づくかの如く信じて居る。誤れるも亦甚だしい。進化の動力は恐怖ではない。實際的實力と自由な努力の結果である。實力と自由は恐怖とは反對な性質である。恐怖は人間の病

である。斯る主義者は社會を病的に變化して自我の目的を達することを唯一の進化の方法と心得る。社會も國家も、一家も個人も衰滅の途に押し遣られて居るのである。危い哉。此主義者の努力の結果は、効力ある自然進化の途とは反對である。社會よ、國家よ、家族よ、個人よ、何故に此危道を棄てゝ早く自然進化の本道に歸らぬのであるか。此危道は尙ほ現代の流行である。人生の幸福を物質と努力の結果に求めんとした遍狹な主義に導かれて居る。此主義の理想は目を迷はし心を引き附けるほど實生活に適するように見える。丁度金の鏡の影同樣である。實生活に適した理想も實生活其者ではない。此理想の目的は何人も達することは出來ぬ。此道を踏む社會は努力の結果衰弱と不幸とを來たさねばならぬ。

自我目的の自由競爭は人間社會には自然でない。自然の使命を全うするため人間の行ふべき方法ではない。人間自身の迷から起り、實體と影とを誤り、安全な道を棄てゝ危道に陷り、人生の存在を度外し、其意義も權威も本體も見出し得ず、恐怖、衰弱、迷信に囚はれて一生を陰鬱な迷路に送るが此主義の導く必然の結果である。

人生の自我的自由競爭は精虫時代に限られる。無數の生が自己保存の目的を以て競爭し

優者獨り生を保ちて劣者は悉く死滅する。之れが自然の與へた人生の自由競爭期である。此習慣は自から優者に殘る。其優者は十ヶ月の胎兒期中無競爭、唯我獨尊世界の中に唯だ獨り蟠つて、自然の靈氣に活き過去の習慣を去り、絶對の安靜に就いて生物進化の凡ての階梯を經、人間の位置に達する。産れ出た人間は斯る道を辿つて居る。人間に如何なる習慣が殘るかは炳に想像される。併し其習慣は人間の本性ではない。人間の前、人生の進化に伴ふ道筋に發した活動の惰性が之れである。

人生とは人間の生活期間でないことは炳である。人間の生活期は人生進化の最後の階梯である。言ひ換ふれば人間は人生に對する自然進化の目的を遂行すべき時代である。萬物の靈長として他の靈に自然の使命を傳へ、それに由りて各存在の意義、權威、本體の何たるかを明にするが此靈長の任務である。

自由競爭は此任務のために必要である。併し自我保存の目的のみの自由競爭は絶對に此任務とは相容れぬ。人間は己に完全に發達せる生物である。最後の進化の階梯である。自我保存の必要を認むる境遇でないことは炳である。自我保存は優勝劣敗に由る進化の一階梯である。最後の進化には無用である。而己ならず、自然の目的に反するのである。

人間時代の人生の目的は個人主義では達せられぬ。人間社會の全力を以て行はれねばならぬ。人間の世界に社會を造り、國家の存立するは之れがためである。人生自然の目的と矛盾はせぬ。自然の使命は人間の團體組織に由りて行はれねばならぬからである。此組織は自我的自由競爭とは兩立せぬ。自我的自由競爭は此組織の破壞である。併し人生個々の特長と其特長の自由なる發揮とは此組織の生命である。此生命あつて人間の社會は團體としての自然の使命を全うすることが出來る。

個人の特長は人生進化の初期に定まる。自然の力の作用を受ける氣の特性に由るのである。人間自己の發揮とは此特性の發揮に過ぎぬ。類を同じうする性質の靈は宇宙に散在する。其同性の靈を見出して人間各自の靈長たる任を遂ぐるが特長の發揮である、自己の發見である。此所に智識の啓發、學問の進歩、實業の發達の基礎が成立つ。

人間の智識、學問、實業は人生に對しては何れも自然の使命を遂ぐる必要な道の一つである。人生の存在、權威がそれに由りて保護され維持されるからである。人間はそれに由りて人生の活動を得るからである。又たそれが自己を發見する道に適ふからである。言ひ換ふれば智識、學問、實業は萬物の靈長として個々の人間が自己の世界を見出すべき道であ

る。自己の世界は萬物の同性の靈の世界である。此所に達せし人間は唯我獨尊自然の靈氣を吸ふて活き、其世界の王として人生最後の進化を完成し得る。斯る人間の働は神である。それ故に人間の智識學問實業は自然の靈に通じ、神たる働を行ふに足ると言ひ得るのである。

斯くて靈は森羅萬象の自然の力と氣の作用の本體であり、神は其作用の偉大なる働であることを明にした。そして同時に靈の不滅も神の存在の意味も解した。併し尙ほ明かにすべき點は人生の進化と人間の進化の區別である。

人間の自然の進化は人生の自然の進化ではない。人生の進化は自然の力と氣の作用から發して人間で全く終る。人間の自然の進化は其人生の進化を基礎にして行はれる。人生の自然進化に要する時間は人間の生活期間の二倍である。親の一代と子の一代である。之れが一個の人間の人生としての進化の鎖を作る。

人間は時代と共に無限に達する。靈も、神もさうである。併し人間は進化する、生死あるからである。靈は進化せぬ、それが不滅たる所以である。神も進化せぬ、進化作用の偉大な靈氣が神であるからである。言ひ換ふれば進化は生死の特權である。生死なきものは

自然の妙理を解する資格を持たぬ。人間の存在は自然進化の行程たる所以が之れである。人生は必ずしも此行程ではない。人生の完全なる進化の結果が此行程であるのである。

生を疑ひ死を恐るゝものは人生の完全なる進化を遂げた人間ではない。靈を解せず、神の働を感ぜぬものは完全な人間ではない。他を排せねば自己の存在が得られぬ考のものは眞の人間では無論ない。人間を自然進化の完全なる使命を傳へる鏈に喩ふれば個人は其鏈の鎖に當る。人間の働は萬事此理で解了されねばならぬ。

大作の熊野權現で抱いた不可解の疑問は以上の要素に由りて解釋されねばならぬ。

自然の進化に伴ふて人間の靈に通ずる道が開け、自己の靈長たる働が自覺され行くに隨ふて靈の自然の働は漸次人間に感得される。反對に神の範圍が縮小される。縮小されるのではない。神の統一が行はれるのである。

進化の足りぬ人間は森羅萬象悉く神の働と信ずる。そして各現象に神を象どる。水にも神を象どり、火にも土にも木にも金にもさうである。最も著しきは日と月である。或は風に或は音に斯る無形の現象にも神を象どる。人間が自己の靈氣を發揮して自然のそれに通じ得ぬ結果である。自己を見出し、自然の靈氣に觸れ、神の働を自覺し得る人間は自然の

使命を遂げつゝ進化する。之れに反して形式の神に囚はれ、神を偶像化して、自然の使命も自己の權威も顧みず、恐怖と、服從と、排他と不自然とに一生を拘束する人間は進化の途を知らぬ廢物である。靈の活動も神の靈氣も斯る人間とは沒交渉である。彼等は自我を夢みて、自我に沒し、人生を有や無やに轉がつて暮らす、言はゞ自己なき無靈無性の生物である。禽獸草木と雖靈あり性あれば此等の生物とは比較はされぬ。斯る無靈の生物が社會を毒し國家を呪ふ惡魔の社會を作り行く。自然は此社會を敵として戰ふことを靈氣ある人間に命じて居る。

古は神が自然の靈氣を代表して分業的に人間を支配した。神の權威を護るには自然の形勝が必要であつた。神を形に由りて感得した社會では神社を自然の氣の感得さるべき風光の格段な地に定めたのである。斯る位置は人心に敬虔の念を起させ、場所自身靈氣を人間に吹き込み得るからである。此働が社會に於ける宗教の權威を起したのである。

宗教が社會に重じられた理由は人間の統一が社會の進歩に必要視されたからである。又た人心の收攬上社會の政治に必要と認められた。古代の政教一致は之れがためである。政治は宗教的祭祀に由らざれば行はれぬような進化の跡を殘して居る。

貴族政治と專制政治は異名同物である。其政道は人心を啓發せず、恐怖に囚へ、上に向つて敬虔の念を起させる。之れが此政道の秘法である。其政道の機關として利用された宗教は此目的に適ふ觀念を人心に注入するが唯一の任務であつた。神威を恐るべきものとして人心に映したのである。

專制政治時代の神樣は自然の形勝に位置を占め、莊嚴な構をして人民の祈願を受けながら、恐怖と敬虔の念を絶えず彼等に與へねばならなかつた。僧侶や神官が社會に立つて神樣の皮を被ぶり始めたのは此政道の結果である。言ひ換ふれば人間の不完全なる進化の反動であつた。眞の神、人間の靈は斯る宗教的形式や政治の機關とは一致せぬ。形式機關は自由なる神の働と人間の靈とを拘束して進化の道を塞ぐからである。

人間を離れて神はない。神は靈氣ある働の理想である。人間は靈氣の長たる自然物である。人間より言へば神が進化の終點である。神を恐れて人間の進化は出來ぬ。古代の形式習慣は誤つて居る。

時代の推移に伴ふて專制政治が形式に於て破壞され、隨て神も形式に變化があつた。自然の進化は世界中同一軌を踏む。歐洲社會が舊教の形式から新教に變つたのは多くの神に

等しき貴族の權威を上一人に集め、直接下萬民に臨んだ結果である。神の統一は政權の集中と符合した。萬民政權に接觸するを得たるは個人の靈の自覺と共に神に近づく人間の進化である。

變化せる神の形式に伴ふ社會の變化は階級の打破である。貴族が平民と混じ、平民が貴族を眞似て、恐怖も敬虔も社會から一掃された。斯る社會で神樣ばかり古のまゝ自然の形勝に威張つては居れぬ。形式の神は食はなければ活きて居れぬばかりでなく、美服美殿金銀をも要求する。强慾虛榮が專制的政治の神であつたからである。

困つた神は都會の俗塵中に出張し人間の氣嫌を取り始めた。結婚の媒介までして新聞に廣告し神樣自身名を出して居る。神の威嚴が下落して人間に馬鹿にされ出したのは當然である。斯る神は言ふまでもなく形式の神である。それを擔ぐは形式の人間である。言ひ換ふれば物質化した社會の神と人間とは次第に無形の自然の氣を離れ、靈の働から遠ざかるのである。

されど斯る形式の神の權威の下落と無靈の人間の跋扈を以て直ちに神の意義と人間の靈とを疑ふのは誤りである。人間の靈長たるべき働は常に自然の氣に觸れて偉大な靈の感應

がなければならぬ。靈長たる自己の自覺とは之れである。此事實は靈ある人間に古今を通して變化はない。形式の神威の下落は單に政治の機關たりし社會の宗教の變化に過ぎぬ。人間の要求する自然の靈氣は斯る機關を超越し、宗教の形式を脫離せる不變無窮の性質を持つ、變化なく、進化なきが神である。

熊野權現の社の廢墟が狐狸の棲居に棄てられて顧られぬ半面に尙ほ形式の神の威嚴を偲ばせ得る理由は此所である。其廢墟は現代の破壞されたる貴族政治の餘弊と同一たる感を與へる。古を偲ばせる社の高木は自然の靈である。其神聖を保ち、洪水の害にも犯されず、滔々たる濁流の上に超越せる其樣は形式的權現の社の有無には關係はない。されど其幹の周圍には一帶の地を蔽ふて荊莉雜草が密生する。開放された形式の神苑は言はゞ狐狸の外、人間の踏込む自由はない。斯る社會の裏面には尙ほ狐に位を與ふるような事實が伏在して居るのである。迷信の社會の末路！　現代の日本社會は青年男女が悲觀に沈み、神經衰弱に陷り、氣力の衰退する事實を訴へ、人生の不幸、社會の不安、國家の危殆が憂へられる。當然の現象である。開放されたる社會に於ける專制政治の必然の結果である。

明治維新後日本は專制政治を破壞して人民を自由の社會に解放した。其社會開放は無意

味であつた。解放された人民は自由の空氣を呼吸する機能もなく、開放された社會に處する準備もなく、無我夢中であつたからである。開放の動機は社會的革命の基礎なくして單に政治的變動と外交上の壓迫からであつた。社會的革命の基礎は人間の自己の自覺と人生の活氣である。形式に囚はれる人間には此自覺もなければ此活氣もない。再言すれば革命の基礎とは靈ある人間と神の働である。

維新後の日本社會は忽ち復專制政治の實に逆戻りしたではないか。人民に對する恐怖の强制敬虔の注射は政府唯一の政道であつた。併し社會の人心を其道に適合させる機關はそれと伴なはなかつた。政府は一方に法令と劍とを示めし他方に國民的信條と肉とを示めした。

法令の力は人心の手綱である、劍は其鞭である。國民的信條は忠君愛國の四字に表はれ國家の要求する死の强制である。肉は人民の競爭に委ねられた。而してそれは生の强制の外意味も結果も表さぬ。

政府指導の下に在る形式的の人民は無靈無神の人間たりしことを忘れてはならぬ。其等の人間が手綱で曳かれ、鞭で打たれた。それは道の分らぬ彼等に當然の處置である。され

ど國民的信條は彼等を恐怖に陷れる。無靈無神の人間は死が最上の恐怖を惹起すからである。斯る境遇の人民が强制的にも又た自然的にも進まねばならぬ方向は肉である。學校へ入るのも技藝を學ぶのも皆な此肉が目的であつた。併し目的には限りなく、肉には言ふまでもなく限りがあつた。之れが日本の明治時代に於ける特種の現象の動機である。

日本が維新後歐米の文明に觸れて得た影響は自由競爭である。物質的進化も國家の富も、社會の幸福も此四字の內に含まれ居ると斷定した。其所に禍の種子が播かれたのである。第一に自我を標準とした自由競爭は人間を殺し合はせ、社會を破壞することは自然の眞理である。自然の進化はそれに由りて阻碍され、終には破壞滅亡の悲境に到着する。人間の進化は人生の進化とは同一物でないのである。人生の慾求と自我の保存と自然淘汰は人生の進化に適す、併しそれは人間進化の途には絕對に危險である。人間社會に尙ほ此現象の存するは過去の習慣の惰性の然らしむる恐るべき結果に過ぎぬ。人間に野獸の如き尾底骨あると同一である。最も進化せる人生は最も進化せる人間とは云へぬ、人生には限りあつて人間には限りがない。日本人の生命には限があつても其の民族には限りがない。人の死ぬのは當然である、民族の絕えるのは當然でない、不自然である。自然の意に反する

のである。神を忘れる不自然の結果である。言ひ換ふれば人生の活氣を得べき自然の靈氣の作用を阻碍する結果である。

二十　禍の光

名所に名所なく、名物に名物なしと言ふ。逆の光を言ふのである。名も聞えず、隱れた場所に却つて眞に見るべき物が見出せる。臥龍となつて潛んだ孔明を見れば人間でも同じである。人間の靈でもさうである。熊野の瀞八町は自然の景の臥龍であり、又た靈である。唯だ山奥に隱れるのと、名所の閥を引かぬため、汎く公衆に名が賣れぬ。其隱れた瀞を訪ねて大作は權現の趾を去つた。

本宮から舟に乘つて川を下る。川は急流、奔湍心と共に矢の如く、岩の危險と溺死の恐れは乘つた舟では無用な沙汰と水に流し、飛ぶが如き舟の操縱に興味を引かれ且つ眼に映じて變り行く風光に愉快を感じて彼は此航路を樂んだ。

出合で下りて支流の岸に沿ふて上る。水は全く本流と異なりて透通つた奇麗な氣持を與へた。境遇の變化、それに伴ふて心は斯くも移ると笑ひ、田や畑や、小森の間を縫ふが如

く辿つて進む。日の傾く頃、流の方向を眞一文字に横ぎる山にかゝつた。不思議な地形。疑ひつゝ山を登つて人に出合ひ、訊けば瀞は此所だと言ふ。笑止な話、第一瀞なる意味も其場所も想像が出來なくなつた。瀞八町は何所だと訊いて初めて下の川だと分つた。川ならば山に登るは無駄な話と又た自身笑ひながら訊く。下りて入口で舟を雇へと言ふ。入口？川の入口は海の外にはない、妙だと疑ひながら、其人に附いて下りつゝ瀞は何だと耻も忘れて訊ねた。湖のやうな川だと答へた。成程と又た笑つた。

入口は普通の川であつた。水も淺く流もあつた。岸に住む百姓の家を叩いて小舟を雇ふた。川舟には珍らしく艪が附いて居た。瀞の入口は湖の第一峽門であつた。併し疑問は此湖と呼ばれる瀞八町其者が奥の大きな太古の湖水か海かの峽門ではなかつたのかと云ふことである。それでなければ此山がこんなに切れる譯が分らぬ。瀞は小にして美なる蜀の三峽と自然の目には同一である。蜀の三峽は蜀が太古湖であつた時代は二三千尺の山頂であつた。それが次第に水のために堀り下げられるに隨つて湖水の面も下り、終に水盡きて現代の四川省を作つて居る。地質學者は三峽の年數を十億年以上と言ふ。熊野の附近で神武天皇が賊を相手に日に向はずに戰をされた話は三千年に足らぬ。自然の進化と人生とは到

底に峽にはならぬのである。して見れば、矢張神は無限の遠き時代に於ける人間の理想であり、人間の進化は千年や二千年で大した相違はないのであらう。相違のあるのは人間の嗜欲に關する物質組織の變化である。

石器時代、青銅時代、鐵時代の三期に就いて見ても人智も二千年間に漸く一期を過して居る。人間の性の進化は容易なことではない。實際家や、物質主義者が性や、人生や、人間の進化を口にする者を狂人か、夢想者かのやうに冷評するのは相當な理由がある。彼等は地面を平と思ふ。それで地球の圓いことは知らなかつた。圓いと言つた人間は名もない伊太利の隱れた男であつた。實際圓いと證據を擧げて世間の學者や、實際家や物質主義者を逆に狂となしたのは名もない船乘であつた。

大作は小さな舟の艪の音が四邊の山に響き渡り凄じき感想を惹起されて峽門を通つた。内は意外に小さな湖水。水は透明、底は見えても深さ二三丈、岸は周圍岩礁其上に直立せる四邊の山が綠の森に包まれて空を小さく限つて居る。第二の峽門を過ぐれば、山は愈高く、綠は愈濃く、水は一層深くして底を失ひ、天上天下空の外なく其中間に一面の明鏡が靜かに横たはる。其上を舟は滑るが如く進み行く。進化の理が之れである。

人間の現在は常に無限の過去と將來の中間に横たはる平面である。其一方は過去の實在を證し、他の一方は將來の幻影を現はす。人間は過去の實在に向つて進むことは出來ぬ。併し將來の影には進んで居るのである。

小なる天地で人間の自覺する現在の平面は其實は圓い表面の一部に過ぎぬ。其圓い表面を人生は一周して進化を遂げる。人生進化の方向は人間其物の自然進化の方向とは一致せぬ。水面を行く舟と天地の方角との如き關係が成立つて居る。

見えますかと唐突に艪を持つた男が叫んだ。何がと大作は男の顏を見て訊ね返した。あの岸の岩の面に生えて居る躑躅がと答へた。大作は笑ふやうに躑躅がと言ひながら眺めた。併し眼に映らなかつた。近寄つて見れば成程岩一面の凹み〳〵に小さい躑躅が外に現はれず生えて居る。岸の岩は水面から二丈許は裸のやうで、そして磨いたやうな光澤がある。それが湖水の周壁である。それに一面生えて居る。

躑躅の盛りには岩の面も水の面も火のやうに奇麗になりますと男は花時が偲ばれるやうな風情で言つた。大作は初めて水に映る岩や山の影に眼を注いだ。水面の映寫其作用は最も原始的な鏡である。此水面は面白い進化の跡を止めて居る。大方太古は蜀の三峽同樣に

面の高さが山上高く位して居たのであらう。そしてそれが上から下へ下つて何十萬年かの今日此水面を保つのであらう。其水は寸秒も止まらず、山奥の川上から川下へ流れ行く、海に入つて止まる間もなく水蒸氣と化して空に揚り、復た本の山奥へ還る。其順環は此水の生命である。此水の生命の進化と水面の進化の方向を比較すれば其所に自然進化の二樣の働が成立つて居る。二つの方向は一致せぬ。一つは水面と等しく他は天地の方角であるされど一歩進んで考ふれば此二樣の進化の方向は同じ自然の本體に歸せねばならぬ。本體とは力である。力は單に方向と量とを持つ。地上の水の二樣の進化は等しく此力に由りて行はれる。川を流るゝ水も、流るゝ水面の低下も共に同じ力の作用である。

人生を水の流に喩ふるは自然に人生に適するからである。元來同じ自然の力が氣に及ぼす作用の結果に過ぎぬからである。水の流と人の行ゞ末、佛者の悟は人間の進化と共に千古に達した眞理である。

自然の二樣の進化は時に從はねばならぬ。過去も將來も時の關係である。時は進化なく不滅である。時は力の如き量はない。唯だそれは方向あるばかりである。時の方向は自由である。併しそれは變化はない。之れが不滅の特性である。變化なきが故に宇宙間何れに

行くも時は一樣である。人間が過去と云ひ將來と云ふは人間進化の方向を言ふのである。舟は三峽四峽を過ぎて瀞八町を見盡した。顧みれば湖水の面は流水に比して全く死水を想像させる。死の經驗は人間は持たぬ。靜なるものを死と云ふ。水の生命の終る所は海である。生に悲壯の觀念を與ふるものは死である。死は破壞を意味するからである。矛盾せる觀念と言はねばならぬ。靜かなる死が悲慘な破壞の手を下すとは。死は純化である。海は水に其働を行ふ。死は人生の海である。死水は自然の禍の光である。

此所は玉置の出口である。崖の上に村家が散在する。旅宿もあつた。不思議にも此山奥に慶應義塾の學生が夏季休暇で歸つて居た。學生は大作と會つて二三日の滯在を勸めた。翌日大作は學生の家を訪ねた。心を盡した歡待を受けた。

彼は居間に掛けたる一絃琴に風雅な作のあるのを見て、其作者を訊ねた、不思議にもそれが一高の倫理の教授であつた。當時一高では校長の三顧の德と其教授の臥龍の清節が評判であつた。教授は儒道を守り、玉置の奥に世を避けて瀞の自然に氣を養ひ、多年此所に潛んだのである。瀞八町が世に知られたのは大方此教授の德であつたのであらう。

大作は此琴を見て其先生の面影と共に其口から心の光の射るやうに教えられた、石にあ

らず、轉がすべからずと云ふ女性の力を思ひ起した。教授は強く女性でさへもと言つた。併し女性にして初めて其力が出るのである。靜は死を意味するからである。死水は動かぬからである。教授の教はまだ生徒を導くに徹底して居なかつた。或時一高に音樂會があつた、倫理講堂が其時使用された。席に女が混じて居たのが原因で倫理講堂を閉鎖して、倫理は一學期休んでしまつた。徹底せぬ教育の結果である。倫理の神聖を保つのではなく、形式のそれが保たれたのであつた。不自然な籠城主義と自然な臥龍の德とは一致しなかつた。自然の神も形式の俗衆は化し得ぬのである。

大作は學生と舟を泛べて再び死水に遊んだ。そして靜かに風光を賞する間に彼は不圖玉置の洪水を思出した。彼が長島に滯在中東京から彼の行跡の不明を案じ、其洪水後間もなく人相書を添へた搜索依賴書が北牟婁の郡役所警察署等へ屆いた。其時の水害は玉置神社を襲ふて人畜の被害も多かつた。彼が此禍を遁れたのは僧侶の力であつた。

此話を舟中でして彼は學生にかう訊ねた。瀞八町は之れ丈け水が深くて湖水も同じだから洪水の時でも平氣なものだらう。學生は忽ち首を振つて大違だと言つた。成程深い所は六丈もあり、木葉が落ちても流れもせず、氷のやうに靜だから、知らぬ者にはさう想へ

る。所が全く事實は反對で少しの水でも瀞は荒れる。大洪水の時などは大渦で、流れて來る材木などが其中に卷き込まれて縱にキリ〳〵廻つて居る。物凄い光景です。岩の面があゝ磨かれるのも其のためですと話した。瀞の特徴は之れである。

靜かな死水の半面には流水の及ばざる驚くべき力が潜んで居る。否な潜んで居ると思ふのは誤である。死水に活氣を附けるには驚くべく自然の力が現はれねばならぬのである。此力を現はすのが靜かな瀞の特徴である。言ひ換ふれば偉大な自然の力を現はすには容易く動く物には望まれぬ。物に力は存せずして自然の力が物を透して現はるゝに過ぎぬからである。人間でも同じである。

此自然の力なければ岩面の光は出ぬ。水あるも此光は出ぬ。又た力あるも此死水なければ此光は現はれぬ。光は言ふまでもなく岩の自然の性に由らねばならぬ。光は自己の發揮である。自然の靈のそれである。自然の靈は斯くの如くして現はれる。岩の進化は遂げられる。人性の光も同一である。自然は人生の死を以て其光を現はすのである。死を恐るゝものは自然の意に反することは炳である。自己の發揮も、靈の發現も不可能である。人間の瀞たるべき特徴は自己を自然に託し死の手を以て襲はるゝも平然それに堪へ得べき性の

素質がなければならぬ。人性の光の發揮は斯くして得られる。完全なる人生の進化を遂げ、自然の道に背かず、境遇の如何に由りて心を動さず、自己は力なきものと信じ、自己の發揮と活動とは自己を透して自然の力を現はす外にないことを忘れてはならぬ。臥龍の性はそれである。瀞の靈はそれである。共に空を呪ふ黒雲を得、地を震はす洪水を得て其働が發揮される。天の人を用ゆる時必ず先づ艱難に試むるとは之れである。之れを人生の禍の光と言ふのである。

自然の禍は自然の幸福である。人のなす禍の反動である。奇言ではない。容易く其譯は解される。

洪水も暴風も自然進化の理に適ふて居る。喩へば人生の進化に伴ふて排泄物の避け得られぬと同一である。人間の生活に飲食物を取るは人生の進化が目的である。同時に又たそれは人間の進化に必要である。飲食物とは何であるか。

飲食物を人間の進化から言へばそれは人生そのものに適合する。若し人生が悉く靈化すれば人間の進化に疾患の不幸を來たす禍はない。又た人生の進化から言へば、若し飲食物が悉く靈化すれば人間の消化機能を害し病を起す禍はない。禍の起るのは飲食物が大抵不

自然だからである。其の存在の意義と權威と本體とが明かにされて居らぬからである。言ひ換ふれば人生の進化が不完全なると同時に人間が未だ萬物の靈長たる域に達せぬからである。萬物の靈さへ自覺されれば人生の進化に禍はない、虎疫の如きは最も其著しき適例である。

自然の進化が人間を其理想の神に近づくるに隨て、自然の進化に疾患を生ずる禍は避け得られる。人間自身自然の禍と目するものは悉く自然の進化に伴ふ惡疫である。其種子は進化せざる人間である。喩へば人間に生を寄せる無數の生物が人體に害を及ぼすは未だ其れ等の生物が自己存在の意義も本體も自覺せぬからである。人間は自己の進化の必要上自然に其等の害物を撲滅驅除する途を取る。人間が自然の禍で滅亡されるも之れと少しの相違はない。自然の禍ではなく自然進化の必要である。人間の自然に與ふる害惡の反動である。

人間が此禍を去り得るまでには幾萬年かの進化の途を踏まねばならぬ。戰爭でさへ人間社會に行はれる。禽獸蟲魚は言ふまでもない。人間のみは平和を唱へ、仁義を說き宗教の組織も道德の觀念も幾千年の古代から人間社會に出來て居る。それでも幾千年の後に此理

想の域に達するか、尙ほ前途空漠地上の水面が地下の雲に達するやうな感想を起す。神武帝が賊を熊野に討たれて以來二千數百年、今尙ほ紀州には勤王の武士として十津川にも其の人間が活きて居る。日本帝國の中でさへ官賊の區別を以て血を流す準備がある。世界に流血の慘を止むるは無限の遠き將來を期せねばならぬ。

併し遠いほど人間の幸福である。努力が自然に發揮されねばならぬからである。ために人生の進化にも努力を注ぎ、完全なる人間を作る必要が自覺される。否らざれば自己の存在も、社會の維持も、國家の安全も覺束ない。他と戰つて血を見る前に、身に宿る害蟲に亡ぼされる恐がある。遠いほど幸福である。其自覺が人間に對する禍の眞の光である。人間の幸福の基礎は此光の外にはない。岩面の光も、其上に生ずる花もかくて水の兩面に輝き得る。人間が過去にも將來にも活き得る力は此光が本である。

二十一　動亂の花

武士は過去の日本の花であつた。社會の平和の花と認めるのは誤である。動亂の花と認むるが至當である。其花の影は現在進化の途を踏んで來て社會に尙ほ動亂の種子を撒く、

撒かねば武士の魂に光がない、平和は武士を腐らすからである。

木魂に響く猿の聲を聞きながら大作は未明玉置口を立つて山路に就いた。旭の光を受けて玉置山の峠に向ひ、途すがら心に浮んで絶えなかつた。建武の昔の動亂が水に映れる雲か霞を見るやうに心の中に描かれた。

建武の動亂は人の知る如く社會に臨む日と雲との爭であつた。日は言ふまでもなく自然の力の中心である。日本の社會は天日の光あつて初めて生命を全うする。されど社會は日の光をのみ受けては進化が出來ぬ。水も必要である、米も必要である。而已ならず、夏は清涼の氣に觸れ、秋は霜を踏み、冬は氷雪を嚙み、春は霞を樂むのが、社會に活きる人間の幸福である。社會を蔽ひ、天日を遮ぎる黑雲は此意味に於て缺くべからざる必要物である。神の世界は別として人間進化の途中では折節之れは無くてはならぬ。其目的のために日の力で雲は起る。雲の與ふる德は大きい。其反動で起る禍は日の禍ではない。社會の禍である。禍は社會のために光を與ふる力である。時に日と爭ふ如き黑雲も絶對に日と社會の兩者に對して幸福を祈つて居る。社會の生物はために水を得、食を得て濕ふからである。社會の空氣はために洗滌され、日の光も高く輝き、天地の和合は其のために却つて進

み行くからである。

建武の時代官軍は東兵に苦められた。帝位は光なく、親王は雜兵に駈り立てられて熊野の奥を遁げ廻はる悲慘の境遇であつた。玉置山は其最も著しき跡の一つである。高野を落ち熊野へ遁れんと十津川谷を走つて此所に來た護良親王の一行は玉置山で東兵に遮ぎられ止むなく再び高野へ返つた。十津川武士も當時尙ほ錦旗の光を認めなかつた。其譯は偶然でない。

古代神武天皇は日に向つて戰つて敗を取り、改めて日を負ふて勝を得たと傳へられる。自然に悖らぬを言ふのである。日に向へば弓を曳いて狙ふ者が正を得ぬのは必然である。單に知覺の作用に止まらず、靈氣のそれも同一である。向へば氣は相反し、負へば相合するからである。自然に悖るは人間の力を得る所以でない。

勤王の働は王軍を自然の理に本づかせるが第一の務である。賊を討つは第二である。空言ではない、神武の實驗と遺訓である。戰時ばかりがさうではない、平時でもさうである。惡人を捕へ不正の巢窟を發くは第二である、王者の位を護る官僚を自然の理に本づかせるが第一である。然らざれば千年河清を待つも、支那の長江、日本の十津川同樣に社會の濁

流の盡きる期は見出されぬ。人生の進化は阻碍され、人間の進化は束縛され、人は腐敗し衰弱し、社會はために混濁を免れぬからである。靈の力も、神の作用も斯る社會に見出されぬ。呪はれたる社會とは之れを言ふのである。

王軍の自然に反するを悟らず、又た悟つてそれを助け、共に自然に敵するは勤王の本義ではない。王を護る道ではない。社會を救ひ國家を護る自然の道に悖るからである。王と社會と國家とは同一物ではない。併しそれは同一組織體である。互に離るべからざる關係を持つ。離しては存在の意義と權威と本體とを失ふのである。自然の意に反し、進化の途に就くべき靈の作用を失ふのである。王は國家の主體である、社會の靈長である。王に靈長たる資格を與ふるが自然進化の理想である、人間の進化に伴ふて此の資格が備はつて來る。國王は天性神では無論ない。人間の進化に伴ふ社會の靈長たる資格を備へて初めて神と王とが一體となるのである。無限の過去の神王は無限の將來の帝王である。自然の理想に隨つて進化を遂げた國王が神である。世界人類の帝王たる資格は此の神に備はるのである。自然の理に反し、人生の進化を忘れ、人間の理想を解せず、靈の本體も、神の眞義も、社會の實體も國家の組織も王たる自然の使命も解せぬ國王は形式的不自然の產物である。

自然進化に除外され、陰欝なる社會の裏面に迷ひ恐怖と悲慘の外何物をも解せぬのは當然である。斯る王は自滅である、斯る王に支配される社會と、斯る王を主體とする國家は共に衰亡の淵に陷るより外途はない。國家を護り、社會を救ふ靈の働は斯る時代に發するのである。發せねば人民自己の靈が自滅である。靈なき國民幾千萬あるも、此自覺を以て死に陷り、自然に同化して其無限の力を發揮する個性なくば國家の救濟は望はない。斯る個性は靈化せる本性の國民でなければならぬ。本性の靈化は形式習慣に囚はれず、自然の進化に從ふて發達した人生に待たねばならぬ。自己を見出し、自然の使命を自覺して、努力、自信の一致と共に死に活きる人間でなければならぬ。

正成の忠魂は近代に至つて世人に認められた。併し忠魂は隱れても忠魂である。英靈は埋れても英靈である。正成の英靈たる所以は自然の靈の作用に由る本性と、死して活きる魂に在つたことは炳である。併し此英靈が忠魂たると否とは別である。英靈にあらずとも忠魂であり得る、又た忠魂にあらずとも英靈であり得るのである。

英國のクロムエルは忠魂の人とは誰れも言はぬ。彼に較ぶれば當時戰場で王のために討死した雜兵等が忠魂を持つて居た。併し世界の何人でも、英國の歷史を讀んで彼が英靈を

認めぬ人間は恐らくない。口に勤王を唱へ、形式に縛られて、王の神櫃に不淨を忌む人間でも其英靈を心窃かに想ふであらう。彼は無靈無神の國王に由りて衰亡の淵に押され行く英國を救つたからである。形式と不自然とに由らず、自然の道に由つて國家を救ふことを國民に敎えたからである。此英靈の働が忠魂を自から作つて行く。世人はそれを認めねばならぬ。

クロムエルの忠魂は王に敵した大行爲を以て否定されぬ。國家を衰滅の淵より救ふは國家の主體を擁護し、社會の靈長を保存する途である。彼はチャールス王に忠ならずとも英國々家の主體には忠であつた。此主體の保存と社會の廓淸とに由り後代の國王は世界に秀でたのである。其忠魂は自然の禍の光と一致する。英靈にあらざれば眞の忠魂の光はない。英靈なくして忠魂たり得るは金箔附きの魂である。大和魂はそれを排斥せねばならぬ。間違へられてはならぬのである。

建武中興の殃は尊氏であつた。彼は國賊である。英才英氣の人間であつた。併し英靈の人格ではない。後醍醐帝が中興の業を完成せず、國家の主體として、社會の靈長として、中途本義を離れて形式に流れ、人心を失ひ、自然の理に悖られた時、國家擁護のため身を

挺して其の主權を握るのは英靈の爲すべき所業である。形式的國家の主體と人心を解せぬ社會の君長とは靈長たるべき資格なく、ために社會の秩序を亂し、衆生を塗炭の苦境に陷れ、社會も國家も滅亡の運に陷るを免れぬからである。尊氏には此理想と自覺とはなかつたのである。彼は主權を握つて國家擁護の任に堪ふべき自信もなかつた。彼は形式に囚はれ、他人の擁立と勸告とを容れ、自己の名望と位置とを利用して、主權の爭奪に着手したのである。彼が人心の收攬は才の働である、靈のそれではない。彼の下に集つて收攬された人心は悉く自我の慾望に驅られ、功名と共に領土の分割が目的であつた。尊氏の目的は此等の目的の集團に過ぎなかつた。日本の領土を占有するが彼の唯一の目的であつたのである。主權の爭奪は其の目的を達する唯一の手段と信じられた。日本には此の惡弊が立憲政治の現代でも社會の底まで染み込んで居る。言ひ換ふれば政權と物質との泥棒根性である。

正成は位置、名望、才氣共に尊氏に及ばなかつた。泥棒根性の當時の人心を收攬するは言ふまでもなく非常に困難であつた。帝も當時の人心に等しく其心は形式、名望、才氣に囚はれ、尊氏に重望を繫いだのである。之れが第一の帝の誤であり迷であり、不明であつ

た。帝の心に靈の光なきは此一事が表はして居る。

正成が挺身國難に當つたのは政權の爭奪自我の慾望、子孫の光榮のためではない。彼が自覺は國家の基礎の擁護であつた。國民信條の保存、武士道の本義の維持がそれである。大和魂の光の發揮が彼自身の發揮であつた。彼が眼中には日本國民の自然の進化があつた。此國民的自然進化の維持の外、他に國家擁護の眞義はないのである。彼が英靈は此自覺と努力と死に活きる自信に由りて發揮されたのである。此の英靈の指導に由りて彼は一諸帝の詔を奉じた。時の非なるを明知し、勢の自然に反するを自覺するも、王命に殉じた彼は偉大であつた。王命に服從した其事ばかりで偉大と言ふのではない。彼が命を奉じて湊川に赴くとき已むを得ずと言つた言葉に偉大は潜む。王命のみならば已むを得ぬことはない。清麿はさうである。王命を抂げて神命に換へた。清麿はクロムエルである。正成も地を代ふれば清麿である。唯だ境遇が逆であつた。清麿は王命に反するのが國民信條の擁護であつた。正成は從ふのがさうであつた。事實、已むを得ずと言つたは王命のためではなくて國民信條のためである。彼も其時無形に於て帝を見放したのである。死を決したのがさうである。彼の忠魂は此の已むを得ざる一語に盡されて居る。大和魂とは之れであ

る。英靈なければ此魂はないのである。英靈あるも國民的信條を離れては大和魂はない。自然の進化を失ふては英靈も忠魂も、國民的信條も何にもない、と自覺するが大和魂である。

建武中興の動亂に於ける勤王の士は悉く忠魂英靈を備へて居た。其努力の結果は悉く悲慘な死であつた。死して後ち、七たび生れて國賊を滅する情の切なるものは楠公血族の忠魂である。死して鬼と化するを祈つたのは護良親王の英魂である。此等の忠魂英靈は其後幾度日本に生れ出で、又た幾度國賊と戰つたであらうか。戰ふ度に國賊の滅ずるは人間の進化である。大和魂の光の發揮である。自然は尙ほ此發揮を要求し、國賊を國家に充滿させる。禍の光を得るは國賊のためである。大和魂が進化して世界に光るは其掃蕩の努力に由る外途はない。日本は此自覺が焦眉の急と悟らねばならぬ。國賊は進化の動物である。國の內外を問はず數に於ても力に於ても增して行く。

行く〳〵大作は古今に通ずる國家の運命、社會の進化を心に描き、旭の光に輝く玉置の秋色を眺め、野に咲く花、露に鳴く蟲に一層の感慨を覺え、覺えず涙湧き出で、顏を掩ふた。

峠に達すれば一基の塚が西を向いて立つて居た。讀むも嬉れしき花折塚。建武の昔、護良親王に代つて東兵を迎へ打つて討死した一人の武士の英靈の影が今尙ほ此所に偲ばれる、武士の名は竹原八郎、親王の股肱の一人。十津川武士の鑑である。英靈の影は動亂の花、其氣は何に化し、何に活きて玉置の山に止まるであらうか。

塚を吊ふ人は絕ゆるも、年々歲々新たなる野邊の花は色も香も盡きぬであらう。人間の花たる武士の靈氣は自然の花の靈氣に通ぜん。殊に建武の勤王の士の英靈は春の野邊の洋々たる和氣を知らず、露深き秋の野邊のみ辿つて居た。悲運の動亂の花の影か或は地を染めし血の塊か、紅の撫子は塚の周圍に微風に搖られて咲き亂れて居る。情ありげな花の姿靈ありげな花の色。見るも嬉れしき塚の名を讀んでは行き、行きては顧み、路邊を遮ぎる雜草を杖揮り上げて力まかせに打ち拂ふ氣持の好さ。かくして蔽はるゝ心の欝を散じつゝ大作は急いで麓の折立に下つた。

二十二　花の餘香

折立は十津川屈指の場所、町でもなければ村でもない、一種異つた山間生活の人間社會

である。山間生活の特徴は人間に敵愾心を與へる。保守の觀念が强くなるからである。又たそれは質朴な風を保つ。自然の純潔を失はぬからである。それは又た人間に崇高な魂を與へる。常に自然の靈氣に觸れ、自己を單純率直に發揮し得るからである。山間生活は武士生活の理想である。折立は古から武士で名高い、町でも村でもないやうな所の模樣は其のためである。

大作は折立の庄に古の武士を思ひ、十津川を沿ふて五百瀨へ向つた。脚は血の跡を踏む心地、氣息は動亂の花の餘香を吸ふ如く想像も、事實も、十津川の道は普通とは變つて居た。建武の昔を思ふても、明治維新を考へても、又た洪水の當時を察しても、道は血と悲慘とを描かせる外何もない。道路其物が自然に破壞されたるまゝ復舊の工も加へられずに慘狀を示めすが如く殘つて居る。道の特徴は人間進化の遲々たる狀と。人間努力の微々たる跡と、自然を恐れ、遠ざかる嫌とを事實の上に表明する。十津川は自然の力で驅逐され故郷を去つて北海道へ移り、今は新十津川を作つて居る。其事實が自然の人間に與ふる暗示である。

人間の遲々たる進化は人間の幸福である。進化せる人間は進化も努力も失ふからであ

る。努力を失ふ人間は自然に見放された人間である。自己なく靈なき人間である。自然の禍は禍でない。人間の努力を刺戟して進化の道を開發させるためである。努力を厭ふものは自然の意思に反し、進化の途を離れ、自己を放棄するのである。人間の自暴自棄が之れである。

努力して效なきは賽の河原の子供である。人間一生の幸福の眞義は賽の河原の子供でなければ得られぬことを知らねばならぬ。人間の努力が何の效果も報酬もなく、積んだと思へば鬼や惡魔に毀はされてしまふのは人間普通の眼に馬鹿らしく映る。映る人間は人間の馬鹿である。自然進化の眞義も、人生の働も、人間の光も解する眼がないのである。自然は力の外に進化の基礎はない、力は人を壓迫し殺害するものと思ふは間違である。人生に發育進化の道を與ふるが力である、人間に靈の光を見出させるが力である。自然の力は人間を透して現はれる、之れが人間の努力である。

人間が自己を見出し自己を發揮し、自信の力で事に臨み、神の如く働く力を見出し得るは努力を以て自己の靈を磨くからである。靈は力で事に臨み、神の如く働く力を見出し得る力は此靈を透して發するのである。人間の靈は人間の心の透鏡に喩へられ、之れを稱して

良心と名付くるは之れがためである。英魂も英靈も此明鏡の光なければ現はれぬ。

日本の武士は必ずしも此明鏡あるがためではなかつた。併し此明鏡を備へ得たものは武士中の武士であつた。楠公は其大なるものである。竹原は其小なるものである。大小の別は力と氣の作用に本づく性と人生進化の努力とに關するのである。楠公も竹原も共に自然の力と氣の靈化に過ぎぬ。

日本の武士は悉く動亂の世の花であつた。國土を護るは武士の力である。大和魂の保存は武士の道である。日本國民の靈を發揮し、社會の進化を計るのは等しく武士の本務であつた。此本務を自覺し、努力を致した武士ばかりが日本社會の花である。歴史を飾り、過去の光を將來に傳へ、國民前途の闇を照らすは此等の武士の功である。

十津川は武士の產地であつた。土地の自然が武士を產するに適して居る。武士は自然のまゝ、物產も何も出ず、唯だ水と土と金と木と最も單純な要素に限る社會に適する產物であつた。今尙ほさう信じられる。物質的文明は武士を產する力はない、無いばかりでなく、全然武士の魂を腐蝕させる。腐蝕させるのは事實である。物質的文明に觸れた武士空氣に曝された鋼同樣である。鋼が腐蝕するやうに武士の魂も腐蝕する。腐蝕の力は空氣に

ありては酸素である、物質的文明では華美である。併し共に自然の意思が解され、酸素が十分研究されて其本體も權威も存在の意義も明かにされる如く、華美の使命が人間に了解され其働の理想が實現されるれば、武士と華美との關係も今よりは改まるに相違ない。武士は人間の花であり、華美は物質の花である。人間社會の進化は兩花の和合を待つて得られるのである。社會の信と呪の的たる物質文明の現代の禍は洪水のそれと同一である。自然の禍でなく、社會のそれである。人間の進化は此禍を發揮するのが一つの途である。文化を人間社會の錆の如く呪ふは誤である。又たそれを神の賜の如く信ずるは誤りである。文化は人間進化の行路に於ける現象に過ぎぬ。

哲人は夙に之れを豫言して教えて居る。平和を理想とする敎の聖書は自然の禍と人間の罪惡とが基礎である。ノヲの洪水は人間社會の罪惡のために起り、死海はそのために出來たと傳へる。傳へるのは過去の事實の歴史でなく、未來の事實の歴史である。哲人の心は神靈の明鏡である。自然の力と時とに對し無限の境を照らし得る偉大な力を持つて居る。其の力は自然其者である。時の無限に達し場所の無限に屆くのは自然である。

自然進化の行程に洪水の殃あるは事實である。人間進化のそれに文明の殃あるも炳であ

る。十津川は大洪水で山奥に出來た湖水のために濁り出した。川の泥は湖水の底から流れ出る。面白い自然の作用である。湖水は哲人の豫言にある死海である。泥の死骸は此中に葬られ、流れて海に出で、復た本の自然に還る。

人間の進化は嘗つて貴族僧侶の階級を作り出した。之れが華美の煽動に努め、流行の泉源となつた。貴族僧侶の階級は何ぞ測らん社會の死海であつた。此底に多數人間の死骸が葬られ、社會の濁流を作つたのである。其弊毒の極まる時、其死海を破壞する大洪水が起つた。貴族も僧侶も其權威を剝奪された。之れが歐洲過去の政治と宗教の革命である。其洪水の結果として新たに死海が現はれた。新たなる社會の上流がそれである。社會は混濁せる文明の流を目擊し其弊毒を痛切に感じて居る。現代物質文明の呪はれ來たれる所以はそれである。現代社會の上流は死海である。貴族も富豪も物質的權威の外に位置を保つ基礎はない。其權威は社會無數の生靈の死骸に由つて出來て居る。平和の戰は一般勞働者の死を意味し、流血悲慘の戰亂は一般人民のそれを意味す。其死は社會上流の死海の底に葬られる。此死の原因は物質的華美の慾求である。上流階級の貴族富豪は幾んど慾求に努め、煽動に苦んで居る。哲人の豫言はまた〳〵新たに繰り返へされねばならぬ。現代歐洲

の大亂は物質文明の殃ではないか。人間進化の大洪水の一つと之れを意識して國土を護る武士の本務が解されねばならぬ。

平和の神の豫言は斯くして社會戰亂の豫言である。不自然なる死のそれであることを悟らねばならぬ。日本國民の自然の使命は明かに自覺されず、自覺されても其實現は遠き將來に期せねばならぬ。進化の道は現在の一歩で繫がれる。此一歩を斷てば進化は絶える。鎖鎖の力は唯だ一つの鎖が本である。國家の命脈も進化の力も目下の急を忘れてはならぬ。目下の急は武士の本務の自覺である。人間の花の發揮である、靈の復活である、良心の光である。一言にして盡くせば自己の本性を努力を以て見出す外にないのである。自然の靈氣は湧くが如く本性に隨ふて出る。古來の英靈は皆な之れである。國土の擁護も、社會の進化も、國力の發展も之れを措いては望まれぬ學問も、技藝も、物産も、金も命も此靈氣によりて見出される。見出されるばかりでなく、靈氣は即ち此等の物と感應して相引き相集まるのである。

靈氣の發揮は自然に自己を同化する、同化すれば生死の觀念は消滅する。武士本來の魂は此所に活きる。乞食でも、百姓でも、大工でも、左官でも、活きとし活ける人間は斯く

して眞の武士と化し得るのである。社會の階級、職業の差別境遇の變化に由りて英靈たると否との區別はない。靈は氣に通ずる力である。力は自由な方向を持つ、一階級、一職業一官位に限らるゝが如き偏狹な性質ではない。

日本の國土は同血の人間三千餘萬の力に由りて保たれる。其中眞に其任に堪へ得るものは百萬餘。病者、弱者、老人、子供、婦人等は素より其任に堪へぬ。堪へ得べき數の中、兵士として武裝さるべき資格のものは其二割には達せぬであらう。國民皆兵の實を擧ぐるも百萬の人間を擧ぐるに過ぎぬ。此の數の人間と雖、單に武裝のまゝを以て兵士とは言へぬ。國を護るの靈氣を保つて初めて兵士となり得るのである。然らざれば武裝の兵士も案山子に劣る。兵士の實質は活ける武士の魂である。國民皆兵の實を擧げ、其效果をして國土の擁護に堪へ得べき力あらしむるは、兵士の靈の發揮を努むるが唯一の途である。此所に國土擁護の靈の光が輝いて居る。他は悉く闇である。日本は事實闇の途を辿つて來た。古來幾千萬の武裝せる人間中に眞の兵士の少ない理由は之れがためである。形式と壓制とでは靈の光は現はれぬ。眞の士魂は活きぬのである。殿樣の前で裃附けて、四角張つて居た士中居眠した數は多くとも明鏡を以て君側を照らし得た數は少なかつた。其結果はお家

騷動である。武士はそれ故に四角張らず、形式に囚はれず、自由な自然の氣に觸れて靈氣を養ひ、魂を磨く必要があつたのである。斯る武士が士道を擁護して後世に傳へて來た。社會の花は單に此等の武士である。此古の花の餘香を感得して初めて眞の兵士が出來る。現代の方法は誤つて居る。兵營、練兵場、都會の空氣に近き場所には靈氣を養ふ自然の氣が乏しいからである、而已ならず形式、壓制と靈の光は兩立せぬからである。

兵士の働は肉體の働と器械のそればかりと思ふは大なる誤である。器械の精巧は靈の發現である、其働も靈の作用で有效である。併し器械は人間の支配を受けねばならぬ。肉體のみには支配すべき權威はない、與へられても空である。馬鹿者に精巧な器械を與へても無效である。靈の働ある肉體の外器械の效力は擧げ得ぬことを忘れてはならぬ。

又た兵士の資格は死を恐れず、生に囚はれぬ事が最も重大な條件である。生死を超越すべき人間の力は他から與へられぬ。與へ得るのは實際死ぬ覺悟をさせるのである。生死の超越は他からさせられて出來た覺悟とは全く異ふ。强ひられた覺悟の內には良心も、靈も光はない。心は闇に沒するのである。卑近な例を擧ぐれば兵士等の情死である。女に無理に口說かれて何だ己も男だと死を決するのと少しの相違もない。忠君愛國で覺悟させられた

死は之れである。昔の武士が切腹させられたのが之れである。斯る死が强制的死を意味する。眞の武士には死が自由である。强制されても靈の自由は犯されぬ。强制された死は悲慘の影が伴ひ、自由な死には幸福な光が輝く。死其者が後世を照らすのは此自由の光である。形式に括られて鍛はれた兵士は努力の割合に魂が入らぬ。魂は人の力で入るものでない。唯だそれは自己の自由な努力の結果發揮されたる靈を透して發する自然の力である。兵士に魂を與ふるは自然に近づけねば目的は達せられぬ。

武士で名高い十津川谷を大作は唯一人思に沈んで辿つて居た。谷は深く、道は山の中腹を縫ふ如く、見上げても見下ろしても恐ろしく、紆り曲つて、一町向ふの道にまで十町も廻らねばならぬ馬鹿も見なければならなかつた。又た上へ上つて見下ろせば通つた道が直ぐ目の下に見える。其上時には杖を腰に刺さなければ手に持てば危い所もあつた。捗らぬのは十津川の道である。歩いても歩いても、遲々として蚪の這ふやうな進歩である。厭氣が起る、こんな所は二度來る所でないと呪ふ。併し之れが十津川だと思へば其道が樂める。厭氣が取れる。境遇は凡て之れである。こんな自然の境遇に努力を惜まず進む間に趣味が解され、自己の發見が出來る。堅實な意思も、質實な習慣も自然に斯くて起つて來

る。武士氣質の素質は之れである。

蘇國の高地は武士の產地である、蘇人は英國軍人中の花と唄はれる。險難に處しても動かぬ堅實な意思と、一事を取つて變らぬ質實な性格とが蘇人の特性である。現代蘇人は英國の產業界の花である。產業界の花の特性は武士のそれと等しいからである。產業と武備との一致は此特性の發揮を待つて實現される。此所に國民皆兵の途が現はれる。人間の花と物質的文明の花の調和が計られる基礎に向つて進んで行く。

十津川は面白い所である。自然の特徵として馬が居らぬ。馬を使ふ平地もなければ、田もない。家畜が居れば牛である。此所には古から米がなかつた。米を知らぬ人間は今でも十津川には殘つて居やう。米を食はねば日本人でなく、武士でないやうな氣持のするのは因はれた日本人の癖である。十津川武士は米を知らずに日本の勤王武士の模範であつた。

十津川谷で出合ふ女は粗服を纏ひ、素足で元氣で顏の色も自然のまゝ活き〳〵して居た。今此等の女を思ひ起せば直ぐ愛蘭のケリー地方が思ひ出せる。道行く女がショール一枚頭から被つて素足で元氣で全く十津川谷の女である。唯だ人種の異なるためケリーの乙女の美しい色は別。美人と言ふのではない。乞食のやうな風で居る若い女が自然に近く、

山羊や牛を相手として山野の空氣に觸れ、飲食物も自然のまゝ山羊や牛と半ば等しい。動物が自然に進化するやうにケリーの女も自然に進化する。病氣も知らず、若い女に青白い色は無い。皆な活き〳〵した薔薇か林檎の美しい紅の色を湛へる。活きた人の血は此美に動くが自然である。愛蘭は有名な軍人の產地である、古來其特徵を失はぬ。愛人の誇は此一點であつた。詩人の天才、辯說の天才、天才は愛蘭に多い。此所の子供は性來詩的である、雲雀の鳴く空を仰いで終日飽かぬ。愛蘭が物質的文明の渦に捲かれて進化に遲れたのは偶然でない。十津川では女も男も煙草を吸ふのに椿の青葉を使ふ、店に青葉が吊るして賣つてある。店では客と主の差別もなく、商賣などは競爭のきの字も無い。無くとも出來て行く。

商賣は賣る者が主でなくて買ふ者が主であるのが自然である。それが物質文明の餘弊のために反對となつた。商賣が戰爭と化したからである。相手の血を取る途と化したからである。現代文明の最も强烈に呪はるべき點は之れである。血を流す戰爭の死は强制である、物を賣る戰爭の生は强制である。强制された生の半面は死を意味する。それ故に生が恐怖の原因となるのである。物質的文明に囚はるゝ人間は悉く生を呪ふ。呪ふのは當然で

ある。常に悲慘な死の影が自分を捉へるからである。現代の商賣が逆であり、不自然である必然の結果である。

五百瀨の谷に入る前、山一つ越えた。夕陽が山の半面を照らして何とも言へぬ景色であつた。秋草は山一面咲き亂れ、其美しさ、今も尙ほ眼に映る心地がする。日は見る間に沒した。風の凄さ、陰氣な雲が何所とはなしに現はれて來た。其光景が現代式である。物質の美を見て眼が眩む間にも生は强迫されて居る。宿らねばならぬ。日が暮れかゝる、雨が降りかゝる。食はねばならぬ、飢は身を襲ひ來る。强制される生の半面は恐るべき死ではないか。

五百瀨は錦の御旗に鳴り渡る。此所に昔は庄司、今は村長の家を訪ねた。旅人の宿は此家一軒である。旅宿は斯くて宿る者に旅宿の眞義を解させる。

旅の宿は旅人に取りて安全が第一要件である、慰安其他は此條件の附屬である。安全の意味は廣い。生命、物品の安全の外、人格の保障が重んぜられねばならぬ。日本では古來宿屋は賤業視された。旅館と名は改めてもさうである。不安心なは宿屋である。主が耽目だからである。旅館の主人に旅人と對當の資格を備へて愉快な氣分を與へるやうな人間は

稀である。紳士は名さへも旅館の主としては表はさず、裏面には居ても表面女性の名で營業する。不自然な遣方である。日本旅館は國の內外を問はず此點に於て缺くる所が見出せる。

大作は五百瀨の旅宿に着いて第一に驚いたのは玄關の武器であつた。槍薙刀、棒其他の道具が正面に掛つて居る。家は廣く軒高く、一見して呑まれたやうな氣分になつた。主人は頬髯長く、頑丈な見掛けの男、一見して古武士の影が偲ばれる姿。客に出合つても平氣な顏で一言の挨拶もせぬ。尊大な態度の內に、此所に泊れば安全だと言つたやうな氣分を傳へる。ヘコ〳〵頭をばつたのやうに地に附けて拜み込む宿引に較ぶれば、純朴な內に宿る自然の誠意が難有く感謝される。虛飾巧言なき世界は幸福を人生に祈つて與れる。寂しき山間の隣家も見えぬ家に來て大作は愉快な氣持であつた。庭には子供等が珍らしさうに彼を見て集つた。やがて彼等は純潔な唱歌を唄つた。聲は高く谷を越えて向ふの山に響いて居た。

室は疊はなかつた。板床に蓆を敷いたまゝ座布團も毛皮もなかつた。明りは洋燈であつた。娘か女中か質素な姿の若い女が膳を運んで障子の外へ來た。開いて內へ入る間もなく

白い新しい色の手拭を頭に被つた。其擧動に大作は一驚を喫した。女は無言であつた。大作も無言であつた。それでも少しも厭な氣も惡い心も起らなかつた。自然のまゝの乙女の氣は言葉とは沒交渉である。寢具は蓆と掛布團。枕は四角な木片、紙帳がまだ入るほど蚊が居つた。此等をも自然と言ふべきか、大作は頭も、體も氣息も壓迫されて終夜苦んだ。武士は戈を枕として寢たと言ひ、僧侶は石を枕としたと言ふ。不自然が人生の進化に適し靈を磨き、魂を發する道と考へられた結果である。迷へる人生の夢想である。煩悶に囚はれ自然に反せる人間の行爲である。物の自然が發揮されぬ結果である。

士の前に出る女の髪を包むのは男子の心を挑發する動機を制する手段とも取れる。一般日本、婦人が嫁して眉を剃り、齒を染めて自然に反し美を損ふたと同一である。壓制的、不自然な途を單に男子の進化と心得て發達を計つた社會は皆な大同小異同一な軌道を踏む。埃及に行けば女が眼ばかり出して頭も顏も包んで居る。のが不思議である。支那に行けば足が全部包まれて畸形にまで化した。跡が奇態である。女性の自然を以て男子の發達を妨ぐると誤解された結果である。日本では女性を遠ざけ男性の美で男子の進化を夢想した實例もある。大なる誤である。人生の進化は男女兩性合して初めて行はれる、人間の進

化は自然の氣に觸れて行はれる。靈の光も魂の力も自然を離れては發揮されぬと悟らねばならぬ。昔の英魂英靈は悉く自然の産である。花の餘香の盡きぬのは唯だ一筋に自然進化の途を辿るからである。

二十三　香の香

高野は弘法の聖地である。聖花の靈を山の自然に見出して彼は此所に杖を下ろした。下ろしたのは誤は無い。同時に彼は女人禁入の制札を建てた。建てたのが誤である。弘法の筆の誤は此四字である。

開放された高野は女人禁入の開放である。弘法の誤の懺悔を言ふ。誤まれる道は取り拂ふが誤がない。高野の道は自然に反し人心を迷はす。單に高野と言はず誤れる佛道は悉くさうである。高野が人心を化する力は香の香である。佛教の眞理ではない。又た自然の眞意でもない、又た眞理の眞理でも無理ない。高野の香の香は白粉の香を以て包圍され、高野の聖地たる實はない。自然の花の靈はない。一たび高野へ登つて周圍に眼を注ぐ者は俗界の不自然な女性の軍が法道に伏勢して靈界を呪ふ有樣に眼を掩はねばならぬ。不自然な

佛道の自から招く必然の結果にして、自然の禍でなく、人爲の自滅を意味して居る。

流轉輪廻を基礎とし努力を道の本體とする佛教の眞理は自然の進化の理と其本體の力とに一致する。佛教の眞理は自然である。佛法の不自然なる原因は人爲を以て法を說く者が法のために縛らるゝからである。人間は人間たることが自然である。自然の道は生きても死んでも離れはせぬ。自然の道を離るゝものは人間でない、然らざれば本性を欺き、自己を僞り、社會を毒し、罪惡を播く惡魔と云ひ下道と言ふは之れである。

大作は五百瀨を立つて、深山の道を辿り、塵も暑も知らぬ自然の清氣を吸ひ、半日の後水無峠にかゝつた。高野へは程遠からぬ山である。水無しの名は眞であつた。山に水無きは不自然を言ふ、地の自滅を意味し、人爲の罪惡が自覺される。洪水の原因は山林の濫伐である。物質を逐ふ社會の自から招く結果である。

物質文明は物質教に支配された社會進化の現象である。物質文明の呪はれる所以は物質の濫費に本づき不自然な結果を以て自然進化を阻碍するからである。人間社會の專横放縱が主たる原因の一つである。人生進化の阻碍と、人間努力の制限と靈の光の消滅が原因の原因を作る。自然の道に離るゝ當然の結果である。

高野は靈地にして靈界の水無峠である。佛法は人生の靈に活き、不自然の道に由つて人生の靈を消滅させる。靈の高野は靈に富まずして物質に富むは其實證である。高野杉の日本に冠たる所以は物質の靈を以て人生の靈を支配させ、壓迫させ消滅させる。適例である。物質の靈の横暴は狂虎の恐るべきより尙ほ恐るべき害をなす。人間を解し人生の靈を解する力ないからである。自然は物に人を支配する意思も、權能も、本體も與へなかつた。猛獸にもさうである。併し狂虎が恐るべき害を人間に與ふるは事實である、不自然の禍害と之れを名づける。物の暴力は狂虎より激しき害を人間に及ぼすは物の進化が虎より少ないからである。一般に人間の被むる不自然の害は進化の程度に逆比例することを悟らねばならぬ。

虎疫の害が狂虎より猛烈なるは此一證である。虎疫の菌素は進化の途を絶對に踏まぬのではない。砒素の如き無機物に較ぶれば虎疫の菌素は多くの進化を持つ。努力の効を積んで居る。砒素でも自然の力が氣に及んだ一個の生物である。進化に要する努力の少なきため無機物たる境遇に居らねばならぬ。砒素には砒素の靈がある。人間が受くる砒素の害は虎疫の菌素より猛烈な理は進化の差と其靈が人間のそれに通ぜぬとに外ならぬ。自然の道

を誤つて物の靈に人間を支配させる結果の恐るべきを言ふ。

人間の社會でも蠻人の暴力に支配の自由を與ふれば進化せる人間の受くる害の恐るべきは此理に由る。進化せる人間が蠻人を驅逐し、討滅を欲する所以は此害を恐るゝからである。恐るゝ所以は蠻人と靈の感應なく、自己の努力の乏しきに由る。生物の優勝劣敗自然淘汰は自然進化の道に由らぬ不自然の禍害に由りて起る宇宙の變體と知らねばならぬ。

高野が人生の靈界として自然淘汰の道に陷り、靈界に權威を失ひ、不自然な女性の迫害に踏み附けられ、自滅の運に向ひ弘法の最を現代に曝露し、佛法の過失を天下に謝するに至る根本の原因は一言唯だ不自然の禍害と斷定する。

大作は逆に高野へ入つた。五百瀬から水無峠を越えて此所に來るは逆の道である。自然の道である。登るのでなく、下つて山へ入つたのであつた。而かも彼は自然な道を通りながら不自然の壓迫を受け、暑い峠を水一滴得ず、高野へ入る前飢と渴とに襲はれて用意の糧を嚙じり始めた。彼は事實精進の山へ饌節を食ひながら入つたのである。面白い氣分であつた。

彼は高野の習慣も勝手も知らなかつた。普通の旅宿には就きたくなかつた。市街を見て

廻はつて其模樣の異樣に想像の力も出ず、一個の大きな城内の士族屋敷か大名屋敷と言つた風が想像に浮べば、頭の青い衣の黑い姿の人間が其想像を打ち消してしまう。物は悉く現實の世界に等しく、普通社會の花の屋敷と同一な形である。唯だ棲む者の形が異ふ。其者は同じ人間で毛がなく色に變化が無い。形の異ふ人である。不自然な人間、自然の人生が此所に住む僧である。

僧は人生の自然的進化に由りて生れ出た人間である。親がある。男性女性の氣と愛との作用に由りて生れて居る。人生最上の進化の階段を頭の形と衣の色で變化さすのが僧である。彼等は唯ださう形を變化した。世には逆に頭を曇染の頭巾に被ひ、尻を脫き出して、形を變へる人間がある。等しく親あり、氣あり愛あるものゝ作用を受け、人生自然の進化の途を經產れ出た人である。僧が手に珠數を持つ代りに凶刄を携へる。賊が之れである。僧も賊も等しく山に棲み等しく社會の花を夢み、等しく不自然の途を辿る。僧も賊も仕事は闇の世界に限られる。

僧が形の變つた賊に等しき事實の明證は中世紀の羅馬法王でも、日本の山僧でも歷史上に殘して居る。僧侶の斯る行動は不自然の形式に由りて自然の性に加へた壓迫の反動であ

る。性は水と等しく自然の氣に過ぎぬ。其力の變化に由りて瓦斯體ともなり、液體とも化し、又た結晶もする。性の力はそれ故に自然の物體其儘の原則が適用される。性は壓迫の下に如何なる場合でも力を增す、反動が起るからである。僧の不自然な形式は人間たる自然の性に與ふる壓迫を意味する。形式は不自由であり、不自由は壓迫の異名であるからである。僧侶として形を變へさせるは、其の壓迫の力を用ゐて靈の光を磨くべき創意であつた。併し其力が誤まられて靈を逆に滅してしまつた。其理由は僧侶が社會の花に眼を眩ま し、物質の支配を受けて、不自然の禍害に觸れたからである。

歐洲で舊敎の此弊を救つたのはルーテルであつた。日本では日蓮が志した。歐洲の宗敎改革は物質に支配された人間の靈の救濟であつた。宗敎の救濟ではない。又た單に物質や形式や偶像から靈を救つたのでもない。靈は凡ての事物に存在する。唯だ此の革命は人間の靈を他の事物の靈の支配から救つたのである。之れが人間進化の要訣である。單に宗敎の革命ばかりでない。吾人の豫言たるノワの洪水は之れを言つた。日蓮は志は徹底して居た。自然の眞理にも達して居た。彼が其達識を持ち、此志を抱きながら目的の途の百分の一にも進み得なかつたのは他に炳な理由があつた。彼は迷路に踏み込んだのである。彼を

信じて彼が足跡を辿るものは悉く其迷路に彷徨ふて居る。一生光明を知らずして朽ち果つる深山の雜木同一に化し了つた。

日蓮は路なきために迷つたのでなく、道あるために誤つたのであつた。彼が教界の人と化し、形を變へて靈の發揮に努めた效果は現はれた。彼は確かに明識の人格である。人生の進化は完全に遂げた。彼を自然の理想的人生の人格と稱し、或は再生と仰ぐも決して無理とは批難されぬ。完全なる靈の發揮は佛であるからである。彼が明識の人たるは之れを言ふ。

明識の人も社會を脫離し、地球を離れる月か日か星の如く、接せずして光あることを悟らねば達眼の人間ではない。彼が眼は地球の花に曇つて居た。彼は社會に立ちて自然進化の人間の軌道を離れて僧となり、眼は社會の事物に囚はれて居たのである。彼が志を抱き、彼が明識を以て迷路に踏み込んだのは月に昇り、日に達し、星に飛ぶべき路なきためにあらずして、地上に光る花の道あるためであつた。

彼が權勢に壓迫されて死を顧みなかつたのは俗眼にこそ偉大に映れ、靈の自覺ある人間の眼には普通である。自己を發揮し靈の光を見出すものは生死の差別觀念なく、境遇の心

を移す憂もない。生死等しく自然進化の軌道に在ることを自覺して、死そのものも靈の光であるからである。

壓迫した權勢は彼に幸福であつた。彼は一層自己を發揮し靈を磨き努力して活路を見渡すからである。靈の活路は肉體のそれではない。徹底する光の活路である。明識の自由である。地に在つては月を照らし、月にあつては地を明にする自由な力の發揮を言ふのである。此發揮は道なきがために初めて起る。靈は自由であり且つ自然の力は無限である。其力は靈を透して發し得る。道なければ道を求めて進むのである。靈の活路は之れである。

地上の權勢に囚はれた日蓮は其壓迫の手の緩むと共に目前の地上の道が眼に映つた。彼は此路を自己本來の目的の方向とは信じなかつた。無論である。彼は地上の權威を最上の權威と認めては居らぬ。地上の權威は物のそれである。時の進むに隨つて盛衰榮枯變化極まりない。其權威は人間の靈を呪ふ不自然の禍害となり得る。彼は此權威の道を踏むで靈の救濟に向つて進んだ、之れが彼の迷へる第一歩である。彼自身自己を欺き、靈の光を滅してしまふ端緒であつた。彼は此時賊となつたのである。物質の賊でなく、靈の賊である。

彼は人生の進化を全うした。此點より見れば權勢に從ふも從はざるも、迷ひもせず、自己も欺かず、靈の光は保たれて居た。自然の道にも偽ふて居た。彼を賊と呼ぶは呼ぶものゝ心の狂である。賊と呼んで、呼ぶものゝ心の正しき道の存するは彼が見棄てた自然進化の人間の途其者である。

彼は人生の進化に悖らずして、人間の進化に悖つて居る。彼は自然の道に片脚を入れ、片脚は其道を外してしまつた。迷はざるも完全な進歩は出來ぬ。自然の道は兩脚で歩かねばならぬ。片脚切れたら義脚を使ふ。天罰で切られた人間でも矢張さうして自然の道にかじり附いて居る。日蓮は天罰を受けるやうな罪はない、本來佛性と呼ばれ衆生に渴仰されねばならぬ人格である。物にも淡く、色にも染まず完全な人生である。唯だ其完全な人生は自然進化の長き鏈の一鎖である。彼が努力と彼が行爲は其鎖の一つを完全に仕上げることを明示する。彼が敎がさうであり、佛道の極意が此所に歸する。併し日蓮は其鎖を繋ぐ道は知らぬ人間であつた間に女を知らぬ日蓮は此道は辿らなかた。或人は妙法を少女の法と解する戯言である。併し事實日蓮は一切の婦女子を少女と等しくするより外の道は知らなかつた。彼は如何な美人でも平氣で玉の如き純潔な心と、冷やかなる血を以て、手を握

り、胸に抱き頰に接し、負ふても、肩に擔いでも變らなかつた。日蓮は之れである。妙法は之れである。不自然な所も之れである。彼が片脚を自然の道から外して居たのは之れであつた。

鏈の鎖の連接法は人間の進化の理を說明する。日蓮の妙法でない、鍛冷屋の秘法である。冷たくては此秘法は行はれぬ。日本にはまだ此秘法は事實實行出來ぬ。出來ても不完全である。要するに一個の鎖の素質は日蓮の如く完全に仕上げねばならぬ。個々の鎖を完全に仕上げるのではなく、其質を仕上げるまでに止まる。そして一ヶ所切り開いて口を殘す。此開が二つの作用の目的に適ふ。一つは連ねるため、一つは繼ぎ合せるためである。此開きの二つの作用が人間の進化作用に適ふと言ふ。冷たくてはならぬ、熱の加減と、打つもの、打たるゝものゝ靈の感應が此秘法である。妙法とは反對である。妙法の閉づる所が、秘法の開ける所である。そして其所で人間進化の道を行ふ。日蓮は如何なる道か知らなかつた。

人生の進化に限られ靈の發揮に努めた日蓮は明かに人間進化の道を離れたのである。喩へば地球の公轉を止め、其自轉の完全のみを保たんとした。四季の變化、春の嵐、夏の洪

水、秋の霜、冬の雪は地上に無用の如く考へたと同一である。自然進化の大道に開ける口は之れである。彼は小道に活きて大道に死んだのである。愛の本體たる太陽が地球の氣を發揚させる自然の力である道理に達しなかつたのであらう。日本の道は女精の愛が基礎であつたことを忘れたのであらう。彼が佛性は明かにそれを證する。彼が自然の賊であり、靈の賊たる所以が自然進化の大道に止まるは之れである。彼は香の香に醉ひ　人間の花に囚はれ、人間の實を忘れてしまつた。物の支配から人間の靈を救ふ大道に達し得ず、人生に活きて人間に死し迷ふて靈の賊となつた所以は之れである。日蓮の罪ではない地上に存した佛道と物の靈の祟であつた。日蓮の靈を救ふは物の支配を離れ、佛道を棄てるが第一の途である。物の支配を離れて、物を支配する途に就き佛道を棄てゝ自然の道に兩脚を開き濶歩するのが第二である。斯くて人間の靈を救ひ、社會を救ひ、國家の安全を保ち、自然の進化に從ふことが出來る。人間の花と物質の花、社會文明の進歩と自然進化の理想と和合一致し得るのである。

高野の山を彼方此所杉の靈を思ひ、坊主の頭を眺めて彷徨ふて居た大作は不圖普門院の學校を見出した。入つて案内を求めて一夜の宿を請ふた。案内に出た僧が何者だと訊ねた。

學生だと答へた。俗界の學校かと訊ね返へした。大作は坊主の學校ではないと答へた。此所は俗人の入るべき場所で無い、宿坊の案内所へ行つて宿緣の坊へ宿れと言つた。僧はそのまゝ入つてしまつた。後で大作は宿坊を訪ねて行つた。言はゞ血を吸ふ山賊の屋形を訪ねるやうであつた。

日暮て宿緣の坊に入つた。建物は宿屋などより贅澤で、萬事行屆いた設備であつた。伊勢から熊野、十津川の道中で、何所の宿屋でも此所ほど奇麗な室はなかつた。風呂場は湯桶まで塗物であつた。特に驚くべきは下水の設備である。佛性の腹を洗つて流れ出た不淨悉く一つの自然の川に入つて吐き出され、遠く山から落ちて行く。大作は喫驚した。と言ふのは高野へ入る前、名高い谷川に一筋の瀧がかゝる。それを見に態々道もないのに川に入つて辿つて行つた。山奥の川にしては不潔な水だと不快に打たれて氣持ち惡しく瀧を見たのであつた。宿坊で種々な話を小僧に聞く中下水の落ちる川を聞いて急に五體が臭くなつた氣持がしだした。高野は確かに靈界の死海である。俗界に落つる不淨が川の水をも混濁の流に化す。見ねば眞と信ぜず、聞かねば知らずに平氣に過ごす。某文士は世人に紹介してから記して居る事實さへある。高野の不淨の落つる流に棲む鮎は肉も脂も附きが佳

い。美味想ふべし。其川下は酒の名所此川の水でなければ佳い酒が出來ぬ。香氣一段の風味あるは事實であらう。日本と云ふ特種の社會で初めて斯樣な美酒佳肴が味はれるのである。米もさうである、野菜もさうである。死海の賚で日本國民は活きて行ける。天國か地獄か。何れにしても進化なき不自然な境遇たるは炳である。佛も鬼も人間社會の進歩的生物でないからである。

宿坊の膳部は贅澤であつた。伊勢の山田で贅澤であつたのは皿や椀の數丈けで、其實口に入るべき美味は一つもなかつた。高野のは異つて居た。塗物盡しの膳部で二の膳と云ふ有樣。大作は其實何れから箸を附けるのか、それも心得ないのである。食ひさへすれば可いのと、美味いのから食へば可い主義で食つた。人間は食つて眠れば罪は亡びる。眞理である。腹張れば目蓋が垂るゝ。眠れば惡人も善人である。賊も凶刄も罪は犯さぬ。此所に社會を救ふ一條の道が見出せる。それを照らすは生の自由の光である。

大作は食後案内されて和尚に出合つた。顏を見て彼は忽ち不可思議な懷舊の念に打たれた。和尚は大作を知つて居た。大作も和尚の顏に見覺があつた。和尚は柔和な微笑を浮べて年に似合はぬ血色の美い顏を大作の方へ向けた。大作は心の内にあの坊主だと思つた。

彼が少年時代家に居た時、此和尚は彼が家に泊つて居た。彼は何所の和尚だか知らなかつた。或日他所から歸つて來て汗に濕れて困つて居た。歸るや否や、湯に入つた。大作は水を汲んで與へんとて井戸の車を廻はして居た。和尚は周圍の人を相手に風呂場の戸を開いたまゝ湯の中から不圖何かの發見でもしたやうに大聲揚げて話し始めた。其要領はかうである。

其日彼は近村の海岸に在る虛空藏島に詣つた。此島は古から名高い神木のやうな古い繁つた樹木で蔽はれる。頂に社がある。和尚は此社の神は辨天だと言つた。大作は虛空藏島に何うして辨天が棲んで居るのか妙だと思つた。和尚が社の前に行つた時大きな蘇鐵が眼の前に倒れて居るのに氣が附いた。珍らしい大きな物だが切られて惜しいと思ひながら社に入つて經を讀んだ。彼は再び前の蘇鐵を思ひ起して見に行つた。不思議にも僅かの間に其影も見えなかつた。

不思議の念に捉はれて阪の石段を下りかゝるや否や、頭の上に異音を發した物があつた。見上ぐれば、こは如何に恐るべき姿の蟒蛇が體を樹に卷き附け口を開いて彼を眼下に狙つて居た。和尚は忽ち蟒蛇の咽喉の邊の虹の如き光線に眼を射られ其儘地上に腰を据え

て一心に經を唱へた。唱へ了つて仰ぎ見れば蟒蛇の姿は消ゆるが如く無くなつた。

から其塲の模樣を話して。自分は夢中で山を下りた。衣は水に濕れたやうに汗になつて居た。所の者に何か古から傳說にでも島に主の居る話があるか聞いて見た。そんな事は無いと言ふ。自分はつく〳〵考へて見るのに近來島の樹木を伐り出しかけて居る。それで山の靈が人間の淺墓な慾を怒つて居るのに相違ない。あの蟒蛇はあの時の姿から言つても人間を害する意思のありさうには思へぬ。吃度自分の心には辨天が蟒蛇に化して山の靈を鎭めるやうに告げたのに相違ないと思はれると語つた。

其時大作は井戸の綱を手に持ちながら眞面目に和尙の顏を見て聞いて居た。和尙は湯に入つて手拭を兩手に持ち時々顏を洗ひながら話したのであつた。其湯の中の和尙が大作には何時も機さへあれば想像に描き出された。そして次第にあの坊主が、あの坊主がと思ふやうになつた。それから再び變じて其話の中の妙味を覺えあの話があの話がと思ふやうになつた。併し彼が高野へ行つて和尙に會つた其時はあの坊主がとさも詐僞師か手品使に騙されて口惜く思ふやうな心である最中であつた。

和尙はアルキメヂスてはなかつた　アルキメヂスは心に不可解の問題を抱き專念心を集

中して居た。最中に湯に入つて水の浮力の眞理を悟つたのである。和尙は同じ湯の中でも浮說の外に眞理は悟らなかつた。彼は此浮說を以て人心を迷はせ經文の力を信じさせ、信徒の金を拔き取るにあつた當時彼の腐心して居た不可解の問題は何うして人民の懷に在る金を火炎後の寺の再建に寄附させ得るか之れであつた。アルキメヂスの問題は人間の懷の金ではなかつた。合金の中の金の量を拔き取らずに各計り得る方法であつた。眞理は物體の比重である。それを水の浮力から悟つた。

所謂靈界に物體の比重はない筈である。僞に眞はない。苟も縱し僞にもせよ、靈界に身を投じた人間に物體比重の眞理は悟れぬ。悟れば佛者が物に囚はれ、靈を滅する。併し眞の自然の靈界には物體比重に等しき靈の比重あることは眞理である。此眞理は靈界に囚はれては悟れぬ。浮說ではない自然の浮力が此眞理を發見させる。

靈は物質の力である。自然の力が氣に觸れて起す作用が靈である。精神と云ふも同一である。無形の働の本である。水も此の靈の作用なくては形の存在がない。金も、銀も、銅も、鐵も同一である。人間も亦た其性を同じくする。金銀銅の合金には三種の靈が入つて居る。金屬の氣の作用は一致して犯さぬ而已ならず、尙ほ複雜な進化を遂げ得る自然の資

格を持つからである。人間は人生進化の終局である。人生は氣と力の總有る作用の階梯を經て其進化を遂げ、初めて人間に達し得る。人間は氣と力の作用の最終點である。其靈中には宇宙自然の總ての氣が自然の力を受けて起すべき總有る作用を透す資格が備はつて居る。其靈の作用は人生の進化と人間の進化に伴ふのである。此作用が水に在りては水の力であり、金屬に在りては金屬のそれである。靈は自由な方向と自由な量とを持つ、其方向と量とは氣を透ふして現はれる。此作用の定量が靈の比重を現はす、比重とは一定量の力を言ふのである。

調和は凡ての場合比重の關係で定まる。金屬の合金も此比重の關係である。有形的物體は水の浮力を標準として定められた。此定則は不動である。それが浮動の湯に入つた人間の靈に由りて感じられたのである。

無形の靈の調和は靈の比重に由りて定められる。其定則も眞理も未だ人間の靈に感應せぬのであらうか、感應しても實現されぬのであらうか。

浮動の湯に浮かび浮說を說ける靈界の僧は人心と金とのアロイであつた。其合物の中に少なくも二種の靈が入つて居る。此等の靈の力は人心と金のアロイを破壞せず其儘に計り

知られる方法があるや否や之れが不可解な大作の問題であつた。彼はアルキメデスの風呂桶探しに一生を投じた動機は風呂桶の中に浮ける靈界の人間に與へられたのであつた。彼が最後に坊主を忘れて言葉ばかりを思ひ始めたのはそれである。山の濫伐は人間の靈と物の靈とのアロイの働である。此所に靈のアロイを合金と言はせて貰ふ。金屬のアロイを合金と言ふに倣ふのである。アロイの性は比重と質とに由りて定まる。定まると言ふは變ると言ふのと同一である。金の指環は普通純金はない。金と銅とのアロイである、金の比重と銅の比重は定まつて居る。金の質と銅の質も定つて居る。純金と純銅とは其量が變つても比重と質は不動である。普通の金の指環はさうでない。幾んど指環毎に質と比重が違つて居る。正直な商店では金と銅との分量を明かにし示めして、十五金とか、十八金とか二十金とか定量の刻印打つて買手に安心させる。それでも僞りの刻印がないとも限らぬ。

物質の比重が一定するため僞か眞かは指環を態々熔かして見ずとも知ることが出來る。併し僞物を眞物と言つて賣る人間の心は知る方法が無い。それ故日本では昔そんな人間は湯で煮るか、火で燒いて眞僞を定めた。之れが現代では放棄されて、たゞ安物や輕い物は牢舍で試驗し、重いものは殺してしまう習慣に變つた。併し絕對に人心のアロイを計

つて人間のまゝ活かして混合せる靈の分量を知る方法はない。釋迦も孔子も基督も之れに苦心した、併し彼等はそれを發見せずに人間を見捨てたのである。そして教を垂れて成るべく人間の靈を純潔に保つやうにせよと言つた。孔子は多數の弟子や書物で其意思を後世に傳へた。釋迦は山に入つて考へて、分つたと信じて下りて來て人間を計つて見て分らぬことを發見し、自分の考は誰れにも言ふな、言へば迷はせ誤まらせると言つた。そして南無阿彌陀佛と唯だ言へと言つた。其の本意は佛を信じて迷はぬためでない、教を聞いて迷ふのを防いだのである。金の指環を買ふ人間の心の不安、造つて賣る人間の心の不正言はゞ其等の社會の人間を正道に就かせ教のために迷はぬまでの教に過ぎぬ。

基督は一風變つた道を取つて人間に教を垂れた。自分は人心の不安を救はんために苦心したが、駄目であつた、力が足りぬ。身を不安な人間の心のために殺されて教を垂れる。純潔に心を保て、それが不安を去り、靈を全うする唯一の途だと言つた。

世界で有力な三教は悉く社會の人間を見て純潔な神の人間を標準にした。神、佛が人間の靈と物の靈のアロイを正す標準であつた。孔子の仁義の教も理想である。神、佛に異ならぬ。彼等は人間の心を正す眞理の發見が出來ずに最後の手段を取つたのである。

實社會はアロイである。アロイなしには實社會はない。善人と雖も、惡人と雖も、アロイである。人間のアロイは人生の靈と物の靈の混合である。靈の比重を知れば其合靈の分量を知る。人間を活かしたまゝ靈の分量を測定することが出來るのである。

靈は計量される性質を持つ、其比重を定むるは不可能でない。唯だ靈の水が得られぬのである。水は物の佛ではない。基督は犧牲の血を靈の水と考へた。併し彼が血は中性でない。神の兒と言へども人間である。自然を抂げた人間である。水は物の中性である。物の比重の標準は此中性であつた。人心の標準を佛性其他類似の性に取るは比重を得る方法でない。何が靈の中性であらうか。之れが終局の問題である。

人間社會の進化は靈の比重を見出す必要を感じた。社會に通貨の現はれたのは此結果である。

古代の物々交換は現代中間の通貨の媒介に由りて行はれる。此問題に觸れるのは經濟學である。經濟學者は物資の交換を人間の要求と努力の二大要件の上に成立つものと考へた。此考は誤でない、併し缺けて居る。此缺陷が自由競爭を人間社會に惹起して現代の物質文明を呪はせる因を發したのである。此二大要件は自然より見れば非常な壓制束縛であ

る。自由が此二大要件の上に限らるれば、自然の進化は破壞され、消滅されねばならぬ。二大要件は平面を意味するからである。自然の進化と自由とは三大要件の上に成立たねばならぬのである。人間の自由と進化が平面上に限られたのは恐らく原始時代であつた。地中に入り、空間に飛ぶに及んで其自由と進化とは三大要件の上になる立體面でなければならぬ。經濟學が物質と人間の要求、努力を論ずるに平面上に限るのが、人間進化に束縛を與へ、不自然に導き、社會を自から破壞する所以は之れである。

物資と人間との關係は地上の平面で行はれた。併し進化はそれでは古から行はれぬ。若し無理に行はせるならば木も草も枯れねばならぬ。金も銀も堀ることは出來ぬ。水も酒れたであらう、地上を歩行して活きる人間の外厘かに牛馬犬羊の類に限られて幾んど他は生存の自由を見出さず唯だ死の自由あるばかりであつた。之れが古來人類の文明を呪ふノワの洪水ある唯一の原因である。

物資交換は一言にして盡せば靈の交換である。何人と雖否定し得ざる自然進化の社會に於ける交換の原則は之れより外に見出されぬ。物資は自然の力と氣の作用の結果に由りて生ずるを言ふ。地に生ずる草木も、人の作る道具も、地より湧く水も、鐵管を流るゝ水も

地より堀り出す石炭も鐵も金銀も悉く以上の結果に本づかぬものはない。

人間の努力は自然の力と氣の結果である。人間は人生進化の結果であり、自然の力と氣の作用が人生の進化を行ふからである。人間の要求は人間の進化に要する自然の力と氣の結果の外に何物もない。清淨な空氣を求むるも、新鮮な食物を求むるも、其他衣服家屋等一切の生活必要物の要求は人間の進化に必要なる物質の要求に過ぎぬ。華美を好むものは好んで身を飾り、家を飾るも可なり。而して其華美の慾望を滿足させ得る物資の供給を他人に求むるも差支はない。若し他人が供給するを好み、製造する自由を持てば努力する。併し努力は自然の物に加へられて初めて物資が得られるのである。自然の物とは地から堀る寶石、金銀、海から取る珊瑚眞珠、地に生ずる香木珍花、人の手に成る絹布羅紗等華美の原料たる桑、羊毛等の如き皆な自然の物である。此等の物の自由は自然の自由である。人間の自由ではない。立體的自由であつて、平面的自由ではない。靈の自由で、肉體の自由でない。人間進化の自由で、人生の慾望の自由でない。經濟學の原則の誤まれる理由は之れである。隨て通貨を物資交換の標準とするのが誤である。人間を黄金の奴隷に導くのは此誤れる標準あるがためである。

物資交換の標準は靈を基礎とせねばならぬ。靈は不滅にして進化なく人生の進化と人間の進化の基礎である。事物の標準は不滅不變の性と一般に通じて誤なさが最大條件である。靈の外に此性を持ち一切の事物を通じて此資格あるものはない。又た人間の物資交換は人間の進化が目的である。此目的に適ふ標準は進化其者の基礎でなければならぬ。此基礎が人間の靈より、性質の下位なる場合は人間の進化に勢ひ退歩を生じ、惡結果を來たさねばならぬ。必然の結果であり、且つ自然の眞理である。金屬のアロイが高位の金屬より品性の底下を生ずるは自然の眞理である。金を物資交換の標準とする結果人間の品位を底下させ、人間の進化を退歩させるは自然の眞理である。人間の靈は物質一切の靈より上位にあるが自然だからである。人間自身の靈の外に此標準に適するものはないことが分る。

此結果經濟の原理が信用を基礎として起らねばならなかつた。人間の信用とは何であらうか。不變不動の性の外に信用の基礎はない。良いから信用があると思ふは間違である。惡いから信用が無いと思ふは誤である。良くても變り易すければ信用は無く、惡くとも變らねば信用がある。信用は質の良否に由らずして作用の變不變に由りて生ずる人間の感情である。それ故に人間の信用其者は不變不動の性質は持たぬ。而已ならず格段なる意義も

一定不動の存在も、確實なる權威も、信賴する本體も持つては居らぬ。人間を迷はせ、人間に不安を與へ、人間に人生の矛盾を感じさせ、悲慘を悟らせ、死の自由を慾望させる結果を生ずる。人間社會の所謂信用は之れである。

夫の家產に信を置き、夫は世間の信用に見放され、妻にも告げず、自殺した後ち、自分の初めの信用が夢より墓なくなつた妻たる女は信用とは如何なるものか、十分よく知つて居る。女の德の足らぬためではない、女の力の足らぬためではない。女の罪の大なるためではない。女は佛の如く、神の如く、玉の如く、人間の鏡となるべき性あつても此不幸と此悲慘と此矛盾とが遠慮なしに襲ひ來る。其原因は社會の所謂人間の信用である。經濟の基礎は惡魔の毒氣より尙ほ人間に有害である。

斯くて現代の經濟界は惡魔の世界であることを實證する。此世界に人間を迷はせ導き出せる罪は英國の所業である。アダムスミスの國民の富力は空中の虹である。彼が說ける分業論は光線の分解である。彼は其分解せる光線の色を以て人間を迷はした。之れに迷ふた人間は社會の人間でなく國家の人間であつた。國家の衝に當れる人間は一國の富力を望むこと渴者の水、乾天の雲より尙ほ烈しかつたからである。分業の光を國力の泉と信じて其

道を辿れるものは分解、分裂自から虹とならねばならぬ運命に陷ることを知らなかつた。國家の指導命令の下に分業に從事して努力させられた國民は努力に伴ふ幸福報酬のあり得べき道はない。彼等は虹を追ふて走れる子供であつた。徒勞、衰弱、昏倒するに至つて初めて悟り、顧みれば道はなく、家は何れか家族は如何にせしか、朋友も兄弟も虹を追ふて走れる間は心にも眼中にもなかつた。而して死に臨んで自分は唯一人道も、人も、家もなき野原の中に倒れて居る。之れが現代の經濟界に於ける分業に使役された勞働者の實狀である。單に鎚を持ち、鋸を持ち、鶴嘴を持つて地上に風に曝され、地中の氣に打たれて働く人間ばかりでない上は國家の大臣より下は電話室の乙女に至るまで悉く同一運命である。分業の道に就き自由競爭に駈られる者は何人と雖も此運命に陷らざるを得ぬ。如何なる國家の大臣も勞働者であり、公僕である。

分業の道を辿つて國力を增せる國家は外觀の美麗空中の虹と同一である。されど其虹を見て實際其中に入れば、色は眼を去つて、唯だ冷氣の身を襲ふを感ずるばかりである。之れが現代物質的分業の道を辿つて自由競爭に駈られ、個人主義の標榜の下に世界に國威を張り、既往の羅馬の宗教的權威を物質的權威によりて置き換へ、華美驕奢の光を以て濶步

せる英國內部の空氣である。

英國を亡ぼし、英國民を死に導けるは物質主義者、分業論者のアダムスミスである。彼は勞働を人間を離れて考へた。考へねば彼の議論の基礎は破れる。勞働と精神とを分けるが分業である。之れがスミスの分業說の基礎であり、同時に罪惡の基礎であつた。人間の勞働は肉體と分れては存在せぬ。人間を器械的に使役するは、人間の精神を殺すものである。其肉體の知覺は仕事に向つて働くも、精神の自由は全く沒却されるからである。物質的文明社會に精神死滅し、靈の光なく、人格の向上なきは之れがためである。反對に神經衰弱者を發し、常識の名の下に馬車馬的人間を生ずるは此社會の特徵である。物質文明の呪はるゝ所以、社會主義者の輩出する所以は炳かに了解出來る。貧富の懸隔があるからではない、富豪が奢を極め、貧乏人が飢餓に苦むからではない、分業のために人間の勞働と精神とを分け肉體を活かして精神を殺したからである。

肉體は食はねば活きぬ、勞働は勢ひ多くの分量を肉體に要求させる。其結果、自由競爭の社會では生活が强制に行はれる。精神なき人間は靈なき人間である、靈の乏しき生物は動物である。物質界の人間が動物に化し去るは之れがためである。

貧乏は人間を高尚にする望はあつても墮落させる恐は決してない。貧乏の人間を墮落させるのは貧乏の境遇ではない。貧乏とは生活必要物の缺乏せる境遇である。比較的不自由な生活である。此境遇は釋迦が山に入つたそれである。僧侶を靈の人間に化し、清純、剛健な精神的人間に作り上ぐる眞の教の道である。物の靈の支配から人間の靈を救ふ唯一の境遇である。此尊ぶべき靈の樂しき境遇が人間に斯る禍を下す道理はない。貧乏な人間の墮落はそれ故に貧乏のために起るのではない。起る所以は人間が靈を殺して動物化するからである。貧乏が人間を墮落させ得る力を持つは、物質に化せられた人間社會の特徴に過ぎぬ。自然ではない。自然進化の道に外れた惡魔の世界の現象である。現代の經濟組織の至大缺陥は之れを言ふ。人間を逆に進ませ動物化し行くが此組織の特徴である。人間の自然進化に逆行の軌道を與へたのは之れである。現代の經濟は人間進化の經濟ではない。分業の經濟である。精神と肉體とを分け、動物と人間とを混じ。富と貧とを分けて、富は層富み、貧は層貧にし。生と死を分け、生に鞭ち、死に力を加へ。國と人民とを分け、國を富ませて、人民を貧にし。男と女を分けて、男を醉はせ、女を疲らせ。國家と社會を分けて、兩々瞋み合はさせる、之れが現代の分業的經濟である。

分業的經濟に缺陥を與ふる最大原因は統一の基礎の消滅である。空中の虹は水蒸氣のために太陽の白光が分解される現象である。虹の美觀に實體なきは之れを追ふ子供を殺す原因である。併し虹に實體ないのではない。事實實體に美觀を備へて存在する。其存在の不確で捕へられぬのが子供を殺す原因である。何故に虹は此罪を犯すであらうか。不確な美觀の實體は何故に捕へられぬであらうか。此虹の存在の缺陥は何であらうか。此缺陥が現代の分業經濟の缺陥である。

空中の水蒸氣は分裂して統一の基礎なき點が特徴である。此特徴なければ空中の水蒸氣たる資格がない。方向は自由に與へられる。併し自分で動く力はない。風の力で東西南北吹き廻はされる。其統一されて雲となるは無數の水蒸氣の個々分離せる小球が風のために吹き寄せられ一團の如く群つて居る。其實は雲に統一の確かな基礎は無い。風が止めば忽ち雲は飛散する。之れが空中の自由な水蒸氣である。

分業的經濟社會の勞働者は上は大臣より下工夫に至るまで空中の水蒸氣である。社會の美觀とは此等の人間を透す自然の力の現象に過ぎぬ。邸宅を飾る瓦斯燈や電氣燈、屋根や壁、馬車や自動車、芝居行きの晴着や、子供の頭の帽子、下つて工夫等貧民の社會では、賣

られた娘や女郎、妾が身に纏ふ綺羅顏に塗る白粉髮に飾る簪、指に箝める寶石の指環、足に穿く駒下駄の如き、皆な虹の光の一小部分である。社會の物質的華美虛飾は悉く或は格段な色の光線に適ふ。而已ならず四苦八苦競爭して位置を求め高給を望む官僚の眼、外國の壓迫や內國の政爭に疲れる大臣等の白髮頭や禿頭。終日終夜上役の命に服して働く役所や會社の役員等の苦がり顏。外では日に照らされ、內では又た火に炙られて終日汗の乾く間なき職工等の額、物質的競爭で搾らるゝ脂が又た格段の光線に屈折する。軍人や巡査の劍、强盜追剝の刄物は面白い對照の屈折である。此他社會の自由な分業的人間の虹に女の氣焰が含まれる。此光彩は社會の虹に最も悲慘な强烈な力を與へる。

本來女性は男子の氣を受けて人生に進化を與へ、愛の力を以て自然進化の途を行くが當然である。之れが女性の自然である。物質的自由競爭と分業的經濟組織とは全然女性の自然を破壞する。女性の自然は太陽の光線である。光線の光と色は氣を透して初めて自然進化の效がある。個々氣と光線と分離して接觸の道を塞げば、地上の生物は幾んど悉く絕えねばならぬ。人間ばかりに女性はない、禽獸蟲魚草木の花に至るまでそれを保つ、そしてそれが等しき愛の力によりて同類の進化に保護を與へる。其中人間の女性は地上の女性の

精であり、愛の中心でなければならぬ。女性の力は愛で、愛は其本體である。其働は氣に宿りて現はれる。自然は女性をさう作つた。

自由競爭と分業とは女性を男子から分離した。兩者の間の統一の基礎を破壞した。女性の愛は本來日光と等しく無色透明、社會の色素に見出されぬ純潔な光を備へる。それが社會の統一なき水蒸氣の如き男子の氣を透すとき分解されて種々有色の光線と化する。政治的慾求に駈られて參政權の獲得を呼號する情も、男子に向つて職業の競爭を挑むのも、嫉妬の情に燃ゆるのも、煩悶に苦むのも、人生の矛盾を呪ふのも、僧を眞似て世を棄て尼となるのも、男子を恨んで死を選ぶのも悉く女性の本體たる愛の力の分解され屈折される現象である。一言にして盡くせば女性の德を破り、自然の進化を阻碍するは現代の分業的自由競爭の物質世界である。

現代の英國は物質的分業の經濟主義に於て中世羅馬の法皇より尙ほ幾層倍の害毒を人間の進化に與へて居る。其英國の風を傚ひ、其經濟主義に煽られた日本の現代は等しく社會を水蒸氣化し盡さんとする。其の害を英國のそれに較ぶれば尙ほ巨人の前に立つ子供である。高野を羅馬に較べたに異ならぬ。日本的と世界的との相違がある。

試みに高野に就て現代の日本社會を眺めて見れば弘法の立てた女人禁制に唾吐さかけて日本の女が登つて行く。昔は夫の氣を爭ふた二人の女が内に潜む嫉妬の焔で燃え立つ髪を搦ませて組み合つた話がある。現在尙ほ殘る刈萱の堂は此の傳說を語つて人口に膾炙させる。女の力に心を燒かれた刈萱は高野へ遁れ、所謂貞婦は子を伴ふて夫を慕ひ、子を憐み、遠く九州より高野へ尋ね來て、弘法の筆に押へられ、子供を山へ送つて自分は文路の露と消えた。愛の力が社會の浮氣に分解されて强烈なる色を現はす一例である。女性の德が罪に變ずる一證である。弘法一人の罪ではない、女性の德の自然を解せず、其無色純潔の光を分解して有色の光に屈曲させ、德を化して罪となす社會の蒸氣の罪である。佛法は女性の德を認め得ず、其の罪を認めた。男女の關係の不自然な習慣に囚はるゝ社會の反動である。男尊女卑の社會の然らしめた結果である。大作が後年和尙の話した言葉の中に悟り出した妙味とは此女性の本體を指したのである。和尙は辨天の靈を見たと言つた。大作は詐僞坊主と思つて彼に高野で出合つた。併し和尙は人民には詐僞で、佛道には詐僞でなかつた。彼は佛法の忠實な奴隷であつた。辨天の靈を蟒蛇に現はしたのが其の炳なる證據である。佛法は女性を毒蛇に比する。佛法ばかりでない、基督敎でもさうである。聖書の初め

にイーヴの心を毒蛇に魅らせ、後ち其毒蛇の心を信じて夫アダムを欺かせて居る。女性の德を認めずして、其心の浮薄輕佻を云めした一證である。此敎も元來男尊女卑の社會の產物だからである。

凡て男尊女卑の習慣は人間の進化に逆比して强烈である。一般に下等動物から順次高等の動物に向ふに隨て此の關係が保たれる。人間中では野蠻から進化の度につれて此習慣が薄らぎ行く。自然とは野獸を言ふと思ふは自然を解せぬ人間である。自然は進化が生命である。進化せざる動物に自然の本體は完全に備はらぬ。人間にも未だ備つて居らぬのである。自然は進化の行程を進めて初めて其眞體が見出せる。人間が神となり佛となつて進化の最終に達した時がさうである。然る時女性の德は明かに無色純潔の太陽の光線に歸る。女性を陰とし、男性を陽とするが東洋の習慣である。男尊女卑の由つて起る所以である。氣は陰にして愛は陽と解せねばならぬ。弘法の筆は自然進化の途を塞ぎ、愛の德に悖り、人性を惡に導き、人間を悲慘の死に陷れた。之れが過去の宗敎の世を誤れる權威である。

此の權威より尙ほ强烈なるは現代の物質主義の勢である。女性の德を有らん限り分解し屈曲し、愛の本體は言ふに及ばず、其の存在の意義も、權威も悉く破壞され、蹂躙される

に委ねるは此の主義の存在するためである。自然の聖地を呪ふは高野の要路に陣取る白頸の女ばかりでない。今それは現代的物質主義の浮華輕佻の浮氣に逍遙ふ一般女性が自己の光を蔽はれ、德を曲げられ、本來の性も見出さず、使命も自覺せず、矛盾に憤り、悲慘に死すものゝ悉く瞋恚の焔を向ける的である。

大作は翌朝香の香と燈明の光の絶えぬ奥の本院へ參詣した。案内の僧は寺院の數が日本國の數ほどあると言つた。弘法が日本の法皇であつたやうな氣を起させる。そして日本六十餘州の大名豪族の上に立つて靈的權威を振り廻はして居たやうに想はれる。彼等が發する紙の御札は現代の信用手形であつた。異なる點は後者は價格を記入し、前者は記入せぬ。記入せぬ所に御札の貴さが在る。一枚の紙片が變化自在な効力を持つからである。信用の基礎でないのは論外である。併し價額記入の現代の紙幣、手形、債券、證券でも御札と何の異なる所はない。共に實體は魔法の如き權威が信用で出來て居る。

大名豪族の頭を跳ねた僧侶の城廓が寺院である。其寺院の區域内を通り過ぐれば有名な高野の杉の並木がある。其周圍は一圓墓地であつた。大作は眼を圓くして眺めた、そして日本の大名豪族は馬鹿の骨頂だと獨語した。態々此所まで骨を持つて來て、其上石塔まで

建てたのかと思つて訊ねた。所が彼の想像は當らなかつた。大名豪族は言ふまでもなく自分等の國々に遺骸は葬つて墓は先祖代々同一地所に祀られてある。高野の墓は悉く空墓だと言つた。カラバカと大作は思はず言つて笑つた。

空墓だが此所は靈を祀る場所だと僧は言つた。靈？　靈とは何にかと訊ねた。不滅の靈魂だと答へた。形が有るかと訊ねた。無いと答へた。形の無い物が何うして分ると訊ねた。香があれば形なくとも物は在ると答へた。尤もだと大作は思つた。靈の香は何うして分ると訊ねた。俗人には分らぬと答へた。俗人と僧侶の別は何だと訊ねた。肉を離れて靈を見出す努力に由りて異ふと言つた。大作は可しと答へた。其努力あれば俗人でも靈の香が分るかと訊ねた。分らぬと言つた。大作の眼には圓く剃つた頭と白地木綿の着物と金襴の袈裟が映つた。僧の眼には毛の生えた圓い頭と白絣の着物と色の變つた被蓙とが映つた。其對照は氣に活きる人間と香に活きる人間を示めして居た。

僧侶の嗅ぐ靈の香は活ける人間の靈か、死せる人間の靈かと大作は訊ねた。靈に二樣なしと答へた。肉を離れぬ、靈と離れた靈との差別があらうと訊ね返した。有ると答へた。花卉を離れぬ香は佛者は厭ふ、併し死した花の香は嗜む。人間の靈も此香の如きかと訊ね

た。大作は會心の答を得なかつた。佛者の目的は死せる人間を救ふに在るか生ある人間を救ふに在るかと訊ねた。生ある人間を救はねば死せる者は救へぬと言つた。僧となるより俗人の方が人間を救ふに適するだらう、何故に僧となつたと訊ねた。肉を救ふは俗人の所爲靈を救ふは佛者の本務、僧とならねば生ある人間の靈は救へぬと言つた。僧たる本務を全うする最大の要點はと訊ねた。人間本來の光を自身の努力で見出すのだ、それが即ち靈だと答へた。大作は謝した。僧の後から歩きながら彼の眼に金襴の光が眩く光つた。

奥の院の骨堂に達した。一方の本堂には鐘の音が響く。何だか無常と云ふ二字の意味を心の底に彫り込むやうに耳を衝く。周圍には多くの俗衆が隨喜の涙か恐怖のそれか、聲を震はせて稱名して居た。彼等の眼は骨堂の中に一種の光でも射るやうに集中される。骨堂は地を圓く堀り煉瓦か瓦か石かの周壁を持つた直經二間位な穴を堂で蔽ひ、周圍の壁は格子戸にして中を見るのに便宜に作つてある。中の骨は皆な白紙に包んだ小さな骨佛と云ふものだと云ふ。眼にはたゞ小さな捻り紙しか見えぬ。穴の底は分らぬ、兎に角其中に投げ込まれ、言はゞ佛の手に返へされた無數の人間は何所の馬の骨だか分らぬもの同士、紙一重隔たまゝ頭も胴も突き合はせ、大師の手引で彌陀の淨土に極樂往生が出來て居る。

此骨に眼を注ぐ人間は心の光を何所へ、何に向つて注ぐであらうか。其所に高野の權威の潜む秘藏があるに相違ない。骨堂の周圍の俗衆は眼に溜る涙の球の透鏡に骨の光を受けて居る。其光が彼等の心に入り込む時、心は何を感ずるであらうか。佛者は敎えて十萬億土の未來の佛の御座と云ふ。其の遠き無限の境界は普通俗衆の眼にも心にも見えはせぬ。それを照らすは唯だ靈の光あるばかりである。其の光が骨から發して俗衆の心に入り初めて遠き無限の境界にある佛の御座が見透かされる。唯だ此場合、光は一度隨喜の球の涙を透らねばならぬ。透らねば其の光は俗衆の心に入つて靈の作用をなさぬのである。隨喜の涙は彼等が渾身の信仰を含む。此信仰の力が無限の努力に等しい。無限の努力にあらざれば發揮されぬ、死を恐れぬ精神が信仰に由りて發揮される。それ故に此信仰を起させ、隨喜の涙を流させ得べき力の量は靈を發揮するに要する努力の量に等しくなければならぬ。此量は又た死に對する生の不安を消滅させるに足る丈けの仕事をせねばならぬ。人間の不安は死が近づくに隨て大きくなる。其所に若し死を越えて向ふの方に神か佛か無限の力が出現すれば不安は無くなる。死に對する心の不安は現在自分の心の重量の働である。佛の力は死に對する佛の重量の働である。其故に此所に天秤の原則が現はれる。高野の權威は

此天秤の作用であることが發見され、證明され、疑はれぬ。骨堂内の骨は天秤の支柱人間は品物、佛は重りに相當する。

佛法の秘法は三大力の平衡に潜む。言ひ換ふれば三大位置の手品である。其證明はかうである。死と人間との距離は有限で近い、人間と佛の間は無限の遠さである。次の方程式が成立つ、佛の力は不可思議。不可思議な力の信仰は隨喜の涙。

(佛の力)×{(人間と佛の距離)−(人間と死の距離)}=
(人間の信仰)×(人間と死との距離)……(A)

或は (佛の力)×(佛と死の距離)=(信仰)×(生死の距離)
(佛の力)×(無限大)=(隨喜の涙)×(生死の距離)……(B)

$$\text{佛の力} = \frac{\text{隨喜の涙} \times \text{生死の距離}}{\text{無限大}} = 0 \text{(實際的に)} \quad \cdots\cdots(C)$$

Aの方程式は眞である。信仰は力の性を持つからである。尙ほ人間と佛の距離と人間の死の距離とは時の長さを現はして、時は方向のみを持ち、何も他に持たぬが其特徴たるを知るからである。

Bの方程式も眞である。佛法は佛と人間の距離を無限に遠いと假定する、そして生と死

の間は無常だと言ふ。且つ死は生と佛との間に置かれる。佛の道は未來を說くからである。死も未來である。人間の生活せる現在から言へば同一方向である。而して信仰の力と生死の力の間の距離は有限たることは言ふまでもない。其結果Cの方程式が眞として成立たねばならぬ。佛の力は零に等しい隨喜の涙に力はない。因へられ、自由のない心の涙だからである。言ひ換ふれば自然には佛はない。人間の空想にそれが眞なる外存在の理は發見されぬ。人間の空想は自然進化の途を外れ、進化に何の効を與へず迷路に彷徨ふ人間の空なる努力に外ならぬ。佛法に信仰を起さるゝ人間は實ではない。其信仰も亦た實の信仰ではない。

其實證として一例を擧ぐれば、弘法大師信仰の後家が居た。大師樣信仰で眼は眩んでしまひ、後生大事に務める。此女が大師の信仰で眩んだ眼は他の一切に眩んで居た。迷信は心の闇を言ふからである。慾には殊に眩み方が强よかつた。金は一文でも他人の懷へは唯だは入れぬ。入れたならば錆でも附けて取り返さねば承知せぬ。食はす物も唯だ食はさぬ。食はせたら、早速自分の便所で腹に在る丈け吐き出させる位な腹の質であつた。死ぬことが恐ろしく、佛が尊く想れる。自我のために佛が尊く想はれ、死が恐ろしく思はれる人間

は一般此强慾非道の人間と類を同じくすると斷定して差支はない。

・佛敎の眞の敎と、眞の人間とは以上と異なつた槓杆の作用を行ふ。

等しく骨堂の中の骨を見ても、眞の靈ある人間は隨喜や恐怖やそんな心の動搖せる現象に由らずして、靜肅不動の心で眺める。骨が人間の死であることは無論認める。認めても其死を未來と認めぬのである。言ふまでもなく骨堂內の骨は過去の死を語る。人間進化の活面から言へば死は常に過去の事象にして決して未來に存在するものではない。佛法が人を迷路に導き、人間が佛法のために進化の道を踏み外す唯一の原因は死の未來觀である。言ひ換ふれば人間の進化を忘れた人生觀である。又た佛法の權威の維持も、秘法たる所以も死を人間の將來に取る一事に在ることを悟らねばならぬ。

死は人生進化の未來である。併し人間進化の未來ではない。人間の將來は永遠の生である。人間に人生の死を恐れ、佛を將來に求めさせた動機は、社會の壓迫、權勢の橫暴、其の他自己の過失、人間進化の缺乏、人間社會の組織の缺陷等總有る此等の反動の結果である。宗敎の矛盾が又た此所に伏在する。古來社會の宗敎は橫暴壓制の道具であつた。そして人間に人生觀を起させて、來たるべき死の恐怖と永遠の神の力で人心を天秤棒の一端に

吊し上げて動搖させなかつた。宗敎の力は社會の道具としてかう働いた。一言にして盡くせば社會の宗敎は人心を殺し、活社會の活人として立つべき人間の本性を自覺すべき道を斷ち、唯だ遠永の影に囚はれて自己の不安を消滅させるに止まつて居た。東洋現在の衰頽の境遇は佛法に阻碍された人間進化の道の杜絕と斷言する。

高野の骨堂中の骨はそれ故に天秤の刃と斷定する。本堂の鐘の響が佛の力と云ふ天秤の重りである。それが次第に遠ざかり心に十萬億土に達する考の發したとき、所謂發心が出來る。死んだ親や、戀ひ慕ふ亡夫の面影が佛の側に見えて來る。そして自分の心の不安はなくなる。其時は心は括られた牛か羊のやうに地を離れて宙に吊り下げられ、天秤棒の尖に往生して居る。此往生は無論自分の一人の力では出來ぬ。肉體を自分の手で支へ上げることの不可能なる如く人間には自分の心を括り上げて宙に往生する力はない、無いのが自然である。又た人は自分の肉體を括つて地上の自由を失ふのは意思ではない、それが人間の意思であつたなら間違つて居る。意思でないのが自然である。括られて宙で往生の出來るのは他力の本願の宗敎の力である。又た括られて地上で自由を失ふのは、奴隷である。前者は靈の奴隷で、後者は肉體の奴隷である。

肉體の救濟は俗界に委ね、靈のそれを本務と口にする宗教は其實肉體の奴隷は俗界に委ね、靈の奴隷を本務とする。それが社會の宗教の眞相である。

肉體に鐵鎖を括つて往生させる奴隷の制は社會から一掃された、人間の自然進化の道理に悖るからである。

靈を人間の骨で括り宙に吊りして往生させる奴隷の制は公然世に存在する、之れを目して人間進化の道に適ふと言ふのであらうか、眞理を解せず、香に迷ひ、香の香に心を囚はれる人間の社會は自然進化の道を踏外して居る。衰亡の運に向はずと信ずるも、前途は明かに塞つて居る。社會其者の往生は其所である。其所と言ふ所以は明かな將來と信ずるは玻璃鏡だからである。道は目前鏡面に塞つて居ても分らぬ。外國漫遊の日本人同樣鏡に行當つて初めて目が醒める、宗教の鏡の厚さは無限である。鏡の面が何所に在るか知れぬごとく、死も衰滅も何所にあるか知れぬ。併し未來は奇麗に見える、之れが宗教の敎である。又人生の實際である。此實際の人生を唯一の根據として人間の心を自繩自縛させるのが宗教の秘法たる權威にして同時に社會に尙ほ存在の位置を保つ所以である。恐るべき宗教の害は之れである。之れに由りて人間の進化は阻止されてあからである。

宗教は人間進化の道を塞ぐ玻璃鏡である。人間を人生の小なる輪に局限し、人間進化の大道を見せしめず、而已ならず靈を救ふ美名の下に靈を括つて其自由を剝奪し、實の社會から影の社會へ人心を移してしまつた。殊に東洋の宗教はさうである、專制政治の國體の宗教はさうである。

肉體的奴隷を禁じ、悉く其惡制を自覺して社會に其存在の影を止めぬ、現代の人間は進化の功を誇つて居る。其誇ある人間は何故に社會に宗教の自由を認むるのであらう。此自由は嘗つて宗教が横暴壓制の政治的道具から進化した一段の階梯に過ぎぬ。宗教の自由は進化の終局では無論ない。宗教の存在に自由を與ふるは大なる誤である。殊に現代の宗教に其儘存在の自由を與ふる社會は玻璃の面が冷い死の手のやうに眼前に塞り居るも知らぬ憐な境遇である。

人心に宗教の自由を與ふると宗教の組織に存在の自由を與るとを同一と考へてはならぬ。人心宗教の自由は靈の自由の働を意味するも、宗教組織の存在は必ずしも靈の自由を意味するとは言へぬ現在の日本の宗教は事實靈の自由を束縛し消滅させる炳なる證據がある。

宗教が人生に關する問題のみに限られ、人間の進化に與るを得ぬのは社會が宗教を待つ所以ではない。人間の靈に自由を與へ得る宗教は人間の進化に與らせねばならぬ。此意味は宗教が單に形式の葬儀靈の救濟等に限られて、一般教育から除外された、又た政治に參與する權能のないからである。國家も社會も此點に於て宗教と等しき害を國家並に社會自身の上に與へて居る。尤も此弊は宗教に化せられた社會が基礎で此國家が成立するからである。國家も社會も宗教も共に自覺して、人生問題と人間問題の調和一致を計るのが目下の急務である。

日本は產業政策の必要も其實行も明知する。其方法は、原料の撰擇、製造の確實市場の擴張此三要件を一致させる。之れが此政策の要綱である。之れと等しき要綱が宗教政策並に教育政策の上に成立たねばならぬ。之れを稱して國民政策と言はせて貰ふ。國民政策の三要綱は靈の發揮、人間の進步、人間活路の發展である。自然進化の道は悉く一致して悖らぬ。靈の發揮は人生の進化に基づかねばならぬ。人間の進步は人間の進化である。活路の發展は生の自由の發展である。

以上の三要綱は自然的に分業で行はれる。人間が分業を覺えて來たのは自然的進化の結

果である。人爲的分業は必ず自然的分業と一致せねばならぬ。一致せねば自然進化の道に悖る。悖れば自滅を招くは必然である。宗教も教育も政治も人爲的分業である。自然の分業と人爲の分業の一致すると否との差は明かに分つて居る。自然は一定せる進化の標的に向ひ、統一的分業を行ふ。其實行の樣式は自然進化の行動の定制に歸一する。其適例は地球の行動である。地上の生物の進化は悉く地球と同じ性質の行動を取る、之れが自然の分業と統一の關係であると共に其行動の樣式は一定の習慣性を作つて居る。

例へば地球は南北の方向を持つ軸の周圍に廻轉し、同時に太陽の周圍を廻はる。地球に屬するものは悉く此自轉と公轉との二樣の行動を持つ。持たねば自然に悖る。太陽系の地球の分業は太陽の力に基づく氣の發揚である。地球に力はない、力は凡て自然から受ける。太陽系の力の中心は太陽である。地球は自己の氣に太陽の力を受けて自然の使命を全うする。

地上の人間に人生の進化と人間の進化の別あるは人類系統の二樣の樣式である。同樣に人生の進化の中にも亦二樣の樣式が成立つて居る。人生の進化は男女兩性の作用である。太陽系の太陽と地球の關係が其儘男女兩性のそれである。地球が太陽の力を受けて、其氣

を發揚させる如く、人生の發揚は女性の愛に挑發された男性の氣に基づくのである。古來女性の靈を太陽としたのは自然に適す。日本は自然の國體である。人爲で男を陽とし、女を陰として轉化したのは人間が自然に反した一例である。日本に支那の陰陽說を入れ、印度の宗教を入れたのは自然の國體を不自然の軌道に導くに與つて力があつた。尙ほ存する諸說諸教は悉く國體の自然を害し、國體の自然進化を阻害する惡魔の行動である。

陰陽說の起りは地球と月との關係にして、地球と太陽とのそれではない。月と地球の場合は地球が女性である、月は男性でなければならぬ。地球の力の衰滅は月の活力の衰滅であつた。地上の進化に陰陽說を適用して男女の關係を自然の道に背かせたのは人類社會滅亡の最大原因である。

人性は善でもなければ惡でもない。善惡は自然には無い。惡魔の行動のために人間の行爲に與へた名稱であり、且つ習慣である。自然の人性は太陽と地球の行動の習慣を持つ外何の力も持たぬ。地球の性は太陽に對しては遠心力を發揮する。月に向つては求心力を發揮する。女性は男性に對して求心力を發揮し、男性は女性に對して遠心力を發揮するが自然である。之れが男女兩性の公動上の樣式である。同時に男女は各自自己存在の必要上、

地球の自轉に等しき行動の性を持つ。其性は自然進化の行動の定則である。即ち二樣の力で支配されねばならぬ。其故に男も女も其私的行動は遠心力と求心力とが働いて居る。圓滿なる私的行動の性ある人間はそれ故に兩力の平衡を保ち自己の存在の安全を得ること恰かも靜止せるが如く直立して回轉せる獨樂と同一である。人間が自己を發揮し、本性を見出し、靈を見出すとは之れを云ふのである。自己の安全を保ち、安心立命を得るとは之れを云ふのである。自己には力なく、單に氣あるのみにして、他の力を受けて無限の力を發揮し得るとは之れを言ふのである。不自然を去つて自然の道に從へとは此道理あるがためである。日本の國體を維持し、其本性を發揮し、其靈を發揮して自然の道に歸れとは之れがためである。佛教も、儒教も經濟の學說も悉く廢して、日本自然の使命を持つて自然の軌道に隨ひ世界に臨めとは之れがためである。嗚呼我は今本心湧くが如き熱涙を以て此所に筆を進め、此國民の運命の末路を如何にすべき今日は大正五年十月三十一日今世人は天長の式に列して皇家の二千歲を祝して還れり。而して天祖は此國を呪ふのである。呪ふ所以は日本自から國體を忘れて不自然の行動を取るからである。時は丁度大正五年十月三十一日正午十二時。

我は狂せるか。再び筆取りて自然の理を說かん。

宇宙自然の細胞は悉く二樣の惰力に由る二種の樣式に支配さるゝは爭はれぬ。地球は人類の最も著しく了解する實例である。自然より觀れば地球は太陽より分裂せる細胞であつた。月は又た地球から分裂せる細胞である。太陽の本體より地球は小さく地球の本體より月は小さい。而して月は地球の力に由る保護に由りて生を保ち、地球は又た太陽のそれに由りて生を保つ。此三つの次第に分裂せる細胞は相次で行動の惰力を傳へた。此惰力が三個の細胞の遺傳性である。

此等の細胞の中地球に就て考ふるに地球上の總ての細胞は各地球の自轉より受くる求心力と遠心力の兩惰性あると同時に其公轉より受くる求心力と遠心力との兩惰性がある。自轉より受くる細胞の各部分に働いて、此惰性に由りて分裂の作用を行ふ。之れに反して公轉より受くる惰性は中心に働く、之れに由りて統一の作用が行はれる。此兩樣の作用は自然の生物一般に通ずる公性である。此公性の發揮が靈の發揮である。世人が現代自己の存在と唱ふる意味は此公性の圓滿なる發揮に由りて自然進化の途を離れぬことを言ふのである。地上の生物に靈性の存在し得る資格あることも、其靈性は一は遺傳の本性より成り、

一つは自己の努力の絕えざる發揮に由ることも之れがためである。靈はそれ故に自然の力が氣に由りて發する完全なる作用を言ふのである。靈はそれ故に形に現はれ、色に現はれ聲に現はれ、味に現はれ、香に現はれ、行に現はれる。言ひ換ふれば靈の生物の活動である。努力なしには靈の存在も、意義も、權威も、本體も、自覺されぬは之れがために了解出來る。靈に力あることも、隨て計畫され得べき性を保つことも、靈の性に差別あることも、隨て比較され得ることも炳である。人間を初め生物一般を通じ靈の比重の得らるべきは決して空想でないことが了解される。又た靈は自然の性として分業的行動と統一的行動の二樣の下に完全なる存在の意義を保つことが炳である。又た其二樣の行動の意義に付ては分業的行動は自己の直接保存のため、統一的行動は自己の保存を保護する、一般組織の維持のためであることが炳である。此靈の働ありて自然の目的に適ふのである。自然の主義は實行されつゝあるのである。普通世人が唱ふる自然主義は自然の主義ではない。靈の何物たるを解せず、自己の本性を發揮せず、自然進化の大道を外れ、暗き所に彷徨ふて、自然の光線に觸るゝを厭ふ人間等が自己の心情の發表である。靈なく、自己なき人間に主義はない。若し有るとせば沒自然主義とそれを言へ。

現代日本に唱へられる支那問題、米國に唱へられる日本問題を考へても分る。支那には日本の唱ふる支那問題はない。若しあれば日本に米人の唱ふる日本問題が日本になければならぬ。併し日本では同一問題を加州問題と唱へて居る。そして性質は正反對である。表裏兩面の觀察は相反するからである。一物を爭ふ力は衝突を免がれぬからである。統一なき二力の行爲は相接觸して激するからである。進化の軌道を外れて暗き所を彷徨ふものは眼が見えぬからである。日本と支那とが若し日本人の口癖に言ふ自然主義と同一意義が支那問題に適用されるならば、それは所謂沒支那問題と化し、日本の自滅の反照である。自然の主義を說ける序に一言して置く。

分業と統一は自然進化の二大行動であることを言つた。男女は分業の理に基づいて統一の途を踏むが自然である。分業的には自己の保存を目的とする、其進化は人生である。人生觀は靈の發揮が自然である。靈の發揮は無限の生である。之れが人間進化の基礎である。靈の發揮せる人間に生死の別なき理由は炳である。靈の發揮を無視した人間の人生觀は人間を表裏あるものと自覺する心の表現である。それ故に人生に生死の境界を置く、人生の進化に斯る境界はない、人間は母體を離れる前から活きて居る。母體に入る前から活

きて居る。男子の氣は生活ある要素である。此氣は男子が生れる前から持つて居る。斯くして順次盡くる所なく無限に活きて居ることが炳である。

所謂現代の人生觀は人生の觀察でないことは、所謂自然主義が自然の主義でないのと同一である。現代の人生觀も、昔のそれも宗教や普通哲學の論ずる人生觀は一言して盡せば沒人生の觀察である。靈の發揮なく、自己の本性を自覺せぬものゝ陰暗なる迷路に彷徨して、自然の大道に出るを得ず一生恐怖と不安とによろめきて木を杖に、岩を便りに步行するものゝ自滅の叫である。獨樂を見よ、靜止不動で立つて動いて居ながら動搖もせず、音も起さぬ。力がなくなり、活動が消滅するにつれて、動搖し初め、音を出し始める。之れが獨樂の所謂獨樂觀である。所謂人生觀は此種の獨樂觀を言ふのである。獨樂の活動の消えかゝるとき獨樂觀はない、靜止不動で廻つて立つ時に眞の獨樂觀は見出される。人間の人生觀は之れで初めて意義が現はれる。

獨樂の靜止不動は他から力が與へられねばならぬ。言ひ換ふれば獨樂の生の自由は力の自由であることを悟らねばならぬ。若し獨樂に力を與へず、自己の自由に放任すれば死滅するより他に途はない。之れが即ち限りある力の範圍で放任的に生の自由を與ふれば、生

の自由は忽ち變じて生の强制と化し、生の强制の半面は死の自由である證明である。此所に人間社會の人生觀が發起して來る。此所に不安の種子が芽を出し初める。此所で宗教が肥料となりて其芽を發育させる。此所に恐怖の木が生える。之れが現代の人間に等しき生物である。現代の恐怖は生の强制に囚はれたる人間の心に死の自由の手が常に痛を與へて居るからである。之れが統一なき分業の道に迷ふ人間が當然の結果として受けねばならぬ自滅の境涯である。

過去の宗教は此人間社會の人生觀の田に丁度石灰肥料のやうに其用途廣く、効驗も著しく、信仰も厚かつた。併し其反動が却つて人間の活氣を殺ぎ、靜止不動の活人の行動を行はず、石佛か何かのやうに固くなつて活きても死んだと同じと云ふやうな冷たい人間に化して來て、初めて人間は之れでは自滅と氣がついた。それで宗教の革命が起つたのである。此の革命を日本では無駄のやうに思ふ、此革命がなかつたなら歐洲は化石して、今頃は化石の人間が東洋邊に見世物か或は惡い人間に高野の骨堂の骨のやうに使用されたかも知れぬ、歐洲現代の文明と人間の活力は宗教改革の惰力であることを悟らねばならぬ。

此所に謹で一言して維新當時バーリーバークスに英國史を示めし、宗教の害は此通り悲

慘な結果を社會に與へると熱罵して、日本に基督教を入れることの問題に就いて爭ひ其の功績を自慢して世に發表された現代の侯爵大隈氏に正す。基督教の移入を何故に爭ひ、何故に宗教革新のために流された血を恐れられたか、此革新の血の力に由りて人間の靈は發揮され社會の獨樂は靜止不動の有樣を以て廻轉し近代の歐洲文明は作り出されたことを自覺されなかつたのであるか。縱し又た宗教の害のみ見て、其害毒を伴ふ基督教を日本に入れることを爭はれたのを許すとするも、何故に現代の侯爵大隈氏は現在の早稻田の邸宅に住み、實社會の活動を離れ、隻脚で世を渡り、滿園美花を作つて天下の目を羨望させ、而して世外に立つ老達識を氣取り、萬事に附けて批評の自由を得られたのか、其半面の生の自由の基礎を天下に公表し得らるゝ勇氣ありや、現侯爵が最後に大命を受けて首相の印綬を受けられたのは其の前首相の生の自由の基礎の開發の結果であつた。某氏は貴族院で、某氏は衆議院で首相の裏面的行爲を曝露し、彈劾した言辭は今も尙ほ世人の耳に殘つて居る。そして某々兩氏は大隈氏近交の人間であつた。其結果首相の位置から放り出され、現在公人としても私人としても社會の表面に顏を出し得ぬ境遇に其人間は陷れられた、其空位を狙つたのは大隈氏である。

氏は大の熊にあらずして、大の狸であることを斷言する。前首相の生の自由の基礎の不正が人間陷落の因たるを世間に公表し、自己其位置に上つて天下の指導に任ぜられた首相は自己の生の自由の基礎の公正にして、其の基礎を以て天下指導の力となし、將來首相たり、社會の指導者たるものゝ模範とするに足るものなることを根本的に自から天下に示されなかつたのは遺憾である。此の一事が氏の言語行動に徹底せる意義も、本體も、權威も又た事實、實在の感も起らぬ原因である。之れが遺憾とする所以である。之れが大きな熊でなく、大きな狸たるを悟る所以である。狸の聲には縱しそれは鼓の美音を發すとも實在の權威は無いからである。公人たりし首相大隈氏は實際世人に此感を與へられた。斯く自分は明かに此感を受けた一人である。尙ほ現在日本の政治社會を監視せん目的と、遠大の理想を以て此國民を指導せんとする同氏のためではなく、此國家社會の實在のために、斯る空言に迷はさるゝを戒むるため、此言は費される。

又た大隈氏は天下青年を指導教育すべき大なる設備を以て帝都の一角に根據を据える。其主義は主として現代に推し進める、英國の產業主義に由つて居る。氏の主義たる自由改進は宗教の上に行はれず物質と知覺の上に行はれるのが主意である。氏の邸宅も壯大な生

活も、理想の百歲以上の生の自由も此主意を說明する。此の邸宅の周圍には一方の塀の下でも幾百かの人家が肩を縮めて並んで居る。此等の家に住む人間は悉く氏の年齡の三分の一にも五分の一にも或は又た百分の一にも足らぬ生の自由しか持たぬ。此等の不自由な人間に氏は如何なる公論公理を以て生の自由、百年の高齡を保つ公道を敎えるであらうか。氏の理想的主義の英國近代の國力增進說と其實行とが高野の骨堂の意義と等しく狸の腹鼓の美音に過ぎぬことは炳である。

宗敎の過去の社會的權威と、物質の現在の社會的權威は何所にも相違はないのである。宗敎的權威の與へた弊は等しく物質的權威が與へる。宗敎的に社會に流れた血は等しく物質的に社會に流れる。宗敎的革命を行つた國民は物質的權威に對して革命を行ふは炳である。行はねば社會も國命も死滅するからである。子供の廻はす獨樂を見よ、消えかゝればまた打つて力を加へる。人間社會は自動的獨樂である。自動的で他力が絕對に無用とは言へぬ。同一目的で同じ組織の內に在る中心の力がなければならぬ。地球は自動的な自然の獨樂である。太陽の力は地球に無くてはならぬ。自動電話は獨りで働いても中央の交換局がある。社會で自動と言つても自然界に自動と言つても絕對な自動はない。自動は分業的

力で之れに生命を與へ保護の力を與ふるは統一的の中心力である。之れが一般の進化的行動の定則である。

革命を恐れ、流血を恐れ、宗教の害を以て高論の基礎とし、其の利の存在を實驗ある先進國の人間に質すことを忘れ、其利の効力が現代文化の原動であつたことを天下に高言しなかつた大隈氏は却つて現代文化の形式たる物質主義と自由主義とに迷はれた。そして物質的分業の道に就いても自由競爭の夢をみられた。之れが氏の主張の改進黨の英國主義である。近頃政友會の暴を暴を以て打破した同志會次で起つた憲政會の主義である。此等の主義者並に其主義の渇仰者は物質界の所謂高僧智識と其渇仰者に過ぎぬ。大隈氏は物質界の弘法である、早稲田は其高野である。高野は靈を救はん美名の下に靈を奴隷として、却つて死滅に導き、早稲田は肉體を救はんとして却つてそれを殺すのである。共に人間に靈の自覺と發揮の道を塞ぐからである、共に生に强制を與へて死に自由を與へるからである。大隈氏が弘法たる所以は之れである。早稲田の學生は物質界の高野の僧である。其の公的使命は天下に肉體的人生觀を鼓吹して、私的には御札と天秤で生の自由を計る秘法を學んで居る。國體の自然進化の大道とは一致せぬ、靈を忘るゝからである。人間の進化を

忘却して人生觀に囚はるゝからである、流血の國民的活動を恐るゝからである。死に等しき平和を望むからである。望まぬと誇語しても、其響には實在の靈がない。狸の腹鼓は闇夜に迷へる人間の外、自然の靈ある人間は騙されぬ。蓄音機で政見を發表し、御札同樣の名前の書いた刷紙で信者の心を釣つた人間は正に腹鼓の狸、高野の僧の首魁である。之れを理想とし、之れを擔ぐ青年等は悉く現代の浮薄輕佻な統一なき空中の水蒸氣に等しき自由放任な物質主義人生觀に昇せ上つて居るとしか受取れぬ。斯る青年のため、又た其青年等の父兄のために此言を敢てする。敢てする所以は青年、父兄等一般國民が其自存の道を計ると同時に必ず生命の活力として受くべき力の主體たる國家の中心力を煩はさねばならぬからである。彼等が自暴自棄の行動は即ち國家の本體と社會の組織に危險を招くからである。血を流すの危險にあらず、靜止的衰滅の危險である。

大作は骨堂に受けた一種の感想を保ちつゝ奥の院と云ふ本堂へ入つた。大きな建物。建物の形も、內容も、普通の寺とか社とか、堂とか云ふ意味では推されぬやうな特種の風がある。割合に建物は低くて廣く、木材の自然は表はれず、大抵漆で塗つてあつたやうである。佛壇と云ふものがさうである。自然のまゝの白木は使はぬ。金箔塗り漆塗りで造つて

居る。佛法の沒自然人爲的なる證である。像の體も金箔附きである。之れを日本國敎の社の白木の建物、鏡の光に比較すれば理想の差が著しく分る。

本堂に入つて眼を驚かすのは蠟燭臺である。其上に大小紅白形も色も異なつた蠟燭が幾千本か光明を放つて立つて居る。蠟燭は皆信者の寄進である。木に蔽はれた陰氣な山の凹み、弘法が此所を蓮の花の底に喩へた、其所へ建てる低い平たい塗物の暗い堂內に佛の光を正面にして無數の光がチョロ〳〵光る。成程と天秤の皿の上で往生して居る人間の心の光の反射か分る。此所が高野の秘藏である。此所が十萬億土の佛の世界である。靈なき人間が眼を涙で塞いでしまつて心で觀る人間理想の世界である。よく考へた偉い。骨堂も此所も自然科學の應用である。そしてそれが理想の靈の發揮を其儘形に現はして居る。之れが俗衆に分らぬから、矢張彼等が隨喜の涙を利用して反射作用を適用せねばならぬ。涙は此所に於て無限の厚さの玻璃鏡の作用をなす。

自分の心の無限の距離は自分の心其者であることは屢々言つた。繰返へして言へば人間が地球の上で一番遠い距離と云へば地球を一週した自分の位置の外にはない。此例の道理は空間凡ての場合に公通である。此場合自分と云ふものは、一週せずに立つて居る場合と

一週して來た場合と同一物でない。努力の差があるからである。

人間の理想は自然進化のそれである。靈の發揮の外に人間の理想はない。發揮された靈の形を佛法では佛に形どり、光明に形どり、他の凡てに形どる。蓮の花もさうである、香爐もさうである、珠數もさうである、僧侶の頭もさうである。賽の河原の石もさうである。皆圓い、圓くなければ楕圓、楕圓でなければ其變形である。四角五角もあるかも知れぬ。兎に角種々あつても現はされる形の根本的性質は理想の靈の外に出ぬ。理想の靈の形とは地球や、太陽や月の形である。自然進化の道に適するそれである。一本の軸に對して平等の位置を保つ二つの氣が釣合の取れる形が之れである。そして同時に此等の氣に作用を與へる力が總て一點に統一されるに適する形である。言ひ換ふれば靈の働は一組織體に發揮され、其發揮は分部の細胞の靈の發揮の統一である、それ故に靈の形は分業的に發揮する細胞を一つの中心の周圍に兩々均勢の位置に保つ。シムメトリカルな形が之れである。進化した動的物體は悉く此形を備へる。船體でもさうである。彈丸、飛行機、自轉車の如き人爲の道具を初めとし、魚、蟲類、人間の如き生物、天體の如き自然物皆さうである。大なる部分も又た其內の小なる一部分も同一形を備へる。動體の靈の形は之れが理想

である。併、動體以外靜止的の物體は必ずしも此形を保たぬ。人間が死して其形を破壞するのは自然である。靜止の體は此必要もなければ保つに困難なのである。一口に言へば各部細胞が自分の活動で發揮して分裂を行ひ、空中に飛散する。其力を統一して居た力は體全部の活動であつた。體の活動が止まれば統一力がなくなるのである。分裂の起るのは自然である。支那の如きは人間社會の分裂の適例である。死はそれ故に必ずしも人間の體の腐敗ではない。死は人生の進化を終り、其行動が休止して永き靜止に就けるとき各細胞は自然の力を受けたまゝ解散して自然に返るのである。地方の議員が召集されて議事堂に集つて活動する間が議會の生活期である、其活動の期が止めば議員は四散して本へ返る。活きて居る議員は又た召集されて議會へ出る、それと同一で人間の細胞も活きて自然に返つたものは其儘復活する。つまり人間の材料に使はれる。細胞の活ると否とは人間の靈の發揮如何に關する。生存中に努力して靈の發揮につとめた人間の細胞は凡てそれ丈けの惰力を備へて居る。それが飛散して何時か何所かの田郎作の氣となつて、それが其女房の胎に宿る、そして發育すれば其人生の靈の素質は尙ほ前の惰力を持つて居て、それに多少田郎作の惰力と女房の惰力を加へて居る。併し主たる惰力は其細胞に最も大なる努力を以て靈の

發揮をさせた者と本性でなければならぬ。田郎作の子に哲學者が生れ、英雄が生れ、或は强盗が生れ或は其女房の子に教育家が生れ、美人が生れ、尻の輕い妖婦の生れるのも不思議はない。人爲の行動思想形體は皆な細胞と力との作用に過ぎぬからである。

人生の靈は人間にも活き、其體の凡ての細胞に活きる。そして各細胞は分業的靈を備へる。美人の形の細胞は其形の靈を備へ、又た其形の行動の習慣は其細胞に傳つて行く。各細胞の靈的作用は人生の進化を達した人間の努力に由りて尙ほ其上に新たなる力が加へられる。丁度子供が獨樂を廻はして、時に與へる力と同一である。

之れが人間の靈の不滅な原則である。靜止せるものには絕對に靈の存在はない。靈の力は體の各部細胞の活動が統一され一定の目的に向つて集中されて外部に現はれねばならぬ。其の靈が發揮すれば人間の各部細胞はよく廻はつて居る獨樂と同一である。生活ある地球と同一である。死ぬことなど夢にも恐れぬ、思ひもせぬ。隨て其の人間は安心が保てる。人間の靈が發揮せず、統一力がなく、唯だ體の組織の細胞のみが遺傳の惰力で働いて居るから其の人間の心に矛盾の感が起り、不平が起り、悲觀し、病氣を起す、氣の持ち方ではない、細胞の働と人間の働とが調和せぬからである。それ故細胞の本性が知れ、其の

活動の慾望に滿足を與ふれば病氣もよくなり、不平もなくなり、矛盾の感も、人生觀もなくなつてしまう。此滿足が趣味の發動である、趣味の發動は努力の刺戟である。本性の發揮も、靈の發揮も之れが本である。人生はかくして其意義を解し、本來の性を悟り、存在の意義が樂しく解され、生の權威も尊く、自然も有難く、神も佛も感謝され、自分の心に其等の光が見出される。自然に同化し、靈の理想に達し永遠の生を保つ自覺は斯くて初めて發するのである。

此自覺を本堂の佛と光明で俗衆の心に入れる、之れが佛敎の秘法の他の一つである。

本堂の正面の佛像と光明とは人間自然の活動の意義に適した形である。佛像は內容は空虛でも、木でも、石でも金でも外觀丈は理想的である。理想的とはシムメトリカルな主意の下に作られた人相である。又光明は光ばかりが俗衆の眼に美觀を示めすのではない。蠟燭の心の燃える有樣に一種の感想を起し自分の心の燃えることを想像する、之れ丈けでも細胞の不滿を一時欺瞞し鎭靜させる、尙ほ此の他に光明の焰の形がシムメトリカルである。而已ならず蠟燭も其臺も同形に作つてある。食へない奴等は坊主である。海の坊主は食へるのに、山の坊主は之れだから中々食へぬ。

蠟燭の心の燃える焰の形はシムメトリカルな形を以て、そしてそれが燃える間に小さな細胞が蠟燭の體から熔けては液體の油となり、直ぐ心に吸ひ上げられて焰となる、よく燃えるもの、燃えぬもの、種々あらう。燃えるものは材料もよく撰ばれ、製造方法も苦心してある。燃えぬものは反對である。信者は光明のよく輝く蠟燭の良質を買つて備へるが自然である。靈の發揮は人生本來の性であると同時に安心が出來ぬ。安心の出來ぬとは自分の心はさうでなくても體の中の細胞の惰性の不滿がそれでなければ鎭まらぬ。如何なるケチな人間でも高い品を買つて佛には供へる。佛のためではない、體の中の細胞のためである。人間の祖先の靈の怒に觸れぬためである。體の內部の細胞は悉く、祖先の靈の惰性を受けて居る、それを滿足させねば此ケチン坊と言はれるやうな感がする、實際細胞の習慣性でさう思はれる。內心の衝動は之れである。細胞の働と自分の働の不平均が此衝動を起す、之れが不安である、此不安の起る時期は人生に二度ある、初めは青春期である、終は老後である。

青春期の內心の衝動は將來の發展を期し、自然的人生進化の目的に向つて男性は女性の力を欲し女性は男性の氣を望む、男女本能の性慾期の衝動である。人間として人生は自己

の働の跡がない、所謂善惡の行爲もなければ、罪も譽もない純潔な自己の心の衝動である。青春期の女性の愛はそれ故に本人には神聖である。男性の情も同一である。併し其遺傳として受けて居る細胞の本性は神聖なる惰力であるか否かは不明である。女性の愛の本性は他の愛の目的物たりし特種の男性に對する愛の惰力かも知れぬ。又た男性のそれは强姦的慾望の惰性かも知れぬ。斯る惰性が人間の進化中に尙ほ人生に保存されるならば後來其惰力は傳つて行く。惡行の人生に人間進化の大道を踏ましめず支那の如く宦官の制を置き、或は各國の刑法に基づいて斯る遺傳を滅するために殺すのは一面の道理がある。人生進化の理想から言つても、又た人間進化の理想から言つても當然である。それが自然の主義に適ふ人間の所爲である。併し全くそれで其習慣性が盡きると思ふは誤である。直接其時代に其習慣を人生に傳へること丈は止める、併し子は出來ぬとも其人間が死んでも尙ほ其氣には遺傳の習慣が殘つて居る。併しそれは丁度音の響が空中に傳播して次第に消え行くやうに消滅してしまう。それ故惡習慣を人生に傳へる恐れある者には支那の方法も馬鹿にはならぬ。

又た老後に於ける內心の衝動は遺傳的の習慣に基づく、人生の靈の發揮に對する慾望よ

りかも、一生中に自身の力で細胞に與へた習慣性のために起る。佛の前で流す隨喜の涙の熱の度と量の度は其罪惡の標準である。强慾非道の人間ほど細胞に與へた力は强い、體の働が止まつても各部細胞の惰力は止まぬ。汽車が急に止まつたとき、乘客が惰力のために互に衝突し合ふのと同一理である。罪のある人間が死に際に善に返るのは此衝突の力の反動である。所が實際、汽車が急に止まる時は人間は前へ向つて放り出される。又た糸に附けた石を回はして、其糸の切れたとき石の飛ぶのと同樣に、强慾な人間が有らん限りの罪を行つて急に死際に內心の衝動を起すとき、自身の心は後の方へ跳ねかへつて、善に返るやうでも、返るのではない、惡行爲が止まつたのである。其時其細胞は糸から切れて飛ぶ石や、汽車から放り飛ばされる人間同樣、强慾な習慣を持つたまゝ飛散する。これが自然の力の理である。

俗界で惡いことして高野へ參る善男善女が骨堂の骨で心を括られて皿に載せられた其時は地獄の鬼に捕はれた時の氣持である。括られながら、鐘の響が耳に入つて佛の救を思ひ出す、涙が湧く、それに骨の光が移つて死の努力で心に靈の影が映る。其影を見て體の中の不平不滿な細胞等が自己の本性を見出したやうに安心して鎭まりかへる。其心を以て本

堂の佛と蠟燭の焰の之を眺むれば人間進化の理想の域に達したやうな心地がするのは迷へる人間に當然な現象である。

肉眼で裏店にさらされる佛の像を見ても何とも思はず、却つてあれで一つ大儲してやらう位の考か或は盗んで一杯飲む考か、又は毀はして薪にでもせうかと言ふ位な考しか持たぬ人間でも、本堂に來て見ればさうは行かぬ。不可思議な力は唯だ一つ眼の涙である、涙は内心の衝動から湧き出る、其衝動は習慣性で働く細胞と自己の心の働の不釣合から起るのである。

佛法の權威は此不釣合が起らねば維持が出來ぬ。社會的宗教の權威はそれ故に人間の惡行が基礎である。性惡說に基づかねば宗教の權威は成立たぬ。形式に基づく偶像教と、惡事は神に救はれる主義の宗教は次第に惡しき惰性を人生に傳播し行くのである。斯くて人間は次第に自然の進化と逆行する、逆行するは人間の消滅を意味するのである。他に人間の自然進化に適するものあれば其人間に由りて淘汰されねばならぬのである。現代の白人と黑人と、黃色人の境遇を比較せよ思半ばに過ぐるであらう。靜死的平和を夢みて木佛金佛を夢想しながら、人間進化の眞の神と眞の佛とを理想とし進化し居るが如く信ずる徒は

汝の前に冷たい死の透明にして眼に見えぬ玻璃の鏡が立ち塞がつて、前途を遮ぎり居ることを悟り得ぬ。香の香に醉ふて人間の血を飲み、生の自由を保つ社會の形式的權威は悉く此所に人間を追ひ遣つて居る。此境遇の救濟は社會並に國家の細胞に等しき人間が自己の本來の性を自覺して形式習慣の繩や鏈より脫する外に途はない、そして新たな自然の統一の中心を見出して其周圍に自然進化に適する組織を作るのである。忘る勿れ、日本が世界に特種の歷史的傳說を持つことを其の特性は自然進化の行動の中心たる女精の靈であつたではないか。

二十四　花と嵐

魔法の山を去つて大作は橋本への道を取つた。案内所の前を通つて阪を下れば左に女人禁入の石塔があつた。國體に背き自然の衰滅を祈り、女精の德を呪ふ惡魔の筆跡の此四字に小便しかけて杖で擲つて下りかゝつた。脚は早い、間もなく人家の有る所があつた。見晴しの好い峯の中腹、山賊等でも一杯遣りに來さうな所、果して右にも左にも三味線、太鼓を武器のように並べた淫賣窟がある。白首連はまだ前夜の仇な嵐に吹かれたまゝ散らさ

れた花のように、髪は解け白粉は剝げお化のような姿で枕を並べて直ぐ道側の座敷に轉つて居る。吹ける嵐の種類を訊けば、高野の僧は無常の風と答ふるであらうか。笑ひながら大作は路を急いだ。文路に下りて左に石童丸の古蹟を見た。思はず歩を止めた。止まらぬものは彼が心の惰性であつた。朝の露はまだ文路の野邊に深かつた。可憐な童子の魂は死すとも此露を慕ふであらう。母と共に慕ひ來て尋ねて會ふても、知らざる父子の間には人間自然の眞理を描くか將た人間沒自然の實證を擧ぐるであらうか。自分は此所に文路の露に一滴の涙を添へて自然のために辯疏せん。

自然は男女兩性を保つ、男女は人間進化に適用される實體と言葉である。一個の單體細胞は男女兩性を備へる。男女兩性とは何である。一般自然界には男女はない。唯だ氣と稱する細胞の元子と力とあるばかりである。されど人間を初めとして一般の生物は男女と云ひ、雌雄と呼ばれて誤まらぬ實體が存在する。此實體の存在は自然と一致せねばならぬ。細胞の元子と力の關係とに一致しなければならぬのである。然らざれば自然の生物は悉く自然の進化と矛盾する。此矛盾の實否如何が自然主義と非自然主義との界である。

單體細胞の進化は分裂作用に本づく。分裂作用は遠心力の作用に由らねばならぬ。併し

遠心力と求心力とが相平均して進化の行動を續ける間は分裂は行はれぬ。遠心力の勝つ場合にのみ行はれるのである。此作用が人間にありては情の働に相當する。此働の惰力を受けて飛び去つた細胞は本體の求心力と或他の力と相合して平均を保つに至つて初めて自己の軌道が見出せる。その軌道は本體を中心として其引力と他の引力の影響を受けながら自己の進化を創始する。斯くの如くして細胞の分裂が續く間に著しく遠心力と求心力の惰性が分別され隨て形にも行にも色にも相違が生じて來る。それ故に分裂の作用に由りて最も多く遠心力の惰性を受けた細胞は、最も進化せる人間を首位に置き順次他の生物に見出されねばならぬ。太陽と地球と月との場合に於て地球は太陽から分裂して自己の軌道を見出した間に月は地球から分裂した。月の生物は求心力よりは遠心力に富んで居たに相違ない。月の生物に若し男女があつたならば遠心力の勝つた方の男の勢力が非常に強く地球の動物と月の人間は同じに相違ない。之れに反して若し太陽が冷却して生物が發育すれば太陽の世界の犬猫は地球の人間より男女の調和が取れるに相違ない。自然の主義は分裂で細かくして置いて、分業で仕上げて、統一的に逆に纏めて理想の物を仕上げるのである。人間が物を作るでも此理に由る。地球に男女兩性の進化した人間が出來たのは月が地球から

分裂したお蔭である。それでなければ地球の生物の公道的進化は遠心力ばかりで行はれ。隨て細胞は自己の存在の外、求心遠心二力の調和を必要とはしなかつた。絶對に男女の區別はなかつたのである。

太陽に對する遠心力と、月に對する求心力の作用が分業的に行はれ發達して、地上の細胞の進化にも分業的惰性が出來て來た。此分業が男女兩性の起原である。下等の階級から次第に進化して人間が出來た。進化は自然の理想である。人間は自然の分業作用で分裂して仕上げた細胞を再び理想の物へ組立てゝ行く進化の途中の最後の生物である。それ故に兩性は共に自己の存在並に使命を全うする働のため兩樣の惰性を備へる。自己の存在のためには遠心求心兩力を以て地球の自轉に等しき行動を營み、自然の使命に對しては分業的の單一作用を以て兩性合して完全なる行動を行はねばならぬ。遠心力の作用を分業とするは男性である、求心力作用を分業とするは女性である。遠心力の作用を情の作用と云ひ求心力の作用を愛の作用と唱へる。言ふまでもなく男女兩性共に情も愛も備へて居る。そして完全なる行動と存在の位置を保ち進化の途に就いて離れぬようには兩力の發揮と、維持と平均とが必要である。且つ又た自然の使命のために人生の進化を行ふ場合は男性は遠心

力の發揮によりて女性の求心力を挑發し、兩力の平均を得て氣と愛との作用が行はれ人生進化の起原を作つて行く。其氣の細胞は言ふまでもなく分業的作用は持たぬ。分業的作用は兩性の和合に由りて力は零となつて居る。唯だ其細胞の受けた惰力は自己保存のための兩性の惰力に止まる。

男女の區別の生ずるは丁度最初に細胞から兩性の分業を受けて進化した順序が繰返へされる。御丁寧な話である。人間は自然に任せて置くが可い。人間一匹の人生の進化に要する期間は現在、父親と母親とが漸く色氣の附き初めから子供の產れるまで位で、而かも人間は無雜作に出來る。中々出來ぬので大騷する人間や、出來ては大變と大騷する人間や種々あるが、此等は共に自然を恨んで居る。馬鹿な自然と共に恨む、一方は出來さねばならぬものを出來さぬから馬鹿と恨み、一方は出來ては困るのに出來かすから馬鹿と恨む。自然こそ、迷惑な話。折角無限の年數かけて此所まで仕上げて人間の作り方が分り、尙ほ其進化の途中であるのに馬鹿呼はりは聞えぬと自然も時々こぼすであらう。そゝて一言自覺せよ、出來ぬ譯は無い筈ぢや。自覺せよ、出來て困る筈はない筈ぢや、お前等の各自の行動は確か、又たお前等の氣と愛とは調和して居るか、自分にはチャンと恨まれる譯より

は出來ぬ譯と出來る譯がよく分つて居る。から自然は人間に話して呉れる。

母親が父親よりは子供に愛の深い譯は炳である、それが一つは人生の進化と人間の理想に本づく女性の分業的使命から起る。男の子供が比較的強く母親を慕ふのは自然である。男の子供には己に遠心力の分業的作用が發達しかけて居る、其結果求心力と相引かねば心の安全が保てぬのである。稍長じて他の女性と此作用が發すれば母に對する其力は薄らぎ行かねばならぬ。

地球上の男女兩性の關係は太陽と地球と月との三體の關係で變化し行く。地球から分裂した月のために發生した地上の男女の調和は三體の活氣を持つて活動して居た間が最も平均し且つ其の分業が必要であつたことが知り得られる。併し月の生活が絶えて以來、地上の生物の男女の分業は變化し初めねばならぬ。若し月が自滅して其存在を失へば男女の別は全く失はれるのは必然の道理である。戀愛に活きる人間は月の生命の保存と維持に全力を傾けねばならぬ。男を戀ふ女は、人間でも、獸でも鳥でも蟲でも悉く月やは物を思はすると叫ぶ。叫ぶのは自然である。月の衰滅が女性の引力の必要を認めず隨て女性の心が不安に打たれる。丁度船に乘つて、大波の間を行く場合船が上るときは身に力が入つて心の

安心が保て、反對に下る時は體の力が無視されたように自身と船と離れるような氣持がして不安に打たれる。之れと同一理である。此不安は單に女ばかりでなく、男にも同一な心の不安がありさうに想はれる。所が月がなくなれば、地球の求心力は單に自己保存に集中され、公道上に必要が無くなつて來る。隨て地球の公動は遠心力の一方に集中されねばならぬ。此傾向が男性を益女性から離れさせる力と化する。其の結果地球は背つて月の世界に生存した生物同樣に化せねばならぬ道理である。

陰陽說の眞理は此所に明證される。地球は月に對して女性の働をなし、太陽に對して男性であつた。それ故男子の心には女子の心ほど月の存在を念頭に止めはせぬ、月の性に對して地球の性は陰となり、太陽に對して陽となる。月が女性で太陽が男性と言ふ意義でない。隨て月がなくなれば男の世界に此地球は變つてしまう。其時代に至つて太陽の面が冷却し、生物の發育するに至れば其所に男女の別を生じて、此地球同樣に進化する。其の男女は凡ての點に於て相似で唯だ進化の度が異なるばかりである。其の進化の程度は計算される。地球の男女の進化は月と地球の進化の關係で定まつた。それ故に其の進化の有樣は地球が月に對して發した求心力の有樣と比例する。此關係が地球と太陽との間にも存在し

て太陽に發達すべき男女の進化は太陽の地球に與へる求心力の變化と時とに由りて定まつて來る。太陽の求心力は地球の遠心力と平均せねばならぬ。然らざれば地球の公道上の位置が失はれる。言ひ換ふれば月の存在を認めずして、單に地球が太陽に對する場合は、地球は純然たる男性の位置に立ち、太陽の女性の愛を挑發して自然進化の大道を維持せねばならぬ。之れが自然の理想に人間を進化させ行く道理である。眞の男女の關係はそれ故に月を離れた地球と太陽のそれが理想に相違ない。言ひ換ふれば一夫一婦、夫は遠心力を發揮して公道を馳せ妻は其夫に求心力を發揮して調和を保ち、兩者の力相合して自然の使命を達するのである。

此理に由りて考ふれば、自然の進化は三期に分かれる。第一の細胞分裂期は活動の潛勢力を保存し、其細胞の遠心力は本體に動搖を起させ、其求心力を挑發しつゝ飛び離れる。此の期が親を去つて新たなる進化の道に就く時である。第二期は分裂細胞の統一時代である。女性の求心力と男性の遠心力とが調和して進化の途を新たに開く時代である。此期を過ぐれば第三期の破滅時代に入る。求心力が消滅しかけて破壞され行く細胞は再び單一の遠心力に還元される。之れが進化の自然の順序と有樣である。

文路の露を眺むれば人間の進化に與へる一つの大なる教訓がある。刈萱道心は妻妾に其情を分つて居た。彼は男子の愛を二人の女性に分つて居たのではない。男子が愛を女性に與ふる場合は自己の存在を犧牲にする場合である。此力を他に與ふれば自轉の行動が保てぬからである。男子の他に與ふべき自然の力は情に限られる、公動の惰力は遠心力に限らるゝからである。之れに反して女性が情を他に與ふべき力は求心力に限られる、愛の力がそれでわる。女性は無限に愛を他に與へ、男性は情を無限に他に與へても其存在を失ふ恐はない。唯だ併しながら、其等の力は自然の使命を遂げ自然進化の必要に費さるべきものにして自己の快樂慾望に費さるゝは自然の理に反くのである。

世に情死が起るのは炳かに證明される、女性の情と男子の愛と調和さるゝからである。此の現象は不自然主義な社會に於ける特徴である。斯る社會に於ては男女の自然が阻碍される結果女性は自然の愛を注ぎ、男性は又た自然の情を注いで公道を取る習慣が與へられぬ、隨て女性は男性に愛の表現の方法も解せぬ、日本の女と英國の女とを較べてさへ著しい相違がある。又た同樣に日本の男子は女子に對して情を發揮し、其力に由りて女子の自然の愛を挑發する道を解せぬ。日英同盟國民の感情習慣の一致し能はざる所以は決して偶

然ではないのである。

女を愛する日本の男は直ぐ溺れる。その筈である。愛の力を消滅させるは求心力の消滅である。男子が女に愛を注げば殘るは唯だ情の力ばかりである。脫線するか倒れるか、轉ぶか飛ぶか、直立して行動の出來ぬが當然である。同樣に日本の女は男に溺れ易い、そして男を牽制する力がない、自分が確乎として不動の姿勢を取る丈けの自然の兩力を維持し得ぬからである。斯る場合其情夫が他に心を移す場合は愛の力のみ殘る。愛の力は地球の中心力と、現在の太陽の力である。焰となつて心を燃やし、身を燒くは自然である。男子から愛を去れば破滅し、女子から情を去れば燃え失せる。之れが自然である。女を愛する覺悟あらば最初より女の犧牲となる覺悟でなければならぬ。又た女は男に情を與る考へならば男のために身を棄てる覺悟が入る。夫婦はそれ故に女の愛と男の情との調和でなければ自然の理に反し、一夫一婦の實は實現されぬ、日本の如き不自然な習慣に一夫一婦の行はれさうな筈はないのに、それでも却つて世界中で日本が事實上眞の一夫一婦のある譯は情死のある事實が何よりの證據である。併し此現象は喜ぶべき現象か否か速斷出來ぬ。試に之を考へさせて貰ふ。

自然の進化の第一期は遠心力で求心力を挑發した分裂期であつた。男性の情で女性の愛を挑發して進化の初期を形成する準備である。第二期は和合統一期之れは平和である。考ふべきは終りの第三期たる破滅期を言ふ。今度は遠心力が還元されて、求心力と調和し軌道を踏む。併し此場合は第一と等しき外觀を保ちながら全く反對の性質である。第一期の場合は進化の初めである。第三期は終である。情と愛と結合して自然に隨ふものは情死して破滅の途に就き、一夫一婦を保ち得るものは活氣なき死塊の結合である。悅ぶべき自然の現象と速斷されぬのは之れがためである。

進化の第三期は細胞の消滅期と言つた。此期には女性の本性は消滅し行く。消滅するが故に破壞し分解するのである。人間が好んで僧となり、哲人なり、心を石の如く、而かも埃及かアラビヤか支那邊の山の岩石同樣になつてしまう。支那の南方の海岸に沿ふ丘上に巨大な花崗岩が自然の手で分裂されて奇形を示すのや、泰山の群崖亂立山序なしと言ふ形容の奇岩怪石は悉く第三期の消滅時代の巨人や偉人や、高僧や、聖人や、君子を偲ばせてならぬのである。

孔子は父を知らぬ人だと言ふ。石童丸と其運命は同一である。女性を棄てゝ何故か去つ

た。去るほどの男子は女に愛を與へずして、唯だ女の愛を挑發して、自己の軌道を情の力で踏んだのである。孔子自身女性に關しては餘り多くを言はぬのみならず、女子と小人とを比較する位冷眼視して居た。そして自身は喜怒色に表はさずと誇語して、心の熱を押へたのである。體は巨人の如くにして弟子と共に野に飢と戰ひつゝ彷徨はれた有樣は泰山上の巨岩や其谷の巨石に其靈が宿るようである。

釋迦は正に刈萱であつた。實社會の矛盾に感じ妻子を棄てゝ山に入つた。刈萱同樣に釋迦の跡を慕ふたものは多かつた。釋迦が社會を棄てたのは自然の矛盾に感じた結果であつた。彼は此矛盾を自然の理想に本づく眞理と解したのである。人間の此地球は第三期の進化に屬すと悟つたのである。之れに由りて、一切は空に歸ると言つたのである。之れに由りて宇宙に佛を現示して一切一に還ることを悟つたのである。之れに由りて死と破滅を悟つたのである。釋迦の悟は一面の眞理あつても、此眞理を捕へて社會の人間に敎えたのは間違つて居る。彼は勿論敎へなかつた。併し敎へたと同じことであつた。釋迦の悟の徹底せぬのは生死より人間を救ふ手段であつた。女性を棄てた僧侶を以て人間の靈を救はせたのは大なる誤である。誤と云ふよりは男性の意氣を失へる卑怯の行爲である。人間に奢を

戒め、殺生を戒め性慾の放縱を戒めたのは此破滅の時代の地球の境遇に適當する。併し斯る時代に自然の進化に取り殘された弱い不幸な女子を輕んじ、見棄て、壓迫し、度外視するは、情に馳せ、羈絆なき駒の心情に等しき男性の自然とは言へ、弱肉强食を釋迦は進んで人間に敎えたのである。

女性を見棄てた僧侶ほど歴史上社會に害を與へたものなく、又た彼等ほど冷血な人間なく、又た彼等ほど女子を喰物とした人間はない。歐洲でも結婚の式に先ち僧侶は處女を犯した話がある。日本でもそれがある。妙法が少女の法とは之れを言ふのではない。唯だ衰滅の世界と信じて男性の横暴が自然と心得、公然女性を棄てて社會人間の責任を脱却し卑怯にも弱者の保護に任ぜずして却つて弱者の肉を喰ふ僧侶等は縱し地球の自然の境遇を悟り得て自然の道を辿るとも、決して自然進化の大理想には適しはせぬ。僧侶等の境遇を自然より觀るときは肥桶の蛆である。排泄物、腐敗物を現世の人間の眞の理想と心得るは自然進化の毒蟲である。

日蓮を慕ふものは妙法を以て少女の德を救ひ、弱者を助け、縱し此世界は衰滅に歸するとも、此地球の進化の效を次の地球へ傳へる覺悟がなければならぬ。之れが世界を救ひ、

國を救ひ、社會を救ひ、人間を救ふ本來の道である。釋迦は此點に於て唯だ人間自己の心と境遇に囚はれて居た。彼は最初自然の矛盾に感じて妻子を棄てた男である。斯る男子に人間を救ふべき勇氣のあり得べき道理はない。此教を日本に引いて、此國體の神聖を瀆せる人間は眞に未世の臆病者であつた。日本の國體は女精の靈である。最も世界現代の境遇に悲運悲慘の有樣にある。之れを思はず、却つて亂世の內に女德を押へ、其自由を束縛し其の本性の愛を發揮すべき道を開いて男子の力で保護せざりしは、日本の大なる誤であつた。

愛の力は萬物一般に通ずる統一力の本體である。眞の理性は此力に由りて生ぜねばならぬ。男子の公道上の理性は情の反動として現はるゝ、情は愛の力なければ存在せず、同時に愛は情の力なしには起るものにあらず、隨て女子の公德たる愛の力は男子の完全なる情の力を待つて完全なることが出來る。同時に男女の私行上の德は理と情との圓滿なる調和に由るにあらざれば活社會に活動して私的存在の不動の位置は保ち得られぬ。

基督は此の點に於て地球の第三期の時代に適する最も勇悍にして且つ自然の理想に適へる男性であつた。基督教を奉じて其本體の愛を進化の基礎とする國民が現代に於ける最も

勇悍にして且つ偉大なる理想に活きる所以は炳かに了解出來る。

基督は釋迦同樣此世界の境遇を解した一人である。地上の萬物悉く飛散し破壞し消滅する悲慘の時代に在ることを會得した一人である。若し彼に釋迦より偉大なる點があるならば、女性の德の尊重の外、他にそれを認むべきものはない。之れが唯一の偉大なる基督の行爲である。又た之れが最も偉大なる人間の行爲でなければならぬ。

釋迦は地球の境遇を會得して其境遇の自然に人間を導いた。之れが自然に隨ひ、人間並に一般生物を救ふ道と悟つたのである。彼は女性の德の本體を悟り得なかつた。悟り得ても地球の女性は己に人間でないと悟つたに過ぎなかつた。男性と女性とは自然の位置に格段の相違あることを悟つた。そして早晩消滅すべき此地球に人間の進化は無い、人間に對する自然の意思と目的とは進化の第二期に於て盡きたと自覺した。それ故第三期の世界の人間は悉く、消滅の運命を待つより外何の意義もないと解した。此不幸、此悲慘な境遇から人間の靈を救ふが彼の信念の動機である。之れに由りて人間の進化は彼の眼中には全く無意義であつた。地球の境遇も、自己の運命も解せぬ馬鹿者同樣に考へた。そして其教に由つて印度を化して、地球の自滅に先だつた、國民を自滅の域に導いたのである。釋迦は

偉人哲者中の馬鹿であつた。又た彼は勇者中の臆病者であつた。

眞の勇者は戰に臨んで先登と殿とを兼ねる。此地球の現狀が已に落城期たることを解すれば最後まで此地球の統一秩序を保ち、地球に死耻かゝせずして、死花咲かせる覺悟が眞の勇者の心情である。釋迦は白旗を擧げて降參した、而已ならず、逆境の女性に同情を與へ其悲慘に男性の意氣を發揮させる道を敎えなかつた。之れが私に囚はれた臆病者の證據である。併し彼の私は通俗の私や個人の私ではない、次の世界に對する此の世界の私である。それに向つて一家を棄て身を投じて救濟を志したのは勇者たる資格は失はぬ。彼が如きは糞甞的勇者と言はれる。

眞の偉人哲人は眞の勇者でなければ得られぬ。此點に於て釋迦は眞の偉人哲人たる資格はない。彼は又た煙を見て直ぐ火事と狼狽出す人間より馬鹿であつた。遠方に煙を見て火事だ遁げろ、荷物なんかどうでも可い生命が一番大事だ、何うせ燒け死ぬから肉體も入らぬ、靈魂丈けは取り止めて早く燒死なぬ仕度をしろと自分から眞先に家を飛び出した。女や子供は何うせ矛盾な世界に生れて來た因果だ此世で地獄の火にかゝれと薄情か馬鹿か狂か勇者か偉人か哲人か、それでなければ出來ぬことを平氣でやつて衆生の靈魂救濟に何事

か夢みて暮らした。馬鹿でなければ何であらう。所が彼は其實大の火事場泥棒であつた。之れが人間を厭な僧侶に誘導する最大な力である。世間の人間を大騒させ家賓家財を棄てさせ、婦女や子供を路頭に迷はせ置きながら、後から其等を盜取る。宗敎が社會に毒を流し、人心の靈を救はん名の下に靈を消滅し、靈に活きる名の下に物慾を恣にせる僧侶の横暴は全く之れがためであつた。常人の考へ及ばぬ事に考へ及ぶが哲人偉人と言ふを得ば、釋迦は確かに其一人である。大なる火事場泥棒は其一人である。之れは彼が馬鹿から後の利功者に乘ぜられた結果である。日本の弘法等は釋迦の尻嘗めた利功者の一人に過ぎぬ。否火事場泥棒の手先であつた。佛敎國が破滅衰亡の運命に陷るのは當然である、一言にして釋迦を評せば、彼は統一力を無視し、愛は自然に反すと悟つた。之れが迷と誤の根本である。

基督の偉大は此愛を自然の本體と悟り、統一は分裂を救ふ根本と解した。之れが徹底した哲人の眼識である。愛は自然進化の原動力にして、且つそれは世界を救ふ唯一の力である。個人の存在も愛の中心力に由りて自然分裂の情と調和し初めて維持され擁護される。嵐の襲ふ花片の維持も中心力の働である。愛の力に由らざれば一切の統一、秩序順序は保

たれぬ。消滅期の地球の救濟は此愛の力に由るより外に途はない。死花咲かすのも之れである。時機の判斷を迷はぬのも之れである。愛は理性の本體だからである。

不幸にして日本人は愛の本體を知らぬ。愛とは何か意味を知らぬのである。僧侶は魚と女は知らぬ筈、それでも少しは知つて居る、眼に見る形丈けでも知つて居る。併し日本の人間の愛に對する知識は全く零である。男子が女子を愛すと言へば直ぐに男子の情の働と取る。事實情の働の外、女子は男子に用はないと解される。之れが地球衰滅期の慣性である。之れが男子の本能に適する習慣である。男子は女性を度外視し、其衰滅の運命を諦らめさせつゝ、自我の慾望を滿足させる。之れが現代の男子である。腐敗し、破滅し行く世界の渦中に囚はれる人間の行爲である。之れを彼等は自然主義と誇稱し、冷笑する。大なる誤解迷想である。

幾度か繰返し言ふ如く、人間の言ふ自然主義は自然の主義ではない。其理想でない、進化の方向ではない。自然の主義は此地球上の人間を完全に仕上げ、それを次の世界の材料にするが目的である。其故に現代腐敗し破滅し行く人間社會は自然の意思でも理想でもない。理想の人間は腐敗せず、永久に存在し、形にも、色にも、言葉にも、行にも、知識に

も、人間たる資格の一切に適した人格に外ならぬ。自然は此地球の進化の間に其人格を作り上げるが理想である。之れが此地球の使命である。其使命の全うされるまでは此地球は衰滅はせぬ。丁度大工が小舍掛けして何か普譜を始める。小舍掛け丈けでも大變それから道具を運ぶ、材料を運ぶ。そして切込みにかゝる。切屑が出る、鋸屑がたまる、鉋屑が積る材料の大部分は、大工の理想に適せずして棄てられる。木の運命は其時現代の人生觀を惹起す。大工の理想にかなつたもので、他の者から羨望されて居ても自分が何のために切られるのか、打たれるのか、孔を明けられるのか痛い目に合はされるのか自覺せねば、山の立木に比較して木生の矛盾を感ずる。そして新たな建物の立つ前に小舍が次第に古く雨漏でもし出して來れば大洪水だ流されると大騒し、大工の煙草の煙を見ては火事だと狼狽し、木は何うせ燒ける、木の靈魂丈けは救つてほしいと懸命に考へ込む。それで大工は棟上式の祭をして靈を救ふ。心配して居た小舍が毀されて、餘計なものは燒棄てられ、掃き捨てられて最初の形は悉く消滅したとき初めて大工の理想の建物が出來て、切られた木や、打たれた柱や、削られた板や、種々雜多な木の形や色や木目や、香やが各其特長を發揮して位置を保つて居る。其時各顔見合せて、餘計な心配を今迄した、併し辛抱した價値があ

つた。友達等は何うしたゞらう、大騒して居たがと話しながら一生の事を繰返して思ひ出す。

此木の思出が此地球の消滅後の人間の思出である。地球は消滅しても心配はない。早く消滅した方が却つて不潔でなく八釜敷なく、塵や芥や埃もなくなつて奇麗になつて結構である。其時には、そら大洪水だ、地球の破滅だなど言つて騒いで金を盗み、着物を取り、婦女を奪ひ、處女を姦する惡行の惡魔は川に流され、火に燒かれて、後には自然の理想に適した人格が殘り、それで新たな世界が進化されて行ける。此理想の人格が靈の發揮せる自然の人である。

自然は此の如き人格を宇宙の森羅萬象に通じ、各自の靈の性に由りて自己の世界を經營し、支配して所謂靈長たる人格を作り出すが目的である。かくて人間の努力の意義は解され、人生の存在も、權威も、本體も明にされ得るのである。何所に一點人生に矛盾が見出されるであらうか、何所に地球の消滅を恐るゝ理由があるであらうか、何所に不安を感ずる道理があるであらうか、又た何所に憎侶に依り、佛に由つて救はれねばならぬ靈の危險があるであらうか。そんなものは何所にもない、絶對に空を捕へて夢想し居るに過ぎぬ、

併し恐るべきは一つある。矛盾な事が一つある。消滅し腐敗し行く原因が一つある。其唯だ一つの事は自己の努力に由らずして靈の發揮を求めんとする一事である。之れが個人も、社會も國家も世界も何の效なく自滅の運命に陷る唯一の原因である。自然の失望、自然の落膽、自然の憤怒、自然の呪が自然に起る。日本の社會に女精の調伏ある所以は之れである。

二十五　水と花

橋本に下れば吉野川、流は花の吉野に因む。水は奇麗で心は洗はれ、下流を望めば一直線。それに沿ふ右側の山脈は河内和泉に界する勤王の本城であつた。墓はしき千早の城趾！　上流を望めば山嶺重なり、何所が霞の奥なるか一天晴渡りて心の底に雲もなく、見るもの悉く流の水、清き秋空の菊花のような氣持ちであつた。

今は丁度大正五年十一月三日午前正四時。今日は目出度く皇儲の萬歳を祝すべき當日である。此ペンの滴を以て無窮に靈の發揮を祈り、自然の理想と人爲の形式と調和一致して永く日本民族の粹を人類幸福の種子と化せんことを心に誓ふ。此一事は國民個々の努力に

由る各自靈の發揮に待たねばならぬからである。返らじとかねて思へば梓弓なき數に入る名をぞ止めん。

大作は夕方紅ねさす下流の空を、皇國の柱となりて逝ける英魂の道かと念じ、遮ぎる山も、雲もなく、山より出でゝ海へ貫く直流の特性に、思はず打たれて、我が心を正しつゝ五條へ急いだ。

印絆天の男と丁稚が道を遮つてお泊りならば安くすると言ひ出した。宿屋の名は三笠館五條ではお耻かしくはありませんと、言ひながら、大作の手から被蓙を取つた。宿屋に着いて通された室は例に由つて梯子の邊、今度は幸に下ではなくて上の三疊位な座敷であつた。大作は周圍を見廻はして汗ふきながら、包の中の浴衣を取り出した、其時學校の教科書を見て不圖連想したのは五條の彼が同窓生であつた。若しやと思ふて女中に訊ねた。此内がさうだと答へた。大作は意外であつた。彼の學友は歸省して居た、併し住む家は異つて居た。使を遣つて、都合で翌日會ふ約束をした。大作は二三日滯在に定めた。そして金剛山へも登つて見る決心をした。俄かに室も、座布團も茶道具も菓子も女中も何も角も變つた。變らぬのは大作一人であつた。顏色も、髪も、衣物も、荷物も、實は變つた待遇に

は適しなかつた。懷の工合は殊にさうであつた。三四等の國民が急に一等國民に列し、公使が大使の待遇を受けて萬事嬉しい裏面に懷と内證は對手に知られたくない氣持同樣である。

三笠館の離座敷で特別客しか入れぬ所へ上げられた大作は乞食が急に宮中へ連れられ、心配しながら意外な待遇を受けて、嬉しいと想ふ間もなくゴーンと響く夜明の鐘に目を醒まし、夢か、夢でも見ぬより增しだつたと後で想ふも計られぬと心中は聊か不安であつた。人間は厄介な奴、下に居れば不平が起り、上に居れば不安が起る。妙だと彼は風呂に入つて自分の室を見ながら思つた。成程不平は自分の心一つでは起らぬ。上から壓された反動で心に感ずる作用である。此野郎と氣張る元氣が不平である。此元氣なしには人間には靈の發揮は出來ぬ。要は不平に負けぬこと。不平に負けぬとは第一に外部の壓力に萎縮せぬこと。個人的にも國際的にも同樣に。第二に萎縮はしないでも、時には其壓力で横道に外れ、自分の守るべき當然の位置から動き出す。動き出すばかりでなく取るべき適當な方面も途も分らなくなる場合がある。こんな負け方は人間の意思に一定の自覺なき證據である。それ故不平に負けぬとは自己を枉げず、自己を動かさず、自覺せる意思の儘其境遇

を守り勢の轉換を待つか、若くは轉換の機を判定して壓迫に抗するを言ふ。之れが自己の發揮であり且つ靈の擁護である。

又た上に上れば何故に不安がある。何んでもない。位置の權威が增すからである。權威は人間が花の如く望み、好み、愛する一種の力である。山頂の岩と谷底の岩とは位置の權威に非常な差がある。谷底には大小善惡有象無象轉がつて馬の小便やら牛の糞を頭から浴びせられて居る。頂の岩は數が少ない。雨や風に打たれて形も磨かれ、人間には賞められ時には稱讃の文字など何のためか誰れのためかは別として彫り込まれ、圍を作り、鳥居を立て屋根まで作つて神樣に祭り上げられる。外から見れば結構な境遇である。何故に此岩に不安があらう。第一には位置の權威は位置の不安を伴ふ自然の定則がある、第二には位置の動搖は自己の重量に逆比する。此の二のつ道理で輕い人間が上に上れば自然不安が一層甚く感じられる。

湯から上つて宿屋の浴衣を着て膳に向つた。其の妻は何う見えたか、大作には無論見えぬ。女中は十六七歳の綺麗な妻であつた。二人は口もきかず、ろく〳〵顏も見なかつた。時ははや八時頃であつた。隣の室に誰れかまだ若い紳士が年增の女中對手に晩酌を傾けて

居た。年は取りたくないものだと言ふ聲が大作の耳に入つた。不圖見上ぐれば、女中も見上げて微笑した。何う云ふ人かと大作はそつと訊ねた。縣廳の方ですと答へた。

妻ども見たような婆さんはお話にはなりませんと隣の女中の聲がした。婆さん〳〵て、若いものほどそんなことを言つて見たがる、お前は一體幾歳だ二十三四か。何うも相濟みません、何かおごりませう、そんな年は昔のことです、お隣の花ちやん見たような若い時代は夢のようですと女中の聲は鋭く響いた。成程男も若い中でなければ花ぢやないよ、併し男と云ふものは若くても年寄つても同じことだよ、氣は變らぬ。吉野川の水が古から變らぬのと變りはない。川底が出たり、土手が毀れたりして川の妻は變つても水は同じだ、男の氣はあの水だよと紳士は聲高く話し初めた。大作は興に入つて聞き初めた、彼も女中に言ひつけて銚子一本取り寄せた。離座敷の二つの室に間の襖一重隔てた此光景は可なり面白い對照であつたであらうと想はれる。

花と云ふ名は名ばかりでも綺麗な顏が偲ばれるようだと紳士は再び話し始めた。花は櫻木と云ふ話があるが櫻に限つたことはない。何んな花でも、綻びかける蕾の妻は實際燃える勢だ。十六七の花の妻は實際自然の花同樣燃える心の焰か知らぬが顏色にほの現はれる

から、包まん包まんとしても駄目だよ。ハハハ、、、。大作は微笑しながらお花の顔を見た。彼女は俄かに伏向いた。頰には櫻のような薄紅の色が見る人の眼に輝くほど注がれて居た。

お前は中々話せるようだが、一體男の氣と女の心は何んなもんだい。大變六ケ敷お訊ですな旦那樣。イヤ僕は少々之れから研究する積さ、秘傳でも悟らねば、だん〳〵年寄ると若い連中と競爭が出來ぬ。若くたつて年寄たつて、氣に變りはない筈だが白髮や皺が裏切しやがる。矢張り若い方が勝だよ。何うしてどすか、自分の體の物までが若い方に味方をするからさ、御冗談ばつかし、と女中は何んだか話に興が乘らぬようであつた。聞いて興味を感ずるのは大作一人であつた。

何うだね、姉さん女は親切な男に限るだらう。それはさうです、と俄かに女中の聲が高くなつた。併し男の方の親切は口の方が便宜で値段が大分落ちて居ますからと笑つて附け加へた。さうかい、それなら取消し、何がそれでは女の注文だと紳士は切込んだ。矢張一寸見たばかりでも氣合ですよ、若い間は顏や口に騙まされますけれども。若い時でも其氣合が分るかね。中々旦那分りますまいよ、お前は何うだつた。私などは、尤も旦那のよう

な方に出合つたら、何うだつか分りませんけれど。や——偉い所に切り込んで來でた。今度は受太刀だな、と笑ひ出した。

旦那樣男のお方はお德ですね、お一人で先から先へ旅が出來勝手な事が氣放題出來ましてと女中は問ひかけた。女はもつと德ぢやないかと紳士は意外に問ひ返した。何う云ふ譯ですと女中は急に眞面目であつた。何所へも行かずにジッとして居て來る男を片端から撫切りにするからさと答へて笑つた。御冗談、女にそんな眞似が何うして出來ますかとます〳〵眞面目な聲であつた、形勢は再び變化して元へ還つた。

談冗なら冗談として置いて聞き玉へ、男の氣は水だと言つたらう、そして女は花だと言つたらう。花と水とは面白いものだが知つて居るか。女は少時考へたが默つて居た。花の命は水だらう、水がなければ花は無いが、元來花は動けぬから水が動いて行つて遣るのさ、所が花は慾張りで古い水は厭だとか、少なければ顏を顰め、色を變へる。其上に吸ひ上げるだけ吸ひ上げては、直ぐに吐き出して又た吸ひ上げる。水が動いて交る〳〵行て遣るので花は活きる。女もそうぢやないか、と言葉を切つた。

何んだか込み入つてさつぱり分りませんと女は答へた。こいつは困つた。何う言つたら

言ひかな、さうだ分つたお前は活きた花でなくて造花だらう、それでそんな經驗があるま
いと紳士は言つた。女中は恨むように、若い人と代つて貰いませうと言つた。大作は再び
前に坐つて居るお花を覗くように見た。お花も彼の顏を眺めた。二人は無言のまゝであつ
た。

女の愛つて驚くべき力のものだよ、口には何言はずに居て色で物言ふ、花とそれは少し
も變らぬ。男は其色で格別美しいと思ふほどの顏でなくとも心が動く。若い女の血の力は
凄い働を持つて居る。僕等見たような人間でも其燃えるような血を見せつけられると直ぐ
此體が震へるように感ずるんだ。花は種々數あつても花の命は水一つだから笑止ぢやない
か、旦那は何かその方の研究なさりますのですか、と女中は急に不審さうに訊ねた。ハハ
ヽヽヽ、今頃漸く訊き出した大分退屈だね、旦那は故意と退屈させて代つてほしいんぢや
ありませんか。僕かい、僕は喋言るときは一人でも喋言る、病氣なんだよ、遺傳の。

お前はまだ獨身だらう、何うせ夫を持つだらうが、男を選ぶときの話をしてやらう。大
作の耳は急に澄んだ、お花も顏を上げた。

僕の聞いた話や、考へた事柄や、それから實驗に由ると何んだね、男女二人向き合つて

居るとき、女の顏の赤くなるのは妻にせぬが可い、又た女の方から見て男の顏の赤くなら
ぬのは夫にせぬが可い。と僕は考へて居るんだ。女は顏を赤くしても平氣で物言ふ、男が
顏を赤くしたなら物は言へぬ。又た女が顏を青くしたなら物は言へぬ、男は反對だ、僕の
考は間違つて居るかも知れぬ、兎に角經驗があるなら較べて見玉へ。勿論姉さんや僕見た
よなのは別だ。御冗談ばかり、だつてさうぢやないか、此顏を見ろ、隨分赤いだらう、お
前の顏は反對に青い。之れが眞面目であつたら、好い夫婦だハッハッハ、女中は銚子を持
つて立つて行つた。隣の紳士は言行一致の人ではなかつた。一人でも喋言ると言つて居て
喋言らなかつた。

ヤー歸つて來たな、遁げて行つてしまつたと思つたよ、ハヽハヽヽ。旦那只今のお話は
本當ですか、と女中は訊ねた、さうとも、今度は夫婦喧嘩を話してやらう。そしたら前の
話が嘘か眞か分る。之れは日本や支那見たような國の特色だ。何うしてゞすか、日本が支
那見たような國と同じようなことがありますものか、女中は大に愛國心を發揮したつもり
であつたように聞えた。

所が實際異う所が少ないのだから驚く、まあそんな話は別として、かう言ふ譯がある。

日本の女は庭に咲いてる花で、支那のは室に咲いて居る花だ。西洋か、西洋のは野か山だね、それでも馬や牛には咲いて居らぬ、矢張り、草や木には相違ないさ。其他に多いのは浮草だ、水と離れず何時でも動いて廻つて居る。庭や室に咲いて居る花は觀て樂む人間から言へば毎日朝夕水でも遣つてやりさへすれば枯れも萎れもせず幸福に安全にして、風にあたる心配も苦勞もなしに極安樂だらうと思はれる。所が花の身になつて見ればさうして安樂に暮らせて居れるばかりでは氣がすまぬ。自身ばかりでない。人間のためばかりでない、自然のためを思はねばならぬ。何んですか自然のためとはと女中は遮つて訊ねた。子を造ることだと無造作に大きな聲で紳士は答へた。水を遣つたばかりではそれが出來ぬ、室の中に入れたばかりでは尙ほ出來ぬ。それで花に嵐が入るんだ。それで花の男と女が情を結ぶ媒介となる。日本の女や支那の女は家庭で嵐を起さねば、自分の男として眞に自由になる男は居ないのだから風波が起るのさと言つた。

本當ですよ日本の男は隨分我儘ですはと女中は分つて安心したのか、分らずに男を恨むのか一種異樣の語氣を漏らした。まあさう男を惡く言はんでも可い、それが自然と言ふものだ。花には嵐家には騷動、日本の芝居や、講談や何かそんな物は大抵お家騷動が種子だ

らう。日本人の耳にも心にも一番强く響く言葉は花に嵐だ、無常とか、矛盾とか、實は飲んだ酒もさめるやうな厭に心を刺されるやうな氣持がする。其氣持の種子が日本人の心に皆播かれて居るからさうなんだよ。

君等だつて男に夢中になられて千夜も續けて熱心に通はれたら、顏や形は曲つて居ても其眞心に參るだらう。それは男の情でも氣でもない、流れて廻る水とは異ふ。木を傳ふて昇る水が露となつて結ぶ水だよ、非常な力が入つて居る。男子の愛はそれだ。男子の顏の赤くなるのは此力の外にはないさ。男子の愛は離れはせぬ。それでまさかと云ふ場合には死ぬ覺悟だ。男と女と心中するのは男の方からは愛死で、女の方からは情死とでも言ふのだらうよ。男に愛を打ち込まれた女は男を可愛がるとか好きとか云ふ浮調子ではない。顏の色なんか赤くなるやうな安つぽい中でなくて一生懸命で青くなる。女は情で男にかゝつて居る。二人出合つても笑もせねば話もせぬ位眞面目なものだ、さうなると實際は凄くなるよ。まるで双方命がけだから。樂しいでせうね、そんな仲になつて見たら、水臭い言葉なんか一口も互に言はずに、そんな男だつたら外に女もこさえず、嵐も起りますまい、と女は言つた。さうだらうよ屹度それで夫婦になれたら何んでも遣れるだらうよ、二人火の